
魔導師の落し者

裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導師の落し者

【Nコード】

N2329S

【作者名】

裕

【あらすじ】

その国は外には無いものが2つあった。

1つ、国の中心となる生命樹。

2つ、生命樹の生みし魔導師。

そこに数十年前新たに1つ加わり、3つになった。

3つ、この国には色々なものが落ちてくる。

足りないものを諦めた魔導師と落とし物の女性の話です。

登場人物×用語

最新話までの容姿などちよつとした登場人物メモです。
紋持は既出の場合のみ記載あり。

あとは順次キャラが増えたら追加します。

() は通称。

ルキウス・ベル(ルキ)

男/27歳/魔導師

白銀髪/灰眼

残念不精

鈴木漣(ミオ)

女/25歳/落し物

黒髪/黒眼

仕事とわんこ好き

：雪中花紋

ロゼウイン・カナン・セイファート(ロゼ)

男/34歳/王・魔導師

蜂蜜髪/碧眼

笑うと残念美形

：生命樹紋

ハーミシユリエラ・イブ・プラリネ(ミシユ)

女/29歳/王妃・魔女

暗紫髪/赤眼

一番男らしい

：他国民だったのでなし

リリアーレ・ハイン・ヴィルベル

女 / 56歳 / 陛下の乳母

赤褐髪 / 茶眼

おかん

： 一枝三葉紋

ロヴェルト・ヴァン・セイグラン

男 / 27歳 / 魔導師

金髪 / 若草瞳

優等生

ライツェル・ベル・ウェルシア (ライツ)

男 / 故人 / 魔導師

ルキの養父

.....

話の中での用語など。

五十音表示になります。

ア

おとしもの
落とし物

空から降ってくる、別の世界の物。

漣も落とし物として、異世界にやってきた。

おんじつ
温室

ルキの部屋の一つ。

快適空間で昼寝がしたくなる。

力

がいたう
外套

魔導師の必須衣装。

快適空間を誇り、とても着心地が良い。

ゲンシヨノコ
原初の子

魔導師の前身とも言える存在。

最初の人とセイファート人の間に生まれた混血児。
癒しの力と滅びの力を持っていた。

サ

サイシヨノヒト
最初の人

神祖とも言われる。

魔導師の前身とも言える存在。

生命樹から生まれた人。
白銀の髪に、銀の瞳を持った女性。
命を育み、癒しの力を持っていた。

じよし
女兒

セイファート王妃が溲に向かって放った破滅の呪文。
童顔には堪える言葉。

セイファート
生命樹

国の名前。

国の象徴である生命の樹の名前でもある。
色は白い幹に、銀の葉。
白と銀は国の色でもある。

タ

ナ

八

ばいんばいん

セイファート王妃の胸。

フォントネル

異世界に浮かぶ二つの月の一つ。

淡い赤色の光を放つ。

もう片方はプラトンで、二つあわせるとレイシエスと呼び名が変わる。

プラトン

異世界に浮かぶ二つの月の一つ。

淡い水色の光を放つ。

もう片方はフォントネルで、二つあわせるとレイシエスと呼び名が変わる。

プレート
光板

太陽光を充電しておける便利物質。

電池の様に、ランプなどに取り付けると明るく出来る。

変な男

ロヴェルト・ヴァン・セイグラントの事。

ほあほあ

セイファート王妃が溘を表現した言葉。

マ

魔女
マジン

セイファート王妃の事。

魔女は魔導師とは違う存在。

魔導師マドウシ

特殊能力を身に宿している。

癒しの力を持ち、結界や瞬間移動、元素を操る事も出来る。

色素が薄い容姿ほど、力が強い。

ホイヘンス 上位魔導師・プラットリー 中位魔導師・ハドリー 下位魔導師に分かれる。

紋モン

しんめい 深名とも言つ。

個人が持っているマークで形は個人個人で異なる。

生命樹からの加護を受ける為に必要。

魔導師にとっては堰の役割を持つ。

通常は親から引き継ぐが、無い場合は魔導師が変わりに与える事も出来る。

ヤ

ラ

レイシエス

異世界に浮かぶ二つの月（プラトン・フォントネル）の通称。

ロココ

セイファート王妃が大好きな、フリフリかつ可愛い家具やその他。

ワ

0：その日

象徴たる生命樹、樹の恩恵で緑豊かな国。
その国は外には無いものが2つあった。

- 1つ、国の中心となる生命樹。
- 2つ、生命樹の生みし魔導師。

そこに数十年前新たに1つ加わり、3つになった。

- 3つ、この国には色々なものが落ちてくる。

今では「落し物」と呼ばれるもの。

落ちてくるものは、大きいものや小さいものなど様々。

落ちる場所や時間などもバラバラで、突然空から降ってくる為、生命樹の恩恵はたまた魔導師の力かと思われたが、調べてみると力の欠片も感じないものばかり。

それ所かそれが”何なのか”分かる者は誰一人居なかった。

数多くの魔導師が調査したが、結局は”もの”が何なのか分からなかった。

魔導師とは生命樹より直接恩恵を賜った者の事で、特別な能力を身に宿している。

能力は様々だが、魔導師は生命樹と世界の理を理解出来る・探求できる為、殆どの魔導師が只人には無い知識を持ちえていた。それでも分からなかった”ものたち”。

即ち分かった事は”この国には存在しないもの”という事だけ。

結局、何処から落ちてくるのか、何の為に落ちてきているのか、どうやって使うのか、分からない「落し物」は一箇所に集められ魔導師が管理する事になったが、人々の”落とし物”に対する興味は薄れていった。

「落し物」、今ではそれを珍しいと思う者も居なくなつた頃

「いやぁッあああああああああああああああああ……！！！！！！」

今日もまた「落し物」は降ってくる。

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

自分は欠落している。
何もかも足りないものだらけだ。

家族は居らず、気付いた時には一人で生きていた。

物好きに拾われて、5年間一緒に過ごした。

物好きに無理やり魔導師の道に進まされて、今の立場を手にした。
物好きはさつさと自分だけ死んだ。

物好き^{養父}が居なくなつて、また一人に戻つた。

欠陥^レしかない自分を最初は持て余したが、諦める事で早々に考える事を放棄した。

幸いにも今の立場なら、昔と変わらない暮らしが出来る。
そう^レ戻つた。自分にとっては物好き^{養父}と居た5年間の方が異質。
少しの煩わしささえ我慢すれば、何も変わらない。

* * * * *
* * * * *

魔導師^{ルキ}はその日、珍しくも人前に姿を見せた。

回廊を足早に進む彼を見て、すれ違う者は驚愕を隠せずにいる。
肝心の彼自身はそんな空気を物ともせず、無言で進む。
外套を目深に被っている為、表情を伺い知る事は難しい。

普段は人前を嫌い、一人で自身の実験室に引き籠もり好き勝手している彼は、物ぐさな性質なのか、もしくは徹底した人間嫌いなのか、日々の殆どを自室で過ごし部屋の外に出るのが稀であった。

外に出る時と言ったら、国の要請で魔導師の力が必要になった時か、人に呼ばれた時だけ。

人に呼ばれた時でさえ、最初は無視を決め込む徹底した引き籠もり。魔導師とはおよそ自身の欲求には正直な者が多く、研究を始めると部屋に籠もりがちにはなるが、そんな彼等からも一線を画した引き籠もりっぷりだった。

勿論今日の急な呼び出しにも相当な抵抗を見せている。

迎えに来た使者がドアをノックした瞬間に、部屋全体に結界をかけた外からの音を遮断してしまっし、無理やり術を破ろうとした者は転送術で強制的に遠くへ送ってしまった。

そんな事をしようものなら、罰則ものであり、例に漏れず魔導師^{ルキ}も処分を受けなくてはならないが、それでも彼は一人きりのひっそりとした空気から離れ難かった。

それでも諦めない相手をみて、段々と抵抗する事が面倒になった彼は、漸く呼び出しに応じた。

使者からしてみれば、もつと早く出て来い！と言いたくなるが、とある理由から口に出す事は無かった。

使者の後を黙ってついて来た彼は、一際大きな扉の前で使者が立ち止まり、扉の前に立っている騎士に声を掛けているのを見て、目的の場所に着いたことを知る。

扉には部屋の持ち主たる者の 紋 が彫られている。

紋 は深名とも言い、生まれた時から持っている。

家系・血統・家柄・地位を表す為に用いられ、また 紋 を彫った物を身につける事は自身に加護をつける事にもなるため、全ての人

間が持っている。

そう、全ての人間に。

「……………」

扉に彫られた 紋 を見て、魔導師^{ルキ}はあからさまに眉根をあげる。国で知らぬ者の居ない、この国の名と同じ生命樹^{セイファート}を模った 紋 。

使える人間は現在ただ一人。

そして、数少ない魔導師^{ルキ}を外に呼び出す人間でもある。

またろくでも無い事だろうと、魔導師^{ルキ}は早くも部屋に戻りたくなっ
た。

そんな心持の彼を置いて、入室許可を受けた使者は口上を述べてい
る。

「魔導師殿をお連れしました」

「入れ」

間をおく事なく本人からの声が掛かり、眉間に皺がよる。

ここで逃げてもしつこく追いかけて来るだろうと、過去に実際追
い掛けた事思い出して諦める。

さっさと用事を済ませて部屋に戻ろうと心に決め、魔導師^{ルキ}は自身
の名を名乗り扉を開ける。

「ルキウス・ベル 入る」

数分後、頭を抱えて彼は呟いた。

「出奔したい」

0…その日（後書き）

次はヒロインが出てくる予定です。

1：その前

ドンツと体に衝撃を感じた後の一瞬の浮遊感

「えっ?」

何 という漚みおの声は言葉にならなかった。

下から来る風圧に口を開くこともままならず、耳元を轟音と冷たい空気が通り過ぎていく。

直接あたる風の強さに体が千切れそうだった。

一体どうなっているのか確認しようとして、目が開けない事に違和感を感じる。

(…何これ…一体どうなってるの)

何だかわからないけれど心なしか、下に引ひつ張はられる力が強くなっ
た気がする。

その時一つの予感に気付いて、背中から嫌な汗が流れる。

(…これ…違う、引つ張られてるんじゃないやなくて私が)

「落ちてるっ!?!?!」

バランスを崩した事で、増す落下速度に心臓がうるさく鳴った。

理解した恐怖で体が強張る。

このままだと間違いなく待っているのは死。

相変わらず目をあける事は出来ず、今どのあたりを落ちているのかも分からない。

もしかしたらもう地上は目と鼻の先なのかも知れない。

この速度でパラシュートも無いまま地面に落ちたら死体もバラバラに粉碎されてしまうだろう。

自分の今後を想像してぞっとする。

何とかしなくてはと思うが、何も見えない状態ではもがく事しか出来ない。

焦る気持ちを堪えて、必死に瞼に力を入れる。

思うように動かない瞼が、それでも少しずつ光を捉えはじめ、

微かに目に入ってきたのは眼前一杯の銀色。

あっと思った瞬間に全身を襲う痛み。

体に当たる衝撃や耳に入ってくる音から木の上に落下したのだと理解する。

枝を巻き込みながらも止まらない落下。

咄嗟に手で顔を庇ったものの、むき出しの手足を枝葉が容赦なく傷つける。

肌を裂く痛み悲鳴を飲み込み、それでも無意識に枝を掴もうとしたのは生きる事への本能だったのかも知れない。

そして体に触れるものが無くなり、

一拍、全身が叩きつけられる。

「……っかっは」

息が止まり、咽から悲鳴にもならない声が出る。

地面に着いた事で漸く落下は止まったが、指一つ動かす事も出来ない。体の骨も何本か折れているに違いない。打ち身や切り傷でボロボロであるう体は弱く息をするだけでも全身に痛みが走る。

出血した為に意識を保っているのも難しく、段々と全身の感覚が無くなっていった。

もしかしたらこのまま死ぬのかもしれない

地面に吸われている血と同様、今度こそ意識は暗闇に吸い込まれていった。

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

何かが溼みの頬おほに触れている。

誰　　？おかあさん？おとうさん？

優しいに撫ぜる手に、これは安全なものと、安心して息をはく。

その時はつと息を呑む音がして、頬おほに触れていた何かも離れてしま
う。

心細さを感じ、それがあるであろう方向に顔を向け、意識も覚醒に
向かう。

ゆるゆると瞼を開けると、ぼやけた視線の先に灰色の瞳が私を見下ろして居た。

1：その前（後書き）

話の区切りで短いです。

2：その邂逅

ルキが呼び出されたのは、この国の支配者の部屋。

呼び出した男は、ロゼウイン・カナン・セイファート。

自身も恩恵を受けた優秀な魔導師でありながら、この国の王を務め上げている。

国民からの支持も高く、自身の力で治世を築いている実力者。

良くも悪くもルキが苦手としている人物である。

部屋の中はあらかじめ、人が下げられており王だけしか居ない。

恐らく旧知であるルキに非公式の話があるのだろう。それに王はルキが他人と一緒にの空間に居る事を苦手としている事を知っているので、話がある時はこうして2人だけの空間を作ってくれる。

ロゼウイン
彼は入室してきたルキを笑顔で出迎え様と、し

ルキの顔を見た瞬間に噴出し爆笑し始めた。

「ぶはっ！！！！ははははははは！！！」

顔が大きく歪み、髪を振り乱し腹を抱えて笑う男には王の威厳は欠片も感じない。

「ちよつまっ、いくら、なに、も、ぶっふはあっつっ！！！」

まるでひきつけを起こしたかの様で、言葉もキチンと話せない有様。終いには座っていた椅子からも転げ落ち悶絶している、それでも笑いが止まらないらしい。

チラチラこちらを見ては「山賊」だとか「雪男」だとか呟き、その

度に噴出している。
豪快に笑う様は、見た目の貴公子然とした雰囲気を悲しい位に裏切っている。

ちなみに、普段の彼は礼節と格式が服を着て歩いている様な完璧な紳士である

何も知らない者が見たら、泡吹いてぶっ倒れるに違いない。

段々不愉快になってきたルキは自分から声を掛けるが、その声は氷の様に冷え冷えとしていた。

「陛下」

「ふひっひっ… なっん、だね？」

懸命に笑いを堪えようとしているのか、口がプルプル震えている。
が、我慢しようとして顔の筋肉が可笑しなことになり、見るも無残な形容をしていた。

普段見慣れているルキでさえ、殺意を覚える酷い顔。ルキの苛立ち
はますます増した。

「…ロゼ、用件をさっさとええ」

段々面倒になってきたルキは、公用語を止めて、身内としての名を呼ぶ。

「…………… ああ、そうだったね」

ルキにしか許していない呼び名と、漂ってくる不機嫌な空気に、王^{ロゼ}
は居住まいを整える。

またくつくつと笑っているが、先ほどまでの醜態に比べればだいぶ
マシである。

「その前に一つ、次からは部屋を出る前に髭や髪を整えて来るんだよ。それじゃあまりに酷い」

ああ、それで笑っていたのか。

一瞬何を言っているのか分からなかったが、漸く彼が最初爆笑して

いた理由に思い当たる。

王は笑い過ぎではあるが。今更である。

そういえば随分と髭を剃って居ない事に気付き、目に掛かる髪を見てそろそろ切るうかと考える。

外に出ず、全て部屋の中で用事が済ませてしまふ為に、気付いたら髪も髭も伸び放題で、それでも人に言われるまで気付かないことが多々あった。

普段モツタリしたローブを身につけている為、相乗効果で年齢不詳に見える。

(本当はわたしよりずっと若いのにね…。)
じっと考え込む様子にロゼウインは苦笑する。

「君と同師に師事した間柄とは言え、一応わたしは王と言う立場だからね。周りがうるさいんだよ。」

一応、にわざとらしく力を込めて言うあたり、あまり困っている様には見えない。

しかし言っている事は尤もなので一応頷いておく。

「…次からは」

うんうん、と満足げに頷き、ロゼウインは本来の用件を語りだした。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

ルキは王の依頼で、生命樹の中に足を踏み入れていた。

国の象徴たる生命樹は一本ではなく、その樹が密集して出来た白い

森の事を指す。

森なのに白いのは、生命樹が白い樹だからである。

白い幹は樹というよりも、陶器の様な滑らかさ。葉は銀色で光に当たってキラキラと光り幻想的だ。

その姿は植物の持つ温かみよりも、神聖さを醸し出している。

生命樹はしかし、その名の通り命を芽吹かせ、活性化させる作用がある。この国が豊かなのも生命樹の作用によるものが多い。

森は代々魔導師に大事に守られ続け、今も変わらず国に恩恵を与えている。

そんな特殊な森は魔導師しか立ち入れない仕組みで、また森の中心に向かうにつれ、高位の魔導師でないと出入りが難しくなっている。一般人ならば、まず立ち入る事は出来ない。

森は一定の気候・温度を保っており、雨や強風なども全て遮断されている。

その為森を管理する者は、自ずと限られていた。

ルキはその数少ない一人だった。

魔導師にもランクがあり、それは体に色として現れる。

最上級の色は銀、白で、この色を体に持つ者は、生命樹から受ける恩恵が桁違いで、現代にはたった一人、過去にもこの色を持つ者は稀な存在。

次が灰色や金などで、王を含め、国の高位魔導師は殆どがこの色を持っている。

色が薄いほど高位に、濃くなるほど下位になるのだ。

ルキの瞳は灰色、髪は白銀をしてる。

当代唯一の最上級の色を身に宿す、それは稀代の魔導師である事を表している。

同属である魔導師たちからも一線を描く存在。

(あいつ…！)

心の中で舌打ちしながら先ほどの事を思い返していた。

ロゼウインがルキに依頼した事は2つ。

- 1 . 森に異変が無いか、守り人として見回って来る事
- 2 . 森に落ちた「落し物」を回収してくる事

森は立ち入る者・物を選ぶが、何故か国に存在しない「落し物」だけはその例に漏れ、森の中にも時々落ちてくる。その際落下の衝撃で枝が折れたり、樹が傷付けられてしまったことがあったのだ。

森を乱す可能性がある物を徹底して排除する役目を担っているのが上位魔導師である。

森全体に守護をかけてはいるものの「落し物」はそれを容易く通り抜けてしまう。

恐らくこの国に無い物なので、森の特殊な力も魔導の影響も受けないのだからと考えられている。

その為、定期的に上位魔導師が森へ向かい「落し物」を回収し、傷ついた樹があつたら補強してくるのである。

魔導師からしてみれば、役にも立たない「落し物」である為、いい迷惑である。

引き籠もりである事が有名すぎるほど有名なルキは、滅多な事ではその役目を担う事は無かったのだが、今回結界を通り抜けた「落し物」がいつもと雰囲気が異なると感知された為あまり公表したくなつたのと、森の中心と言える母樹ははぎ付近に落ちた為に、近づける人間

がルキ以外居なかった為である。

役目とは言え、体の好い雑用を任されてルキは何度目かの舌打ちをする。

結局はいつも王ロゼの思う様に、動かされてしまう。

嬉々として、森への出送りしに来た王ロゼのニヤつく顔が思い出され、イライラする。

「物分りの良い弟で兄として助かるよ」

「…弟じゃない」

「君の養父に師事していたのはわたしが先だからね、
来たなら従え、弟よ」 後から

前半は王として、後半は魔導師として話す。

「……………」

口ではこの男に勝てないと、ルキは口を嚙む。

その代わりに、きつく睨み付ける。

けれど視線を受ける彼は涼しい顔で軽く受け流している。

やはりこいつは苦手だ。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

森の周りを回って、守護の綻びている所があれば、貼りなおす。
そういった作業を黙々と続けていた。

面倒だ何だと思いつつ、ルキはこの森を嫌っていない。
寧ろ体に触れる空気は優しく、居心地が良かった。

(この森は変わらない…)

普段は自室の中でも気を緩める事が無かったが、ここではそんな必要もなく、無防備なまま過ごす事が出来た。身に宿る魔導の賜物か、恩恵母体とも言える森は体に良く馴染んでいた。

一際大きな母樹ハハが見えて来た為、そろそろ森の中心近くだと気付く。今回結界を越えた物はこの辺りに落ちている筈と、回りを見回し

しかし、そこに物など落ちていなかった。代わりにあった、モノ。

地面に横たわる物体を見つけた。

人の形をしているが、ピクリともせず転がっている。

その姿は打ち捨てられた人形の様で、手足は力無く投げ出されている。

全身もボロボロで生きているのか、死んでいるのか分からない。

ふと鼻を掠める生臭さに眉を顰め、物体を赤く濡らすものの正体に気付く。

酸化して所々黒く変色している部分もあるが、いまだに流れ出し体の下の地面を赤く染めていた。

目線をそのまま上に向けると、折れている生命樹。枝を巻き込み落ちてきたのか、折れた枝や葉が回りに散らばっている。

再び、物体に目線を戻す。

落ちてくるものは、いつも”物”だった。

「これが？」

返ってくる答えは無い

見た目人型である為、生き物であると予想をつけ、物体に近づき、膝をつく。

うつ伏せの為顔は分からないが、身体つきから若い女性のように見える。

あまり体を動かさない方が良いだろうと、体の上に手をかざし治療を試みる。

（森の力を受けない”もの”に果たして魔導が効くか分からないが）

意識を集中し、自己治癒力に活性の力を与える。

合わせて再生を加える事で、急ぎ表面の傷を塞ぐ。

思っていた抵抗も受けず、上手く治癒が進んだ事で、知らず寄せていた眉も元に戻る。

外傷も粗方治った事で、ずっとうつ伏せのままだった体を抱き起す。

それでも何の反応も無いが、小さく上下する胸に、確かに生きている事が分かる。

顔に掛かった黒髪を避けてやると、顔が良く見えた。

頬には少しだけ赤みが差し、暖かい。触れる肌は肌理が細かく触り心地が良かった。

次の瞬間、その口が笑みを浮かべるのを見て、ギクリとする。

（何…だ？）

思わぬ反応に、訳も分からず混乱する。

そして脛が震え、現れたのは黒曜石の瞳。

視線があった瞬間、金縛りにあったかの様に視線が外せなかった。

3：その後

目の前で毛の塊が硬直している。

えーと…これはどういう事なんだろう

何だか分からないけれど、わたしは男の人の腕に抱かれて寄りかかっている。

灰色の瞳の人は何かに驚愕した後、目を見開いて動かなくなった。もし、もし。これどういう状態ですか？

まだ体中に違和感を感じ、口を開くのも億劫なので、目でアイコンタクトを取ってみる。

日本にもある良い文化、以心伝心。目の前の人は日本人には見えないけれど。

むこうもこっちを見て来るので、負けずと見つめ返してみる。

男と女が無言で見つめ合っているのに、そこに艶っぽさは感じない。

如何せん目の前の彼は、長い長髪と髭で顔の半分以上が隠れてしまっている。

間から見える瞳や肌に、辛うじて老人では無いと判断できるが年齢が分からない。

顔だけ見たらイエティとサンタクロースを足して二で割った感じ。悪く言っちゃあ不精。何処か山奥に修行で籠っていたんですか？つて突っ込みたくなる程モサモサ。

年齢不詳な彼は、老人…では無いのに真っ白な髪をしていて、正直に綺麗な色だと思った。

年で色が落ちたと言うよりも、生まれつきっぽいのでアルビノなのかと思っただけけれど、アルビノは瞳も赤かった気がするし、白銀つてのが近いかも知れない。

ジツと見ていて、雪の様だと思った。積もった雪に日が当たってキラキラしているのに似ている。瞳も生まれて初めて見る灰色。

うん、落ち着いた色で安心感を覚える。

そうこうしていると、目の前の彼が現実に戻ってきた様で、瞳が揺れた。

「？」

話かけられる。が、

「…え」

「。？」

「…何て、言ったの？」

「……」

耳には音が入ってくるのに、何を言っているのかが分からない。知らない言語。

地球にある言語では無い、と思った。

何故なら目の前に居る彼の口から出る音が、まるで肉声に感じない為。

こんなに近くに居るのに、その口は動いているのに、まるで電波の悪い携帯で話をして、声が途切れ途切れに聞こえて来る様に、耳に入る音が、まず違う。

ボイスチェンジャーを使っている様には思えないのに、声が機械的なのだ。

目の前の肉体と音が一致しない。

彼はまた何かを言おうとして、すぐに止める。

眉を寄せていると思われる表情に、彼が苛立っていると感じく。

彼が小さく口を鳴らした。

うっ舌打ち。ちょ…ガラ悪い。

何故か自分が悪い事している様な気になり、ビクビクする。。

そして何を思ったのか、思い切り自分の親指を歯で噛む。

指を噛むのはお行儀がわる

いとは言えなかった。

口の中に血の味が広がり、彼が傷付けた自分の指をわたしの口の中に突っ込んだんだと気付いた。

結構深く切ったのか、どんどん広がる味に、吐き気がした。

慌てて吐き出そうとしたが、彼がもう片方の手で口を押さえて来た為、それも出来ない。

「ンツ　　！！！！」

やめて、と手を外そうとしたが、痛い位に押さえ付けられビクともしない。

彼の瞳は真剣で、強い光を宿しわたしを見下ろしている。

何故こんな事をされるのかが分からない。急に豹変した彼に、恐怖を感じて涙が滲む。

吐き出す事も出来ないまま、唾液と混ざった血が口の中に溜まり、苦しくて飲み込んでしまう。

咽が鳴るのを見た彼の片眉が上がり、瞳が爛々と輝いた。

次の瞬間、口から手を外され思い切り咳き込む。口の中のサビ臭さに、嗚咽が出た。

「…けほつごほつふ、ひどい」

「こうするのが一番手っ取り早かった」

耳にクリアに聞こえて来た声に、パツと顔を上げる。

いつの間にか、彼は立ち上がっていたが、今度は音も意味もちゃんと聞こえた。

「……」

涙で滲み、視界がぼやけるが、確かに彼の口から聞こえて来た。

「…何、したの？」

混乱した頭でも、何とか返事を返せた。

「おれの血を媒体にした」

「……」

んん？説明お終い？何か色々ともつと説明する事、ないの？
続きを期待し、じつと待つてみるが一向にその気配を感じない。
どうやら彼の説明はこれで終わりらしい。

勝手に優しい人だと思っていたけど、実はぶっきら棒な性格なのか
もしれない。

手は優しかったのに、詐欺だ。

彼が何かをした事で、言葉が理解出来る様になったのはいいが、それ
だけである。

一体わたしは今、どういった状態なんだろうか。

彼にはあまり頼れ無さそうなので、自分でしっかりと考えないとい
けない。

それでも、現在頼れるのは彼だけで。何とか頼んでこの状況を理解
する事から始めよう。

意を決し、彼に向き合おうと立ち上がるうとして、眩暈でよろけてしまった。

彼が腕を掴んでくれたので、顔から転倒することは免れたが、へたり込んでしまって体を起こす事が出来ない。

それは貧血だったのだが、混乱していた頭はそこまで気が回らない。

あれ？足がガクガクする、何かあたまも揺れて

耳の奥でキーンと言う音が聞こえて、そのまま目の前が真っ暗になり意識を失う。

直前に体を優しく受け止められた気がしたが、考える前に何も分からなくなってしまうた。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

腕の中で意識を失う女性を見て、少し無理やり過ぎたかと思う。

魔導師でもないのに、森こに存在出来ている事から、この国には”無落し物い存在”である事は間違いない。魔導師ではないと判断したのは、黒い瞳と髪。そして触れた時に欠片も感じない魔導の気配からだったた。

ならば体の内に魔導師たる自分の媒体血を取り入れる事で、一時的にでもこの国に”有る存在”として認識させ事が出来、言葉も理解出来る様になるかもしれない。

そう考えての荒業だった。

上位魔導師としては、稚拙な技ではあるが、今までに無い特殊な例なので仕方が無い。

彼としては治療の際も、血の媒体の時も、あまりにもすんなりと魔導が受け入れられた事の方が驚きだった。

今まで【この国に無い物なので、森の特殊な力も魔導の影響も受けないのだろう】と考えられていた為、「落し物」に魔導は効かないと言うのが一般的な認識だった。

ただし彼女の様子を見てみると、そう答えを出すには時期尚早な気がしてならない。

これが物質と生物の違いから来ているのだとしたら、それまでだが、ルキは恐らく違う理由があると思えてならなかった。

どちらにしる、ここで時間を潰しても何にもならないと、森を出る事にする。

これを王に報告しに行った際に見られるであろう反応に、早くも頭が痛くなるが、我慢するしかない。早々に報告を終わらせて、早く自室に戻ろうと自分で自分を励ます。

彼女を抱え直した所で、ふと目の隅に見えた物に意識を持っていかれる。

大きく見開いた目に映る、ソレ。

「…馬鹿な。」

先ほどまでは何の変哲も無かったソレに、今では顕著に現れているソレを見つけ、驚きを隠せない。こんな事があるのだろうか。

先ほどまで自分が立てていた仮説と合致する事実、彼女を抱く腕に自然と力がこもった。

4：その美女と野獣

* * * * *
* * * * *

空気を感じて、立ち止まる。

肌の上を静電気が走り、パチパチと音がした。

突然の事に驚いた所に、追い討ちをかけるように不協和音が鳴り響く。

それまで聞こえていた、雑音が全て、その音で塗りつぶされた。

何処、ではなく、空気が、空が 鳴っていた。

不安と恐怖が緋い交ぜになり、声から悲鳴が出たがその音もかき消される。

そして音は鼓膜を破る程に大きく音がなり、地面を衝撃が走った。

一瞬体が浮いたと思った時には投げ出されていた。

地面と空の感覚が無くなって、ガラスを引っ掻く様な音が上から聞こえてくる。

顔を上げようとして

* * * * *
* * * * *

覚醒は緩やかにもたらされた。

すうと目が覚めて、視界に天井が映し出される。

たった今まで夢を見ていた気がしたが思い出せない。

何度か瞬きをして、顔を左右に動かす。どうやらベットに寝ている様だ。

けれど触れる布団の感触や匂いが、慣れ親しんだ自分の物では無い為、自分の部屋では無い事に気付く。

何処かに泊まった記憶が無いので、益々知らない部屋に疑問を抱く。体を起こし、部屋の様子を見回してみる。

枕元に小さな間接照明があるだけで、部屋は薄暗い。窓も無いので、今が何時なのか分からない。

そういえばと、腕時計を覗き込むと明け方4時過ぎ。

随分早く起きてしまった。

もう一度部屋を見回してみるが、やはり全然知らない部屋だ。

部屋の中はこれでもか！と言う位本で覆われており、棚に入りきらない本は床に直置きされて積み上げられており、本の山が出来上がっていた。よく崩れないなと思う絶妙なバランスだ。

辛うじて、溼が寝ているベットの場所だけ空けた空間があるだけで、それ以外は本。本。本。

ベットはあるが寝室と言うよりも、書庫の様な感じがして古書の力ビ臭さを感じる。

酔っ払って書店の倉庫に不法侵入して、寝潰れてしまったのだろうか。

そんな馬鹿な。 わたしは飲んでも意識が混濁する様な事は今までない。会社の同僚と飲みに行っても、介抱はすれどされた事は一度も無い。意識もしっかりして、よろける事も無く自分の足で家にも帰っていたので、人に送って貰うと言う事も無かった。

送る、と言ってくれる人は居たがそれよりも別の人を、と辞退していた。

隙が無さ過ぎると同僚の娘には言われたが、自分でもどうすれば良いのか分からないのだから、仕方ないだろう。おかげで酒に関わる色っぽい情事何てこれっぽっちも無い。

ハッと思ひ当たり、半そでのブラウスにスキニーパンツ 服を着ている事にそっと息を吐く。

人生初の失態をした訳ではなさそうだ。

ふと手元を見ると、自分の手に自分の物ではない服を掴んでいる事に気づき、この部屋の持ち主の物だろうと想像をつける。

厚手の防寒着の様だが、今まで見た事も無い形状をしているので、眉を顰める。

袖が無いケープコートの様だけど、大き過ぎるほど大きいフードが着いており、バランスがおかしい。

いつだか映画で見た魔法魔術学校の生徒が着けているマントみたいだ。この部屋の持ち主はコスプレが趣味なんだろうか。

布団から身を出した事で肌に寒さを感じ、ぶるりと震える。

回りを見回して、何も無い。仕方なく心の中で持ち主に断りをいれて、コートを羽織る。

人が身につけていた訳でもないのに、コートはほんのりと熱を持ち暖かかった。

その事に疑問を抱くが、心の隅に追いやりゆつくりとベットから足を下ろす。素足に床の冷たさが直に伝わった。

そして本の中に少し人が通れるスペースがあるのを見つけて、本を倒さない様に慎重に歩く。

それほど離れていない所にドアを見つけて、結構狭い部屋なのだと気付いた。

取っ手に手をかけ、もう一度部屋の中を振り返る。

意を決して取っ手を回そうとしたところで、ドアの向こうから足音を聞き、咄嗟に一步引いてしまった。

次の瞬間ドアは勢いよく開かれる。

!!!!

「起きたか」

それだけ言われた。わたしはと言うと、何とか誰とか思う余裕もなく、ただビツクリした。

何の反応も見せないわたしに、目の前の毛むくじゃらな人が首をかしげる。

そう、毛むくじゃら。叫び声をあげなかった自分を褒めてあげたい。ジツと目の前の人を見つめて、灰色の瞳と目が合うと近視感を覚える。

（あつこの人　　）

記憶がどんどん戻ってくる。森で、会っている。

同時に血を飲まされた事も思い出し、警戒して半歩後ろへ下がる。

下手に近づいて、また何か突っ込まれたら大変だ。

そんなわたしの行動が気に食わないのか、クイツと顎を動かすと、何も言わずに後ろを向いて歩き出してしまふ。

着いて来いって事だろう。一瞬だけ逡巡して、すぐに彼の後を追う。

まずは、自分の状態を理解しないと何も出来ないのだから。

部屋の外に出ると、足元に小さな明かりがあるだけで、やはり薄暗い。ここが彼の家なのだとしたら、視界の狭さや暗さで苦労しないのだろうかと思った。

少し先で立ち止まっている彼は、わたしが部屋から出たのを見ると目の前のドアを開けてさっさと入っていく。わたしも慌てて追いかける。

彼に続いて部屋に入った瞬間、目の前が真っ白になる。

また目が見えなくなったのかと思ったが、落ち着いて目を凝らして見ると、落ち着いた温室の様だ。暗い所から明るい所に来た事で、開いていた瞳孔がまぶしさで錯覚を起こしたのだろう。

その部屋は円形のドーム状しており、天窓がいくつか設置され、

外からの灯りが取り入れられている。

白く塗られた壁に灯りが反射して、少しの日差いで部屋全体を明るく照らしていた。

温室　　と思ったのは部屋中にある植物の数から。

幹が細く背の高い樹が植えられており、風にそよぎ揺れている。葉は日差しを適度に遮り木漏れ日を作り出していた。

床を覆う芝生の様な草は所々小さな白い花を咲かせて、コントラストが綺麗。入り口近くには砂が引かれ、サボテンの様な植物が植えられてる、何だかちんまりと存在する様子が可笑しかった。足音からチヨロチヨロと水音がするので、床下に水を通しているんだろう。色花がないから華やかさは無いけれど、わたしは一目で気に入ってしまった。

先ほどまでの肌寒さが嘘の様で、ぽかぽかと暖かい。何だか昼寝したくなる様な部屋だ。

澪は知らないが、その部屋の空気は生命樹の森に非常に酷似している。

そこで先に入った筈の彼の姿が見えない事に気付く。奥の方に小さなテーブルと椅子が置かれているのが見えたので、とりあえずそちらに向かった。

テーブルの近くにある少し大きめの天窓が明けられて、風が入ってきている。

人様の部屋で勝手に椅子に座るのもどうかと思い、立ったままどうしようかと思っていたら、後ろから声を掛けられた。

「どうした、座れ」

振り向くと、彼が手にトレイを持って立っていた。

相変わらず言葉が一つ足りないんじゃないかと思っただが、言われた

通り椅子に座った。

はいはい、仰るとおりにしますよ。

初対面に近い人間の言う事に大人しく従うのも癪だが、社会人として顔には出さず素直に応じる。

元々あまり人に反発する性格でもなく、事なかれ主義なのだ。人に合わせるのは得意、得意。

それに最初は驚いたが、よく見てみるとモサモサしているのも味があつて良いじゃないか。

無口でぶつきら棒なもの、スティックだと思えば、許せる。

何だ家の愛犬と同じじゃないか。真つ白な毛サモエドといいそっくり。

勝手に愛犬認定されたとも知らず、彼はわたしの前に、一つカップを置いて飲み物を注ぐと、また出て行こうとするので、

「あのっ！」

慌てて引き止める。

「なんだ」

「これ…」

目の前のコップを指差す。 これ、飲んでいいの？

多分わたしの為に入れてくれた 匂いから多分紅茶 だが、

間違っていたら小っ恥ずかしい。

「疲労を回復させる、飲み」

ううむ、扱い難しい人だ。どういう罰ゲームだと思うが、危害は無いので我慢しよう。

血を飲まされた事については、この際考えない事にした。

カップを手にすると、彼はさっさと別の扉から出て行ってしまった。注がれたお茶からは、ほのかな甘い香りがしてくる。

疲労回復ってハーブティーかな？見た目からは想像も出来ない、お上品なセレクトだ。

本の部屋やらこの部屋やら、本当に同じ人の趣味なんだろうかと、疑問を覚える。強引なのか優しいのか、おかしな人と関係を持つこ

とになってしまったものだ。

口に含んで、ふんわりと広がるベルガモットの香りに、自然と笑みがこぼれる。

（　　美味しい。）

何だかんだと緊張していたのか、お茶を飲んで一息つくとも体から力が抜ける。

疲労回復と言っていたが、本当のようで、体の中がポカポカして何だか疲れも取れたみたいだ。

気持ちに余裕が出てきたので、もう一度回りを見回してみた。

そして、先ほどまでは気付かなかった部屋に入ってから感じた違和感に気付く。

そう、部屋が明るいのだ。

もう一度腕時計を見てみるが、4時半を過ぎている。しかし日の当たる部屋の明るさはまるで昼の明るさと暖かさで、明け方には思えない。腕時計は太陽電池式で先日充電したばかり、遅れているとは思えなかった。これの意味する所は？

ここに来て色々とおかしな事が多々ある事に思い至り、慌ててもう一口お茶を飲む。こういう時こそ、落ち着かなければいけない。

そうこうしていると、人が戻ってくる気配を感じた。

（よし、彼にまずは話を聞こう。）

再度、自分を落ち着かせて気持ちを奮い立たせると、彼が入ってくるであろう扉を見つめる

入ってきたのは儂げな雰囲気の人でした。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

森で彼女を連れて帰ってからが大変だった。

王城に帰還したら王に任せるつもりだったが、着いても彼女が目覚めないままだった為に、出迎えに来た王に彼女を抱えている所を目撃されてしまった。

全くあいつは 王が出迎えるなんて、聞いた事が無い。

想像していた通り、驚愕の表情を浮かべた後にニタニタと嫌な笑いを浮かべ始める。

馬鹿笑いしないのは、一応ここが外で、回りに護衛の騎士なども居るためだろう。その騎士共は興味深い目を隠そうともせず、この状況を観察している。 目を潰してやるうか。

二人になったら、何を言われるか。頭が痛くなる。

「この状況、詳しく聞きたいね。」

「……………」

これ以上視線を集めているのが苦痛になり、さっさと彼女をロゼに押し付ける事にする。

おれの意に気付いたのか、ロゼが腕を広げて受取ろうとするが

「おや」

クンツと引かれる感じがして下を見下ろすと、小さな手が外套を掴んでいる。

おまけに胸に擦り寄りられて、硬直する。

「どうやら、彼女は君の方が良いようだ」

「……………」

ぎこちなく顔を向けると、目の前のロゼは面白いものを見た！と言う顔をして目を輝かせている。

「仕方ない、色々と聞きたい事はあるけれど、報告は明日に延ばそう。ちゃんと、しっかりと、優しく、彼女の面倒を見るんだよ、ルキ。」
何か余計な単語も混ぜたことを言って、ロゼは引き返して行く。騎士もその後が続いたので、おれだけが残される。

その後自室に帰るも目覚めない彼女に、仕方なくベットを譲ったものの、途方に暮れるしかない。
これを一体どうしろと。

様子を見に行った時にも起きていなかったら、と思っただが杞憂に済んで良かった。

酷い怪我だったが、治療が間に合ったのか後遺症も無さそうだ。今の所、魔導の反発も無い。

体力も茶を飲ませたので、今は回復しているだろう。

ロゼに報告すれば、あとは王が全て引き継いでくれるだろう。

徐々に外に出たが、半日出ただけでも数週間分の疲れが体に溜まった様な気分だ。

（早く、面倒事から開放されたい。）

ため息をつき、彼女の所に戻ろうとした所で、壁に掛かっている鏡に映る自分の瞳と目が合う。

そういえば、次に訪問する時には身なりを整える事を約束していた。面倒ではあるが、自分で約束を承諾してしまったので、守らない訳にはいかない。

こういった変な所で生真面目な所が王にからかわれる原因なのが、ルキは気付いていない

髭を剃り、背中の中ほどまで伸びてしまった髪を切り、全体的にこざっぱりとした所で鋏を置く。

久しぶりに見る自分の素顔は、まるで他人を見ている様で見慣れな

い。
灰色の瞳も白銀の髪と合わせて顔全体をボンヤリとさせている。自分の無表情さに、気に食わなさを感じて鏡を裏にひっくり返す。王や養父は好きだと言うが、瞳七髪七忌々しい色が昔から嫌いだった。荒れた気持ちを抑えて、ルキは部屋を出る

* * * * *
* * * * *
* * * * *

麗人が目の前にいる。

切れ長の瞳に、伏せ気味の睫毛が目元に中性的な色気をかもし出してドキドキする。

髪や瞳の色の所為か、ゆるく閉じた口元に物憂げな表情は、今にも風に飛ばされそうな儂さを醸し出している。

髪がショートなのが勿体無いが、男装の麗人風で美貌を損なっていない。

今までお目に掛かれた事の無い、整った顔に感嘆のため息をつく。

(えれえ別嬪さんが出てきたよっ！)

こんな人が会社に居たら、絶対仕事にならない。

寧ろ絶対に居るわけが無いし、想像すら出来ない。

こんな人が子供生んだらこれまたとんでもなく眉目秀麗なお子さんが生まれるだろう。将来がとても楽しみな人である。

ほう…と見惚れて、お茶をもう一口。

「それを飲み終わったら行く所がある」

「ぶはっ

!!!!!!」

口に含んだお茶をそのまま盛大に噴出す。わっ汚い、ごめんなさい。つじやなくて、今なにか間違った声が聞こえた気がする。口からお茶を垂れ流すわたしを見て、目の前の麗人が凄く驚いている。

「何をしている」

うわっまた聞こえた！！

どう考えても目の前の麗人から聞こえて来る声は、低音で男性の声。女性ではない事にショックを受けたが、それよりも先ほどまで会話をしていた、彼と声が全く同じである事に驚きが隠せない。

確かに目の前のお方は白銀の綺麗な御髪をしているし

そんな馬鹿な事があるんだろうか。まさかと思うが、あまり信じたくない。

目があった瞳も 灰色だった。

「拭え、見るに堪えん」

ああ、こーい言う方してましたよね、貴方。

そう言つて麗人はハンカチを渡してくれる。

言っている事は間違つてないが、酷い言い様である。

ああ と世を憐む人の気持ちがあった。

美女と野獣の映画が好きだったが、現実は物語より残酷だ。

野獣だと思っていた人が、実は美女でした。

5：その国

毛もじゃ改め、麗人のお名前は、ルキウス・ベル、魔導師って言うていた。

わたしの名前は、鈴木 澪、日本人。

麗しの素顔を隠していたのは、罰ゲームでもなんでもなく、単純にだらしなだけだった。

　　「ただ、不精なんだよ！折角の美貌が泣いてるぞ！責任者出て来い！」

（　　もう何を言っても聞かないんだよby王　　）

　　「つい先ほど、初めてお互いの自己紹介をして知った事実だ。」

ルキと呼べと言われたルキさんは、何度も確認したけれどやっぱり立派な男性で、こんなに惚げでけぶるような色気を漂わせているのに！男性で、非常に勿体無い。女性にしては体の厚みがあるが、厚手の服を着ているので、パツと見には気にならない。

黙っている時はそれこそ薄倅の雰囲気が高い

「ぐへへ姉ちゃん、マブイじゃねえか。今夜一発どうだい」

「いや、お戯れを」

「ぐししし、泣こうが喚こうが誰もこねえよ」

「あーれー」

　　「なんて事が、容易に想像できる。」

その事につくりしていると、青ざめて微妙な顔をされた。何だか若干引かれている。おかしいな、口には出していない筈だけど。

* * * * *

* * * * *

ここは、わたしが住んでいた地球ではなく、別の世界セイファートと言う国だということを教えて貰った。まるつきりファンタジーだ。わたしは「落し物」と言う異世界から落ちて来た存在らしい。この国では珍しくも無い、けれどわたしはとても珍しい存在だそうです。というのも、「落し物」で【生物】が回収されたのは、わたしが初なんだそう。

そりゃあ、【生物】が空から降ってきたら、不味いだろう。というか回収前に終わってるだろう。……よく生きてたな、わたし。

そういうと、本当に生きている存在が落ちてくると言うのは、初めてだそう。魔導師は国全域に結界の様な物を張っていて、結界を通り抜ける物を見過ごす事は無いんだそう。

だから今まで落ちて来た物は、全て欠かす事なく回収されていると言っていた。

10割確実と言い切れるとまで、言われた。国防総省が知ったら咽から手が出る程欲しがりそうだ。

今回もわたしが結界を通り抜けた事で、ルキさんが回収に来られたんだと。

そもそもわたしが落ちた場所と言うのが、この国でも魔導師以外が立ち入れない特別な森らしく。普通わたしの髪の色と瞳では、近寄る事も出来ない場所に居た事で、わたしは「落し物」認定を受けたそう。

思いっきり物扱いだ。くそう。

見つけたルキさんは、傷だらけでポロポロのわたしを治療して連れて来てくれたとの事。

それには素直にお礼をした。高い所から落ちた時の痛みを体が覚えている。本当に、よく生きていたなと思った。

彼の話聞いて、何となくそんな気がしては、いた。けれど信じる信じないはまた 別の話だ。

ルキさんが助けてくれた。その事は間違いないし、感謝している。けれど、それ以外の事については、そう簡単に納得出来るものではないからだ。

あまりにも、今まで私が生きてきた常識とかけ離れ過ぎている。ファンタジーは好きだけど、実際にそう言った物が有るか、無いか聞かれたら、わたしは無いと即答出来る。あくまでもファンタジーは空想・想像上の事である事前提として楽しんでいるのであって、現実にそんな事は無いと知っている。

これでも現代人として25年生きているのだ、ここが異世界だとか言われて、直ぐに、はいそうですか。とは言えない。

寧ろ、信じたくない。と言うのが正しいかも知れない。まだ何処かで、これは現実ではないと望んでいる自分がいる。

森での事も、そもそもあの時は意識が朦朧としていたから、何か薬とかを使って意識を弄繰り回されていたら とか、つい裏を探つてしまう。

そんな事だったら、今頃無事では済んでいないのだが、それはそれ、これはこれ。

この期に及んで物分りが悪いと言われてたとしても、現実と幻想の間でフワフワしている状態では、あともう一押し、ほんの一押し何かがあればわたしは諦める事が出来ると思う。

納得していない事が顔に出してしまったのか、ルキさんは深く息を吐く。

「何か見せれば納得するか？」

「見てみないと何とも……」

試すような言い方をしてしまい、彼は低く唸って考え込んでしまう。今のわたしは凄く感じが悪いと思う。言葉が足りなくても、今まで彼はわたしに対して誠意的だった。

それなのにと、困っている彼の様子を見て、少し申し訳なく思う。

何故こんなに真剣になっけてくれているのか。

わたしが同じ状況に立たされたら、さっさと投げ出してしまっているだろうに。

本当に、この人の事が良く分からない。

何か考えていたが、諦めたのか口を開く。

「難しいな」

「そうですね。」

すみませんね、面倒な人間で。

「ロゼ…陛下の方が口が達者だ」

「…ヘイカ？」

平価？兵家？陛下？？？

「元々、会わせる予定だった。」

突然の話についていけない。ヘイカとはあの陛下で良いんだろうか。まさか、陛下に説明なんぞさせるといふ事か。ファンタジーと言うのはともかく、陛下と言ったら上流階級の人間だ、いきなりそんなトップに会うなんて心の準備が出来ていないので焦った。

「それから服だが…」

彼が見ているのは、わたしの服　ではなく、彼自身の外套。

「あっ！すみません、勝手に借りてて」

「いや…」

そういえば、勝手に外套を失敬していた事を思い出した。

慌てて脱ぐと彼に返そうとして、　自分の格好に驚く。

白いブラウスは赤黒く染まって、所々穴が開き、ボタンも取れかかっている。黒のスキニーも同様で、黒のために血の痕は目立たない

が、太ももやふくらはぎの部分は大きく破れて肌が見えている。

何処の猟奇殺人！？

傷だらけでボロボロだったと言うのも納得の酷い有様だった。ベツトでは暗く、その後は外套を羽織っていた為に今の今まで気付けなかった。

ショックを受けているわたしの前に、静かにルキさんが近づいてくる。

変わりの服を貸して貰えないだろうか、頼もうとして、ルキさんの次の行動にギョツとする。

鎖骨の下、胸元辺りに平手を添えられ、微妙な位置だけに心臓がばくばくした。

ルキさんは、目を閉じてジツと黙っている。

（ 見た目これで油断していた、無闇に近づくと危険だ、この野郎！ ） 心の中では大啖呵を切っていたが、実際はガチガチになり一言も発せられない。顔も赤くなってるかもしれない。

上手く動かない自分の体にやきもきし、早く手を離して欲しいと一心に思う。

視線を手の添えられている胸元に落とすと、次の瞬間、目の錯覚かと思った。

「嘘」

血で染まっていた部分が、じわじわと吸い込まれる様に縮まり、範囲が小さくなっていく。

解れた糸と糸がくっ付き、裂かれた穴が塞がっていく。

まるでビデオを逆再生している様に、服が修復されていく。

ルキさんが顔を上げた時には、取れ掛けたボタンも綺麗に着いて、わたしの服は元に戻っていた。

絶句。

今度と言うつ今度は信じない訳にはいかなかった。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

カツカツと、靴底が擦れる音が廊下に響く。

その後ろを小走りで追いかける。

わたしが納得したと分かった途端、早速陛下の所に行くと言われた。心の準備がと言ったが、そんな物は必要ない、どうせ無駄になると言われた。どういふ事だろう。

裸足のわたしに、ルキさんが渡してくれたのはストラップが沢山ついているサンダルで、グラティエーターっぽい。

そして何故かまた、彼の外套を着せられた。体型が違うので、肩の位置が合っていない。

そのままだと裾を引き摺ってしまうので、手で裾を持ち上げて歩かないとすっ転びそう。少し羽織っている分には快適だが、着て歩くのは毛布被って歩いている様で重い。

しかも今度はフードまで下ろされてしまい、前が見辛い。

ルキさんも同じ外套を着用していたが、こちらはフードを下ろしていない。

部屋を出ると、ルキさんは迷いの無い足取りでどんどん歩き出した。ゴシック調の石壁で出来た回廊を進む。あの部屋の外はこうなっていたのかと、興味が引かれるが、ボケツとしてたら、置いていかれそう。

コンパスが違うので、足を動かす速度をあげないと、自然と距離が

開いてしまう。

人を連れて歩いているとは思えない、その速度。競歩か。

速度を緩めるとか いやいや、余計な期待はしないぞ。

カツカツカツと大きめの音が回廊に響いて、人の目を集める。

所々で侍女さんらしき人や、騎士っぽい人、それにルキさんと同じ外套を羽織った人などとすれ違う、皆がみんな彼を見て、ハッと息を呑む。

やっぱり、彼の美貌は異世界でも見惚れるレベルなのかと関心していた。

けれど、よく見ると様子がおかしい。

彼を見る瞳に宿る、隔意、忌避、畏怖 ？

何故…、そんな目で見るのか、思わず足を止めてしまう。立ち止まった私と目が合うと、相手は眉を顰めて気まずそうに視線を逸らす。回りを見て、他の人も同じ。

（ なんだか、嫌な感じだ。 ）
少し先で振り返った、彼が、声をあげる。

「構うな」

ルキさんは、これに慣れてるらしい。

何が何だか本当に分からない。

心に引っ掛かりを感じつつも、仕方なく、そんな思いを振り払う。

王城と言う位だから、偉い人は高い所に居るかと思いきや、このお城はほぼ平屋造りだった。

多少の階段はあっても、四、五段の低い物ばかりで、横に広がった造りの様だ。

今わたし達が向かっているのは、王族が住む後宮で、陛下の執務室に直接向かっている。

陛下と会うと言われて、謁見とかさせられるのかと思ったが、非公式な会合なので執務室で会う事になっているそうだ。それを聞いてホッとする。

今まで皇室・王室関係の人間と関わった事などないから、謁見マナーなんて分かる筈が無い。

廊下と言う廊下、扉と言う扉を越えて、漸く執務室についた時には、息が上がってしまっていた。

競歩で1km近く歩くなんで、会社勤めの人間にはちょっとしたスポーツだ。

それに比べて目の前の背中では、息も乱さず涼しいものだ。余裕ですね。貴方。

ルキさんが声をかけると、中から穏やかな声が聞こえて来る。私も一息ついて気合を入れる。

よし、行くぞ。

6：その陛下

アイボリーのカウチソファに、ローズ刺繍のクッションやレース織のクッションがバランスよく置かれている。

程よい柔らかさで、長時間座つても腰が痛くならないだろう。

白を基調としたアンティークテーブルには薄いピンクの花の透かしが彫られていて、芸が細かいなと思った。テーブルの上に広げられたティーセットにも、同じ透かしがあるのでセットで作られたんだろう。

その他の家具や暖炉も同じ色合いで揃えられて、これはどうみても

お姫様のお部屋だ！

上を見ると、やっぱりあった、シャンデリア。なんとというロココな趣味をしているのか。

薔薇は薔薇はの歌詞が頭の中で木霊している。

気分はベルサイユへいらっしやい、だ。

「驚いたかい？これも妻の趣味でね、すっかり内装をいじられてしまった」

「いえ、素敵だと思いますよ」

向かいに座る陛下は、少し照れ笑いで、紅茶を飲んでいる。

王妃様、可愛い趣味してますね。

こんな可愛い家具の似合う、可愛い王妃なんだろうなー。

日本でもロココ調のプリンセスルームに憧れる女の子は沢山居るしね。

わたしも自分で住むのは別として、ホテルに泊まる時とか友達の部

屋がこれだったら、キヤーキヤー言っでテンション上がったしまう
だろう。

何だっでこんなほのぼのした会話をしているかと言っで、陛
下の執務室に問題があっだ。

執務室は大よそ想像していた部屋だっだ、ただ一角を除いて。

わたし達が入っできたドアに近い所に、ドンツと重厚な机が置かれ
ており、床は硬質な大理石で覆われて仕事します空間が出来ている。
陛下がお仕事するのが、ここ。

そしてその奥に、今わたしが座っでいるロココ空間が出来ている。
床にも暖かい毛足の長い絨毯が引かれて、硬質な雰囲気は一切無い。
執務室を挟み、左右に陛下と王妃様の寝室と言っで並びのため、結構
頻繁に王妃様がやっでくるそうだ。

そんな時には、ここで一緒にお茶を楽しんだりしているんだっで。
ほおほお、ラブラブですな。

ちなみに執務室とは言っでも、どちらかと言っでと個人の書斎と言っ
感じで、キッチンとした執務室は別の所にちゃんとおっで、ここはあ
くまでもプライベート用なんだそう。

そりゃそうか、後宮に仕事とは言えみだりに人が立ち入ったら防犯
も何もあっだものではない。

ここが後宮で、いきなり自分がそこに入れた事も驚きではあるが。

わたしは部屋に通された後、立ち話も何だからと、その空間に座ら
された。

何処からとも無く侍女さんが現れて、テーブルにお茶の準備をして
いくと、さっさと部屋を出て行っでしまっで。その間一言も話さな

った。プロだ。

そして陛下はわたしの向かい側に腰を下ろし、ルキさんが座れる場所はわたしの横か陛下の横だけなのだが 何処に座るのかと思つたら、陛下が座っているソファの背もたれに寄り掛かるだけだった。

わたしからは完全に背を向ける様に腕を組んでいる。

それにしても、私は今、美の集大成を特等席で堪能していると思つた。

目の前には対照的な造形美を持つお二方。

陛下は蜂蜜、ルキさんは白銀はくぎんの御髪ハニーフロンテをしており、二人揃うと何とも眩しい組み合わせ。ちなみに、陛下は瞳も紺碧で、正にお約束を守つてくれている。

金髪と来たら碧眼だ。

ルキさんと違ってけぶるような色気は無いが、男らしいハッキリした目鼻立ちの美丈夫だ。

色合いから陛下が太陽なら、ルキさんは月の様で本当に対照的。うむ、眼福。この二人を肴にしてお酒が飲めそうだ。

「そう言う君は、美しい黒髪だね」

(うわっ、心を読まれた！これが異世界人の力！)

「いやいや、そんなに熱心に見られてたら、誰でも気付くよ」

(だから、心を読まないでっ！)

「遊ぶな」

始めて会った、陛下王族はとってもフレンドリーだった。

* * * * *

* * * * *

「ルキから聞いているかもしれないが、改めて言おうか。わたしはロゼウイン・カナン・セイファートと言う。一応この国の国主を務めているよ。親しみを込めてロゼ様と呼んでくれて構わないよ」

「お初にお目に掛かります。鈴木 澪と申します。この世界では多分ミオ・スズキと言うのが正しいと思います、陛下」

わたしがそう言うと、陛下は後ろを振り返りニツと笑う。

「可愛い子で良かったな、ルキ」

「……」

何やら日本でやったらセクハラ・パワハラになりそうな事を言われている。が、無視無視。

これ位スルー能力が無いとやっていけない。

「どうやら体調も回復した様だね。昨日は酷い顔色だったから心配したよ」

心当たりの無い話だから、わたしが目覚める前の事だろう。一体何人にだらしない寝顔を晒してしまったのか。出来る事なら脳味噌開いて、記憶を取り出したい。

「おかげ様です。ルキさんが良くして下さいました
うんうんと、陛下は好々爺の様に頷いている。

「それにしても見事な黒耀の髪と瞳をしているね。その色はこの国では珍しいんだよ」

「そうなのですか？」

「そうだね…この国は国民の殆どが緑髪なんだ。次に赤や茶など、局地的に言えばこの王城には金髪が多いけれど」

「では、白銀は？今話しに出ませんでしたけど」
目の前に見える後頭部を見て何とはなしに言う。

「……そう、だね。ルキの色はかなり珍しい」

一瞬言葉が詰まったのは気の所為ではないだろう、もしかしたら触れてはいけない部分だったのか。

陛下は少しぎこちない笑みを浮かべている、ルキさんの表情は分からない。

「…けれど、とても綺麗です」

つい、口をついて出てしまった。

「え…？」

陛下が呆気にとられた顔をして、ぽかんとしている。

「ルキさんに会った時、まるで積もった雪の様で…綺麗だと思いました」

ジッと見ていて、雪の様だと思った。積もった雪に日が当たってキラキラしているのに似ている。

頭の中であの時のことが思い返される。

目を閉じていても鮮明に思い出せる。色く

「…驚いたな、師と同じ事を言う人間に初めてあった」

陛下の声は、喜びと少し寂しさを感じる様な響きをしていた。

その時ルキさんが、静かに手を握り締めたのをわたしは知らない。

自分の言葉の所為で微妙な空気にしてしまったので、話題を変える事にする。

「ワザとらしくてもいいんだ！」空気読む”と”スルーする”はわたしの十八番でもある。

「あの、ずっと気になってた事があるんですが、いいですか？」

「ん、なんだい？」

「大体の事はルキさんに聞いたんですが、わたし以外の「落し物」って何があるんですか？」

わたしより前に既にこの世界に落ちてきていた物

この世界には無いと言う物だと言うが、実際なんなのか実は気になつていた。

今の所、わたしとこの世界で唯一共通する、落ちて来たモノ。

ふむ、と思案する様子を見せる陛下。その時さり気無くルキさんと視線を交わしていた。

「それも良いかもしれないね、少なくとも害は無いだろう。一つ、私が保管している物がある」

害とは、まさかそんな見た目危ない物があるんだろうか。

少し待ってなさい。と言って陛下は執務机の方に歩いていき、引き出しを探っている。

手のひらに収まるサイズの、何かを手にし戻ってくる。

戦々恐々としているわたしに、はい。と手渡されたのは

円形の光沢あるフォルムに金属独自の重みが手に加わる。竜頭にあるボタンを押して蓋を開閉させると中には1から12の数字が均一に配置され、長針と短針は10と2を指して動きを止めている。フック部分のチェーンは外れてしまったのか付いていない。

「懐中時計」
……懐中時計だ。
間違いなく、懐中時計だ。

「ミオはこれが何なのか分かるのかい？」

「はい、この」

そういつて、二人にも見える様に文字盤を向け、懐中時計について説明する。

二人は（今度はルキさんもこっちを向いていた）、初めて聞く事実に驚いている様だが、わたしの話が本当に興味深い様で真剣に聞いている。

「つまり、そのカイチュウドケイはミオの世界にあつたものだと？」

「ええ：見てください」

二人には理解できないだろうけど、わたしには理解出来る文字。

M a d e i n J a p a n

「ここに書かれている文字には、わたしの国で作つたという意味があるんです。恐らく落下の衝撃で壊れて動かないのかも知れませんが、本来ならこの真ん中にある2つの針が決まつた時を刻んで、正確な時間を示すんです」

「画期的だね。残念だな、是非動いている時に見てみたかった」

「……違う物で良ければ、お見せ出来ますよ」

えっと顔をされる。わたしは外套の裾から腕を出し、腕時計のベルトを外す。

この世界から一緒にやって来た、わたしの物だといえる数少ない物。陛下に手渡すと、何だかすごく嬉しそうな顔をされる。

欲しかった玩具が手に入った小さい子供の様に、目を輝かせている。ルキさんも興味を誘われたのか顔を覗き込んで観察している。

「形や大きさは違いますが、同じ時を刻む道具です。今は：9時40分、わたしの世界だったら会社：仕事が始まった位の時間ですね。」
あまりにも真剣に眺められるので、こっちが恥ずかしくなってきた。腕時計なんて珍しくもないけど、こちらではまた文化が違うんだらう。

その後、他の「落し物」が集められている場所に連れて行って貰える事になった。

今まで存在さえ不明だった物が、わたしが現れて解明されたのだ、興味が湧くのはわたしだけでは無いらしい。陛下は浮き浮きした空気を隠そうともししていない。ルキさんは

それ、気に入りましたか？

陛下から奪った腕時計をわたしのだけとまだジツと眺めていた。

カルチャーショックは万国共通らしい。

さてそろそろ、行こうか。と言う所で突然扉の外側が騒がしくなってきた。

バタバタと人の立てる足音と、「お待ち下さい」とか「下がれ」とか言い争いの声が聞こえて来る。

一体なんなんだと思っていると激しい音と共に扉が開かれた。

「この私の後宮に女を連れ込むとは、いい度胸だなっ！カナン！！」
バーーーーーンと効果音が聞こえてきそうな勢いで人が飛び込んでくる。

いや、実際ドガアアアン！バンツ！と言う効果音と共に。

7：その女性

彼女等を見た、その美しき後ろ回し蹴りを。そして見ていただけだった。

両開きのドアの片方が吹き飛び、わたしの真横を掠め陛下の執務机に当たって大破する。
扉の向こうには足を上げたそのままのポーズで立つ女性。

「ハーミシユリエラ！」

陛下が声を荒げた。怒号と共に部屋に入って来たのは、ウェーブの掛かった暗紫色の長髪に、同色のロングドレスを着た長身の女性。たくし上げたスカートからスラリと伸びた足は美しい。文字通り、ドアを蹴破って入室して来た。その人は高いヒール音をさせて、陛下に詰め寄った。

「私に寄越せ！そんな女、お前が手をつける前に私が切り刻んでやるっ！」

相当怒っているのか眉は吊り上がり、頬には赤みがさし、食いしばった口元から覗く犬歯が赤いルーージュと合わさって獰猛さを表している。

女性を追い掛けて来たであろう、騎士や侍女達はあまりの迫力にあわわわしている。

わたしは周囲のそんな様子に気付かずに、ただ一点に目が奪われ釘付けになっていた。

女性が動くたびに、顔の下でたわわに揺れる大きな二つのモノ

ギリギリのラインでドレスに覆われているが、今にも零れ落ちそう

なポリュームだ。

(すっ…すごい巨乳。本当にゆっさ、ゆっさしてる。)

そういうしていると、女性と目が合ってしまった。

すぐさま、女性がキツとわたしを睨み付けてきた。

「お前がそうか！……！！しかもこんなに幼い女児…だと…！！！」

女性が「女児」を唱えた。「ぐはっ！」 澪は避けられなかった

澪に 1000 のダメージ！！！！

澪は動けないゲームオーバー

地味に気にしている事を指摘されて、コンプレックスをナイフで抉られた感じた。

童顔だと言われるのが悔しくて、なるべく濃い目の化粧やスッキリしたパンツスーツを着たり、年相応に見える様に努力していたのだ。(誰かつ！ホ ミお願います！)

まわりで陛下が「違うよ誤解だ」とか「落ち着くんだ」とか宥めようとしているが、頭に血が上っているのか益々怒りが高まってしまっている様だ。

「 さぬ 」

地の底から湧いた様な低い声がした。

ビリビリと床や壁が揺れ、城全体が軋みをあげる。

女性の怒りで震える体から、怒りのオーラが立ち上っている様に見える。髪は重力を無視した様にフワフワと持ち上がり、複数の蛇がのたうつ様に動いている。

(メ デ ユー サ !)

重力総無視とかそんな事は、目の前にある恐怖の前では意味を持たない。

「私を娶っておきながら、この仕打ち許さぬ！暁の災厄と呼ばれし魔女に喧嘩を売った行為、万死に値するぞ！生まれてきた事を後悔させてやるわ！」

そう言った瞬間、彼女を中心に爆発が起きる。床が割れて建物全体を揺らす爆音が鳴り響き、圧迫された空気が外に逃れようと強風を巻き起こす。

わたしの所にも爆風が押し寄せ、思わず腕で顔を庇う。

やってくる衝撃に耐えるが、いつまで待ってもそれはやって来なかった。

恐る恐る顔を覆う腕を下ろすと目の前には白い壁。顔を上げると白銀の髪が見えた。

ルキさんが素早く私の前に立ち、壁となってくれた様だ。

怪我は　　と思っただが、かすり傷一つ負っていない。これが魔導師の力と言う事なのだろうか。

部屋の大理石床は割れて吹き飛び、破片が壁や天井などに突き刺さっている。カーテンは破けて辛うじて、レールからたなびいているだけ。窓は無くなっていた。

ただルキさんの周囲1Mだけ綺麗に何もなく、細かい砂がさらさらと流れていた。

ルキさんの体の脇から向こう側を覗いてみると、陛下に後ろから羽交い絞めにされた女性が怒鳴っていた。

「ハーミシユリエラ！落ち着くんだ」「放せ！貴様から灰にしてやるるか！」と言う遣り取りが聞こえる。

今のがあの女性の仕業なのだとしたら、わたしは随分と物凄い世界に来てしまったものだ。

そして二人の会話を聞いて、わたしの頭の中で一つの符号が一致す

る。

彼女が選んだであろう、可愛いクッションもソファも今は埃と瓦礫に紛れ、酷い有様だ。可愛い趣味の女性なのだ勝手に思っていた。

わたしは一つため息をついて、陛下が王妃を宥めすかせるのをジッと待っていた。

* * * * *
* * * * *

「そうであったか、ミオはこやつの子では無いのだな」

「そうだよ、君の勘違いだよ」

女性の名前は、ハーミシユリエラ・イブ・ブラリネ様と言って、思っていた通りこの国の王妃様だった。

足を組んで尊大に座る様は、女王様然としており淑女らしさの欠片も無いが、王妃様には非常に似合っていた。腕組みして寄せられた胸が強調されて虎跳峡（ ）が形成されている。目のやり場に困るが、本人は気にもしていない堂々たる態度だ。

王妃様は「ならば、早く言え!」「言う前に攻撃したじゃないか!」

「ふん!それ位防げるだろうがっ!」と隣に座る陛下と言い争う様子は本当に仲が良さそうに見える。

執務室が使い物にならなくなってしまった為、仕方なくわたし達は別室に移って話をしている。

壊れてしまった執務室の片付けや修復は、あの場に居た人達がしているらしい。

ルキさんも借り出されて、今部屋には私と国王夫婦の3人しか居な

い。ロイヤル過ぎる。

「さて、勘違いとは言え先程はすまなかったな。怪我は無かっただろうが、驚かせただろう」

「まあ…でも、この世界に来てからは驚きの連続ですから」

基本、こー言った口調なんだろう。先程よりかは柔らかい口調で話しかけられる。

苛烈な性格だが、地位に胡坐をかかず自分を省みれるし、陰険さや曲がった感じを受けない。

竹を割った様な性格で、好感が持てた。

「……そうか、ミオは”落ち人”か。難儀だったな」

王妃様の声が低くなり、眉が悲痛に顰められた。

「いえ、わたしは何も…気付いたらこうなっていましたし」

本当に。何だかよく分からない内に。

「…馬鹿な事を。生まれ育った場所から突然切り離され、不安に思わぬ者が居る筈がない。どうやら、お前達二人は、そんな事にも思い至らなかつた様だがな」

後半は、自分の夫と、いつの間にかわたしの後ろに立っていた、ルキさんに対して。

二人共、突然矛先を変えられて、身の置き場が無さそうだ。

「男二人揃って情けないものだ。顔ばかり立派で気配りと言うものを知らぬ。苦勞があつたら、私に直ぐ言うのだぞ、余計な気遣いは不要だ」

この世界に来て、2日しか経っていないのに短時間で色々な事があった。

けれど気を使われて、あまりに普通に扱われて、こういう物なのだと思います。これが普通なのだと。

そんな、心細いなんて感情、すっかり忘れていた。

「ありがとうございます。…わたしは大丈夫です」

「…チツ、強情め」

「辛くなったら、王妃様に泣き付きますから」

言葉は荒いけど、優しさに心が温まる。

わたしはこの人の事が、好きだ。

そう言ってくれる人が居ると分かり、この世界でも頑張れそうだと思うた。

結局、執務室の修復の為に予定がずれてしまい、「落し物」を見に行こうツアーは明日に繰り越される事になった。

何の話が分からない王妃様が、陛下に話を聞いて「私も行く」と言い出して、明日は4人（数には入っていないが、護衛多数）で行くことが決定される。

そして今日はもう遅いからと（王妃様と話をしていたら、いつの間にか夜に）、お開きになった。

「ではな」と言って王妃様は颯爽と自室へ去っていく。力強い靴音を鳴らして、自信満々な歩き方、胸はバインバイン。その後姿は女も惚れ惚れする男らしさだ。

わたしもルキさんと一緒に後宮を後にすることになる。

陛下がわたしの為に、一部屋用立ててくれたと言っていたので、今日はそこで寝る事になる様だ。

嬉しい事に、この国にはお風呂もあるそうなので、今から気が逸っている。

お風呂に入っていないのがたった一日とは言え、森に倒れてたり長距離を歩いたりしたので、早く汚れを落としたかった。

部屋を退出する時、ルキさんは陛下に呼び止められてしまったので、わたしは先に部屋の外で待っている事にした。

* * * * *
* * * * *

「まずいよ、ルキ。このままじゃミオがハーミシユリエラに奪われてしまう」

「ふざけているなら帰る」

扉が閉まるなり、ロゼが下らない事をほざくので、体を引き返す。

「冗談じゃないか。折角君が珍しい反応を示しているから、後押ししてあげ様と言う優しい兄弟子の気持ちを汲み取って欲しいね」

「知らん」

「…まあいいよ。それで？昨日報告は今日で言いと言ったのに、態々送って来たこれはなんだい？」

その手には昨夜おれが王に送った報告書

昨日、森を出る時に診^みた事を、仮説と共にまとめた物だった。

7：その女性（後書き）

虎跳峡……世界で有数の深い谷。

8：その夜

スツキリ爽快

！！

まさに、そんな感じで朝を迎えた。

やはりお風呂に入って、服を着替えられたのは凄く嬉しかった。

昨夜はベットに身を預けたらすぐぐっすり眠りに落ちてしまった。

そして今日は「落し物」見学ツアーだ。

まるで社会化見学の様で、ちよつと間抜けた。

用意して貰った朝食を平らげ（この国はパンが主食の様だ）、貰った服に腕を通す。

日本から着てきた服は、やはり目立つそうなので暫くは着納めだ。

お風呂で手もみ洗いをして今は干してある。

あまり良くは無いが、紛失したく無いので部屋干しだ。

部屋は王城の西側にあり、南側に窓が設置された日当たりの良い所を用意してくれた様で、日に当たる所に干して置けばすぐ乾くだろう。

わたしが宛がわれた部屋は、許可された人間しか立ち入れない様に陛下が気を使ってくれたので、人目を気にする必要もない。

これで鍵を掛けておけば大丈夫だろう。

近くにルキさんの部屋もあるので、時間が空いた時にでも洗濯事情を聞いてみよう。

貰った服は、一般女性が着る薄手のAラインワンピースで、胸の下に絞りがあるのでお腹を締め付けないタイプだ。最初貴族女性が着る服を…と言われたが、貴族はドレス必須と言われて、喜んで辞退した。

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

わたしは王妃様に引き摺られる様にして歩いている。

正確には腕を組まれているのだが、王妃様の方が歩幅が広いので、自然と引っ張られてしまう。

それに気付いた王妃様が歩みを緩めてくれたので楽になった。同姓と腕を組むなんて学生時代を思い起こさせ、女子高生のノリに笑いがこみ上げる。

彼女は朝会ってから、ずっとご機嫌で足取りが軽い。着替えたわたしを見た時も、似合うと笑って褒めてくれた。

ちなみに王妃様の笑みは噛み付く様な笑顔が標準装備。覗く犬歯が鈍く光り、鋭い眼光は肉食動物の様な印象を受ける。私がインパラだったら震え上がっていただろう。

わたし達は先頭を王妃様とわたし、後ろに陛下、ルキさんと言う並びで歩いていた、間を空けて護衛の方々が少し後ろの方に居る。護衛の意味無いな。

やって来たそこは”夢の島”かと一瞬思った。

けれど、まわりに陛下や王妃様、それにルキさんが居るので違つと分かる。

ここは日本の東京では無く、異世界セイファート。

今わたし達は、落ちて来た物を見る為にとある場所まで足を運んだ。来た場所はコロッセオの様にぐりと周りを扉に囲まれた、大きな広場になっていた。いや、過去広場だったろう場所。

広場に足を踏み入れたのは、わたし、王妃様、陛下、ルキさんの四人だけ。残りの人達は待機を命じられ、建物周辺の警護に当たっている。

今そこには数え切れない程の多くの様々な物が集められて、うず高く詰まれている。

目に見えるだけで、

懐中電灯、自転車、ギター、ガスコンロ、たわし、空き缶、洗濯機、屋根瓦、ペットボトル、割れた蛍光灯、傘、消しゴム、鍋の蓋、テント、アルカリ電池、プラスチック棚、車、バイク、整髪剤、軽量カップ、みかんの缶詰、洗剤、漫画本、パソコンの液晶、郵便ポスト、サプリメントの錠剤、文鎮、中華鍋、ホチキス、三角ポール、テレビ、ハンドバック、ヘリコプター、小さな鳥居、電柱、釣竿、イヤリング、乳母車、リモコン、泡立て機、冷蔵庫、ボールペン、スリッパ、シャワーヘッド、タンバリン、カーブミラー、水筒、櫛、ラジオ、サララップ、タンス、ベンチ、メトロノーム、蛍光ペン、レール、カプラーメンの蓋、炊飯器、電話ボックス、大根おろし機、靴べら、マンホールの蓋、分度器、蛇口、ゲームソフト、栓抜き、ダンボール箱、時計、ビューラー、コンセント、ダンベル、ポリタンク、ビデオテープ、タイヤ、ポラロイドカメラ、掃除機、回転椅子、ハンガー、ドライヤー、アイロン、洗濯ばさみ、指揮棒、ウォークマン、某赤い服着たくまのぬいぐるみ、熊手、サッカーボール、犬小屋、なわとび、ウォーキングマシン、紐靴、しゃもじ、プリンター、ちりとり、ガムテープ、看板……等等 e t c

はあ、疲れた。

確認のために物を退かしたりしたので、心なしか指もタイピング測

定した時の様に疲れた。

今上げた物は全体のほんの一部で、まだまだ沢山の雑多な物があり、パツと見一つのごみ山の様になっていた。それこそまだ使えそうな物から使えない物まで……カップラーメンの蓋は、まあ、使えないだろう。

それを見て真っ先に思い浮かんだのが、何時だか写真か映像で見た”夢の島”。

今は整備され植物館や各種スポーツ施設を有する、巨大な公園になっている場所が、昔はゴミの島とまで言われていた場所である。それだけ沢山の「落し物」が集められていた。

疑問なのが「落し物」が地球の、それもわたしが住んでいた日本でよく見られた物ばかりだった事。

もしかしたら違う所の物も混ざっているかもしれないが、間違いなく全て地球にあつた物だ。これだけ沢山あるのだ、偶然ではなく何かの整合性を感じる。この世界と地球の間には特別な関係があるのかもしれない。それが琴線に触れ胸を熱くした、それは希望だ。

もし、それが分かり解明す事が出来れば

わたしは地球に戻る事が出来るかもしれない

「あの！物が落ちてき始めたのはつい最近なのですか？」

集められた物に家電製品現代のものが多いのが気になった。恐らくわたしと同じ様に、現代からこの国に落ちてきたのではないかと思ったのだ。わたしはこの部屋にある物を見た瞬間、引き止める言葉にも気付かず一心不乱に物を見て回った。

その間三人は口出しせず黙ってわたしがしている事を許してくれた。

だから黙々と作業に勤しんでいる、と見られていた私に突然話しかけられて、ビックリしている。

「私はこの生まれではない無いから詳しい事は何とも…」

言葉が途中で消える、王妃様はすまんと言って、答えを求める様に陛下に視線を移した。

「つい最近と言う訳ではないけれど、少し昔だね。確か…わたしの祖母が王座に就いていた頃だから大体6・70年位前だと聞いているよ。国の歴史で考えれば最近かも知れないが」

「……え」

そんなに昔からなのか！！

その時期だと日本は大戦中か終結後辺りだ、高度成長期になってやとカラーテレビなどが普及し始めるのだから時期が合わない。

落ちて来た時はそれなりに綺麗だったそうだが、長期間放置されて劣化や汚れで正確な製造時期もラベルが？げてしまっている。

ただパソコンなんてここ十数年の物だからつい最近の事だと思っていたのだ。

現代の物がわざわざこの世界の過去の世界に落ちた？お互いの時間の流れが分からないので、確かめ様が無い。

それともわたしが勘違いしているだけで、「落し物」は地球から来た訳ではないのか？そんな事は無いと思うが、本当に分からない、判断するモノが足りない。

自分の目で見えたものが信じられないなんて、疑心暗鬼になりそうだ。不可解な事ばかりで頭が混乱してきた。答えは目の前にある様な気がするのに、何かが邪魔して上手く思考がまとまらない。落ち着いて考えなければいけないのに、なぜ、どうしてと、感情だけが先行

してしまう。

「一瞬だけ浮かんだ」地球に戻れるかもしれない」と言う期待は、今はすっかり鳴りを潜めてしまった。

近いと思っていた地球とこの世界の距離が、グンと離れた感じがする。

シヨックを隠せないわたしを見て、陛下が部屋に戻る事を勧めてくれた。

ここに集められた物が、わたしの世界の物だと分かっている人間は誰も居ない。

わたしもそれを説明する気力が湧かなかった。

一体わたしが何に対してシヨックを受けているか、分からない筈。

それなのに、わたしの表情を見て只事ではない空気を感じたのだろう、流石に今のわたしに詳しい話を聞こうとはしない。

最初にはこやかにしていた王妃様も陛下も、今は顔が強張り目線を伏せている。

ルキさんだけが、無表情でただわたしをジッと見ていた。

* * * * *
* * * * *

ここに来るまでは、明るかった雰囲気も、帰りはひっそりと沈んだ空気になってしまう。

部屋に戻って、窓から入る明かりが何故か気になって、カーテンを引く。

薄暗くなった部屋の中に一人になって、やっと息を吐き出した。

立っているのが億劫で、そのままずると座り込み体育座りになる。

この国の優秀な人達が調べても、ずっと分からなかったと言われていた筈だ。

それなのに、”時計”が何か分かると言っただけで、少し得意になっていた。

分かったからと言って、何が出来るのか、わたしに分かるわけがないのだ。

わたしはただ、”落ちて来た”というだけ。

これはそんなに簡単な事では無いのに、わたしはまだ何処かで安穩と考えていた所があった。

まだ何処かで、すぐに戻れると期待していた。

この世界の人の力を見て、その強力な力を見て、わたしの知識を合わせれば何か飛躍的に変わる何かが起きるのではないかと思っていた。

そんなに、簡単な事では ないのだ。

今日自分と同じ世界から来た”物”を見て、初めて自分の”異端さ”に気付いた。

わたしはこの世界で”異端”の存在だ。

誰でも知っているテレビや車を 不思議なものを見る目 で見るのだ。この国の人は。

わたしにとって生活の一部となっていた物を、この国の人には分からない、理解できないと言っ顔をして見る。

彼等の日常がわたしにとっての非日常。

その事が今更ながらに怖くなった。

何よりも、わたし自身もあの目で見られる様になっただらと思つと、怖くて堪らない。

王妃様が昨日言った言葉が蘇る。

馬鹿だ。あの時は全然理解していなくて、今やっと王妃様が言った意味を理解した。

わたしはこの世界にとって、たった一人の……なのだ。

その心細さと不安で押しつぶされそうだ。

夢を見た

不協和音が聞こえて頭を上げようとして

ハッと目が覚めた。

耳の奥で木霊している。心臓がばくばくとつるさい。

視界に自分の手と床が見えたので、あの後そのまま床でしまったのだと気付いた。

部屋の中は薄暗い状態から、暗闇に変わっていた。いつの間にか夜になってしまった様だ。

夕食をすっぱかしてしまっただが不思議とお腹は空いていなかった。

ただ体は冷えてしまったのか、小刻みに震えていた。

ノロノロと体を起こし、ベットに入って体を縮める。

けれど頭まで包まっているのに暖かくはならない。

体を抱きしめるが、体の震えが止まらなかった。

（ さむい ）

その時何故か灰色の瞳が頭をよぎった。

この世界に来て始めて見た色。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

気配を感じた気がして目が覚める。

暗闇の中、周りを見渡し部屋の中を確認するが、異常な所は何処にもない。

相変わらずここには本しかない。

本の酸化した匂いは、自分には落ち着く匂いだ。

気のせいかと目を閉じようとして、また、何かの気配を感じた。

自室には結界を張っている、断わり無く誰かが触れれば、術が自動的に発動する様にしてある。

けれど、それとは違う様な感覚がする。

そつと触れようとして、つめ先が触れる寸前で手を放す様な不安定な感覚。

不可解な事にいぶかしむ。

特に敵意や害意を感じないので放って置いても良かったが、たまたま気まぐれが働いたのか、様子を見に行く事にした。

通路を進むと、その気配は隣の部屋からしている事に気付く。

少しだけ歩く速度を速めて、部屋に近づく。

ドアの前で足を潜め、息もなるべく小さくし呼吸を整えると、開いているドアの隙間から部屋に体を滑り込ませた。

無意識に気配を殺し、なるべくゆっくりと慎重に進んだ。

「……」

目の前にあった光景を見て、張り詰めていた息が脱力していく。結界はどうしたと思ったが、そういえば結界もすり抜けるんだと言う事を思い出した。

広場に行くと、熱心に物を眺めていたが、暫くして顔が青白く強張っていた。

交差した時に見た瞳は、困惑に揺れていた。

その後は口を開く事なく無言だった、そのまま部屋に籠って夕食にも現れなかったと聞いている。

様子を見に行けと言われて、部屋を訪れたが中からの反応は無かった。

それが何故今更　　と思った。

彼女は天井から降り注ぐ月明かりの下、椅子に体を預けて寝ていた。何故それほどまで、と思うほど小さく体を縮こませている。

少し開いた天蓋から風が入り込み、時々髪を揺らす。

この部屋は特別に温度調整をしていたが、それでも直接肌に風を受けるのは良くないだろう。

寝入っているのか、天蓋を閉める為に近づいても、ピクリとも目を覚まさなかった。

こんなに無防備に寝て、危機感が無いのだろうかと思った。

そして他人に対して、自分がそんな感情を抱いた事に驚いた。

人と同じ空間に居る事は苦痛だった。

誰かと共有する事なく、自分の世界に籠っているのが一番だった。

今も変わっていない

馬鹿なことを考えた。

一瞬過ぎった考えを振り払い、寝室に戻る事にする。

ただ部屋を出る時、少し後ろが気になったが、それも振り払った。

9：その決意

顔に当たる眩しさに、寝返りを打つ。

(うーん…眩しい。でもまだちょっと眠い)

布団を持ち上げて、日差しを遮り、二度寝の体制を取る。

布団の中はぬくぬくで、ずっと出たくなくなる。でもそろそろ起きないと会社に遅刻してしまう
……………

そんなわけない！

ガバツと身を起こして天窓を見上げる。

(もう朝　　！！)

天窓のほぼ真上から当たる日の高さから、結構な時間まで寝てしまっていた事になる。

昨夜寒さのあまり寝れず、歩けば少しは疲れて無理やり寝れるかもしれないと、城の中を歩いていた。

そしたら無意識の内にそちらの方向に向かっていたのか、着いたのはこの部屋の前だった。

特に顔が見たいとか、話がしたいと思っていた訳ではないが、何故かあの灰色の瞳がちらついた。

けれど夜遅く、もう既に人は寝ている時間だ。どう考えても非常識だ。

どうしようと思って扉の前で行ったり来たりし、やっぱり引き返そうと思った所で、肘が扉に当たりドアが開いてしまう。

(鍵を掛けてないの…?)

あまりにも無用心ではないかと思ったが、まだ起きているのかも知れない。

意を決してドアを開けて中に入る。部屋の中は真っ暗で、起きている人の気配は感じない。

「…ルキさん？」

小さく声を掛けてみて、自分の声の弱々しさに不安になった。けれどやはり返事は無い。寝ているか、まだ部屋に戻っていないかのどちらかだろう。

わたしはどちらでもいいやと、後ろでドアを閉める。

（ごめんなさい。不法侵入ですが、何も取ったりなんてしませんから！）

頭の中で、部屋の持ち主に謝罪を入れて、そのまま廊下を先に進む。夜に見た温室は、少し物悲しさもあったけれど、月明かりに照らされて光る木々には暖かみがあった。

奥に進んでみると、変わらない場所に先日使ったテーブルと椅子を見つける。

吸い寄せられる様にして椅子に横向きに腰掛けると、思った以上に居心地が良くて体を丸める。

一人掛けだかわたしが膝を曲げても、まだ十分隙間があった。丁度いい位置を調節し、肘掛部分に頭を乗せて目を閉じた。

（ほんの少しだけ）

少ししたら、持ち主に気付かれる前にすぐに部屋に戻るつもりだった。

今　部屋の中は明るくなっている。サーと頭から血の気が引いた。

少しだけの筈が本格的に寝入ってしまい、予定を大幅に寝過ごしてしまっている。

（傍から見たら、不法侵入者が被害者宅で寛いでいる図だ）

まだ寝ているのか、今日はまだこの部屋を使っていないのか、分か

らないがどう考えても不味い。
とにかく部屋を出、

ようとして、そう言えば何故布団があるのだと疑問に思った。
顔を見下ろして見て、自分に掛けられた”モノ”を見て、穴があつたら入りたくなつた。
口から鋭く息を呑む音がした。
ついでに顔も真っ赤に染まっているに違いない。

わたしはルキさんの外套に包まれて寝ていた

あのぬくぬくはこれの所為か。

こんな事が出来るのは、部屋の持ち主だけだろう。

恥ずかしさでつい、呻いてしまう。不法侵入はとっくにバレていたらしい。

その上で、こういった優しさは不意打ちで、ずるいと思った。

この世界で初めて目にした時から、その色は安心する色だった。

起きている時の態度や言葉は無愛想なのに、その他の時はとても優しいと感じてしまう。

そのギャップに本当に同一人物なのかと思う。

顔に上った熱は全然さめず、逃がす方法が分からない。

なんて人だ、と思った。

わたしは随分な時間を掛けて、熱を覚ます事に専念した。

その間温室には誰も来なかつた事は、非常にありがたかつた。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

一晩寝た事で、昨日の事にも心の折り合いを付ける事が出来た。

まだこの世界に来て3日。

まだまだ何も始まっていない、何かが変わるとしたらこれからだ。だから気落ちするのは、まだ早いと気付いた。

もう自分勝手に気落ちするのは止めた。見ない振りも止めた。

わたしは異世界セイファートに居る。そこで変わらず、生きている。ちゃんとこの世界に、自分は居る、と言う事を何度も何度も繰り返して納得させた。

そうする事で、止まっていた自分の気持ちを前に進める事が出来る。寧ろ、前に進めなくてはいけない。

だからこれからの事を考えよう。

元の世界に戻るのに時間が掛かる場合、そうなった時の為に考えていた事があった。

顔を上げると異世界セイファートの太陽がわたしを優しく照らした。わたしの考えに同意してくれている様な気がした。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

「…今、何て言ったんだい？」

「王城ユキを出て暮らす為に力を貸して下さい」

陛下が聞き返してくる。

突然来訪したわたしにも、陛下は時間を割いてくれた。

今、わたしは陛下の執務室にいる。

プライベート
後宮ではなく王城内にある方だ。

自分なりのケジメの為にそちらを選んだ。

あれからはわたしは、自分の中でまとまとまった事を、陛下に伝える為に陛下の執務室を探していた。

気まずいのでルキさんには、声を掛けずに一人で。

途中で騎士の人に呼び止められる事はあったが、わたしの顔を見ると直ぐに開放された。

その後も道を遮られる事もなく、陛下の部屋の位置を聞くと簡単に教えてくれ、容易にやってくる事が出来た。

あまりの呆気なさに、呆れてしまう。

一体陛下はわたしに関してどんなお触れを出しているのか。

部屋の事やその他の事を思い返してみても、わたしは気を使われ過ぎていて気がした。

確かに何も分からない状態で、気を使って貰えるのは心強く嬉しいけれど、そんなのは自分が気を使える様になってからじゃないと、ただの依存だ。

そんなのは小さな子がすれば良い。わたしはそんな事望んでいない。
セリファート
異世界に向き合おうと、自分の意思で決めたのだ。

だからわたしはこの世界で最初の答えを出した。

それは王城を出て、この”世界”その中で暮らそうという事。

お城は異世界だけど居心地良く過ごさせて貰っている。

あくまでも、貰っている、だ。

そんな中で過ごしても、この世界の事なんて、分かる筈が無い。

その為には他に、出なくてはいけない。

「理由を聞いてもいいかい？」

「わたしの願いを叶えるには、この世界を知る事が大条件だからです」

「それは…ここでは無理…か」

「はい、わたしはこの世界を知りたいのです」

言外にここでは出来ない事を伝える。

流石は支配者だ。たった少しの会話でこちらの意図に、陛下は気付いてくれている。

この人が治めている国なら、さぞ暮らしやすかろう。

それでも陛下は思い悩んでいる様で、すぐに肯定の意を示さない。

「ここは居心地悪かったかい？」

「いいえ、ここ程過ごし易い場所をわたしは知りません」

「ならば「けれど、ここでは駄目なんです」

陛下が引き止める前に、素早く言葉を続けてしまう。

人の言葉を遮るのは嫌だが、ここは引けない所なので、わたしも強気になる。

「ハーミシユリエラが寂しがる」

「すみません」

「わたしも、寂しいと思うよ」

「すみません」

「…ルキも、哀しむ」

「……すみ、ません」

最後に上がった名前に、一瞬言葉が詰まったが最後まで言い切る。動揺が伝わってしまっただろうか。

けれど、最後に言われた事はなんだか、腑に落ちない気がした。

「哀しむ」何て事を、あの魔導師がするのだろうか。

わたしも、あの人に関してはよく分からない。

「考えを変えるつもりは？」
「ありません」

そんなつもりは無いが、声が硬く突き放す様になってしまう。
陛下は深く長いため息をついて上を見上げている。

お互い何も話さず、無言の時間が流れる。審判を迎える被告人の気持ちはこんな気持ちだろうか。

数秒の様にも、数時間にも感じた時、陛下が口を開いた。

「…わかったよ」

「……ありがとうございます」

「けれどすぐには無理だよ、こちらにも準備をする時間が欲しい。
それにミオも、自分で考える時間が必要だろうか？」

「…お手数をお掛けします」

「構わないよ。そうだね、3・4日時間を上げるから、それまでに
必要な物を考えておくんだよ」

「はい。ありがとうございます」

しっかりとお辞儀をして、わたしは執務室から外に出た。

時間は3・4日間しかない、その間にわたしはこの世界で生きてい
く為に必要なものを考えないといけない。

けれど何も分からず、考えていなかった時よりも、ずっと気持ちは
晴やかだった。

10・その文字

あれから1日、目の前には白い紙

- ・ 住む場所
- ・ お金（貨幣価値も？）
- ・ 文字
- ・ 身分証明
- ・ 仕事

この国で暮らそうと決意してから、まず必要な物を考えて紙に書き出してみた。

もっと沢山あるだろうが、一番大切なのはこの5つだろう。

住む場所とお金については、陛下に元手を出して貰う話に通っている。

返金はないと言われたが、何時か余裕が出来た時に少しずつ返そうと思っている。

陛下のお金はこの国の血税だ。わたしの為に本来使われるお金ではない。

それはとりあえず良いとして、問題なのが文字と身分証明だ。両方共、この世界生まれでは無いわたしには備わっていない物だ。

万一の事を考えて、わたしは自分が「落し物」である事は伏る事に

した。

(陛下もそれが賢明だと言っていたしね)
自分を卑下する訳ではないが、出来るだけ問題の根になりそうな物は摘んでおいた方が好い。
しつかりした身分は必要ないが、何も無い人間なんて普通は居ない。例え孤児でも、施設に居たとか、親戚に預けられていたとか、何かしらその人が生きて来たと言う証明になる物が残るはずだ。

わたしは突然この世界に落ちて来たのだから、そういった物が一切無い。

つまり、4日前以前の履歴が何も無いのだ。当然と言っては当然だ。けれどそれも王城で静かに暮らすなら問題ないが、市井に下りたらそうは行かない。

今まで何処で暮らしていたのか聞かれて、何も答えられないと怪しまれられない。
余計な憶測や警戒を持たれない為に、何かあった時自身を証明する身分が必要だ。

「ミオ様、少し休憩を挟まれては如何です？昼食の用意が出来ておりますよ」

「あ、ありがとうございます。リリアール様」

「ミオ様。私わたくしに”様”は必要ありませんわ」

「あ…はい、リリアール…さん」

「…つこりと」準備してまいります」と言って去っていった女性は、リリアールさん。

陛下の乳母を勤めていた女性で、いまだに相談役に就いていたりする。

”あの後”、わたしが考えをまとめる為の相談相手として、陛下がわたしに紹介してくれたのだ。

御歳50代とは思えない姿勢の良さで、洗礼された動きは淑女の鏡だ。陛下に礼儀作法を叩き込んだのもこの女性と言う事で、陛下はいまだに彼女に頭が上がらない……らしい。

とても気配り上手で、いつも笑顔で、あれこれとわたしが分からない事を聞いても、嫌な顔一つせず教えてくれる。おかげでだいぶこの国と言う物が分かってきた。

相談相手と言っていたが、何だかんだと身の回りの事や話し相手など、結局わたしのお世話をして下さっている。

お母さんだ！

思わずそう思ってしまう程、母性溢れた魅力的な人だ。

けれど陛下に言わせると、礼儀作法については悪鬼の如く厳しく、普段の姿は仏の顔を被っているだけらしい。そんな馬鹿な。

その彼女はわたしの素性を知っている数少ない一人だ。

ここに来る前に陛下から話を聞いているのだろう、わたしでは気付かない事などをそれとなく教えてくれたりして大変助かった。

（文字と身分……どうしようか。でも文字なんて覚えるだけで時間掛かるし、身分なんて個人でどうこう出来るものでもないし……本当どうしようか）

^{やらしい事}
仕事にしても、身分証明と文字が書ける方が都合が良い。

一人で思い悩んでいる所に、リアーレさんが昼食を載せたワゴンを押して戻ってきた。

そして目にも留まらぬ鮮やかさで、テーブルの上にセッティングしてしまう。

今日のメニューは、胡桃とクランベリーのパン、温野菜サラダ、ヴィシソワーズ、デザートに桃のコンポートだった。

偉そうに言っているが、実際は名前の後に”の様なもの”がつく。

何故なら食材の名前が分からないから！
けれど見た目と味のギャップは無く、ほぼ想像通りの味と食感だったので大体地球と同じ様な食材があるのだろう。

この国は自然が非常に豊かで、温暖な気候もさる事ながら、農産品が物凄く有名らしい。

種類も量も豊富で、野菜一つ一つの質も超一流、この国の第一次産業を担っているそうだ。

唯一つだけ、残念な事といえば

あまりに食材の持ち味を生かしすぎて、味付けが素朴…いや質素、いや適当？と、味付けがあまりにあまりな状態なのだ。

ぶつちやけ、素材の味しかない。塩を使ってもほんの少しで、無いに等しい。

塩は調味料と言うよりも、歯磨きとしての需要の方が多なのが現状だ。

本当に残念すぎる

ワイシソフーズ
ジャガイモの煮汁を飲みつつ、幾度目かの残念。

この国の人は物足り無くはないのか？と思ったが、実際そうらしく、あまりに……な為、食事に対する情熱がいまいち薄く、食えりゃ良いんだろっ！的で見た目の楽しさが無く、ただ盛ってるだけ。

王城でさえこれなのだ、一般庶民はどんな食事なのか想像に難くない。

人間の三大欲求の一つなのに、これではあまりに残念すぎる。
食事は栄養、味付けも大事だが、見た目の楽しさも大切だと思っている。

誰かが改善しようと思わないのか？と思ったが、改善できていないから今もこれなのだろう。

基本的に国が豊か過ぎて、人が国外に出る事が滅多に無いらしく、

外からの刺激で味に広がりが起こると言う事も今まで無かつたらしい。
国外から来た人が哀れた。国が過ごしやすくても食事がこれだとガツカリ過ぎる。
人気の温泉宿に行つて、温泉は最高だったのに食事がインスタントラーメンだった時の様な物だろう。

非常に勿体無い事をしているが、逆に考えるとわたしにとっては都合の良い事実にはニンマリする。

「何やらご機嫌ですね」

「はい、今後の事でちよつと…」

そつだ、わたしがやるうとする事には、どうしても必要なのだ。恐らくなつてくる。

この際どんなに面倒な手続きが必要でも聞いておかなくてはいけない。

「リリアーレさん、この国の識字文化はどれ位なのですか？」

「王侯貴族と魔導師が把握している位で、ほぼ普及しておりませんよ。」

思いも寄らない発言に驚く。こんなに魔法の様な力がある世界なのだ、それにルキさんの部屋の本の量を見て、何となく識字レベルが高いのだと思つていた。

そつなのか。それなら無理に覚えなくても大丈夫かな。

（あ……）でもそれだと

「リリアーレさん、一般に文字が普及していない場合、文字が必要なもの例えば標識や看板などはどうしているのですか？」

「それには呪いが使われております」
「…まじない？」

聞きなれない言葉にしきりに疑問符が浮かぶ。

「実際にお見せしましょう」

そう言っけてリリアーレさんは、ポケットから一枚のハンカチを取り出して見せてくれた。

白いハンカチの真ん中に一つの図案が刺繡されている。

白い一振りの枝に3枚の葉

その図案を見た瞬間に頭の中に色々な情報が入って来た。

(リリアーレ・ハイン・ヴィルベル 所属：王宮従事 貴族：女性)

「……！今何か…リリアーレさんの事が…！！」

一体何なのかと慌てているわたしに、リリアーレさんがニコリと笑った。

「これが、”呪い”です。私の名前わたくしや従事の事がわかりましたですよっ？」

「…はい」

「この布には私の”紋”と一緒に”呪い”が織られております。この枝葉の図案が私の紋深名と言って、私個人を表す”印”の様なものです。そこに必要な情報を”呪い”に織り込む事で、この図案を見た人間に、呪いに織られた情報を与える事が出来るのです。」

「ちよっ…ちよっと待ってください？」

「はい」

つまり？あの樹の枝に3枚葉がリリアーレさん個人のシンボルマーク？で、それに必要な情報を織り込む？これがよく分からない。それを見ると織り込まれた情報が見た人間に伝わると？

「織り込むって言うのは？」

「これは魔導の力になります。仕様は分かりませんが、紋は個人との相性が良いので、それを媒体に情報を紋自体に取り込ませる事で、紋自体を発信媒体としているそうです」

ふむふむ。何となく分かってきたような？

シンボルマークに予め必要な情報を持たせておいて、そのマークを見るだけで伝えたい情報が分かる様にしているって良いのかな。

道路標識のマークを見て意味が分かる様に、こっちの場合は初めて見た場合でも意味が分かっちゃうと言う所が違うんだろう。

「その紋って言うのは誰もが持っているんですか？」

「はい。生まれた時に親から引き継ぎます。基本は親の紋を改変した物が自分の紋となりますね。ですから似た紋を持つ者は親類や血縁関係だったりするのですよ」

「そうなんですか…それで、呪いって言うのはどうやって織り込むのですか？」

「基本的に魔導師に依頼して織り込んで貰います。王城に居る人間は直接魔導師に、町にも魔導師が常駐している場所がありますから、城下に住んでいる人間はそちらにもって行きます。これには必要最低限の事しか織り込みませんでした。職業や年齢、家族構成など、好きな情報を追加で織り込む事が出来るのです」

一つの図案で履歴書や取り扱い説明書の代わりになるのか。

紋についての意味合いは、日本の家紋と花押を足した様な物だろう。呪いについては何だか分からないけど凄い！としか分からずお手上げだ。

すっごい便利だけど、魔導師の人達が大変そうだな。一体魔導師さん何人居るか知らないけど。

こんなに簡単で便利な物があれば、必要に駆られない限り、無理して文字を覚える必要ないのだろう。

これで文字についての憂いは消えたな

ってあれ？

「わたし紋持っていないんですけど」

11：その仕事

「紋は他人の物を代用は出来ないのですか？」

「個人を表す物ですし、それに紋はこの国に居る限り身につけた者に若干の加護を与えるのです。代用するなんて考えもつきません。」

「加護？」

「はい、魔導師ほどの恩恵はありませんが、疫病や不運を軽減する作用があります」

（ お守りみたいな物かな。樹が神様で、紋がお守り、神主さんが魔導師さんって所かな）

しかし、紋は代用が効かないのか。残念だ。

3日後、結局必要な物としてわたしが陛下に依頼したのは次の二つ。

- ・わたし用の紋
- ・今までの経歴

紋についてはやっぱり諦め切れなかった！

あれからリリアーレさんと相談したが、経歴について自分で考えたら穴が出来そうなので、いっその事丸ごと陛下に用意して貰う事にしよう、と言う事になった。

国の重要な書類を扱っている横で、わたしのしょうも無い経歴作成……何だか違う様な気がする。

紋についても諦めがつかなくて（2度目）書いてしまった。

「こんなの依頼して迷惑ではないですか？」

「こんな時の陛下ですわ。陛下は誉れ高きお方ですが広い政治手腕もお持ちです、きつと良い御知恵を下さいますわ」

陛下に信頼を寄せているのだろう、彼女は自分の事のように自信満々に言う。

それにしたって、一応この国の統治者じゃないのだろうか、陛下。そんな人が真面目に作成わたしの経歴……何も言うまい。紋についても、そもそも異世界人のわたしに対して用意できるの？である。便利なので是非とも欲しいが、無ければ無いで……諦めるしかない。うう欲しいな！。

物凄く、咽から手が出るほど欲しいけどね！
あれがあつたらわたしの仕事やりたい事が非常にやり易いのだ。

「ふうん…面白い物を要望したね。もう少し夢のある事が書かれていると思ったけど現実的だ」
陛下はわたしが提出した要望書（リリアーレ代筆）を見て、笑っている。

（夢　！？あなたどんな物要求されると思ってたんですか！？）

「ああ、気を悪くしない様に。ミオが紋の事を知っていたのが意外でね、リリアーレ？」

「（だから心を読むなど…ああッ）……はい実際に見せて貰いました」

「そう。まあ、経歴については任せなさい。立派な「普通」なので！！！！」

「……なかなか言っじゃないか」
「恐れ入ります」

余計な事は言わなくて良いんですよ陛下！

「それから紋については…少し時間が掛かるかも知れない」
「!?!?出来るんですか?」

ここには両親も居ませんし、この国の人間でもありませんが!

「何もミオだけが紋を持っていない訳じゃない。…この国にも孤児は居るからね。彼等も大事な国民だ、親から継げなかつた者にも、後から紋を与えているんだ」

「そう…なのですか」

孤児か。そう言えば誰もが皆両親健在って訳にも行かないんだろう。わたしも同じ様にして紋が貰えると言うなら、非常にありがたい。大歓迎だ。

「ところで、ミオは王城を出て何をするつもりなんだい?住む場所は一応王城にも近い城下に探してる所だけねど」

「それはですね…」

良くぞ聞いてくれたと思った!

この国の食事の残念具合を知った時からずっと、ずーーーーーっ
と口出ししたくて仕様が無かつた。

もっと工夫すればもっと美味しく!もっと楽しく食事が出るのにと
じれつたかつたのだ。

そう わたしが仕事やりたい事と言うのは

「フードコーディネーターです」

「フードコーディネーター?」

ふっふっふ、陛下意味分からないって顔してますね。

その反応が懐かしい。日本でも職業聞フリードコーディネーターいてすぐ理解してくれた人はあまり居ない。

「簡単に言えば食事をより美味しく！美味しくそうに！演出する仕事です」

「…それが仕事になるのかい？」

言ったな、言ったなあっ！

仕事に情熱を持ってしているわたしに対して、陛下は失言こぼしやがった。

「そこが甘いのですよ！そもそもこの国は食事が残念過ぎるんです！食材は確かに素晴らしくて美味しいですが、アレじゃあ料理って言うより食材を煮たか焼いたか蒸したかしただけの物ブツです！盛り付けにしたってただお皿に盛ってるだけですよね！もつと彩りとか配置とか食器にしたって大きさは形にこだわりますよ！陛下とか王妃様があのワイルドな食事食べるのを見るととても切ない気持ちになるこっちの気持ちも分かって貰いたいですね！食事は欲求の一つで人間に取って非常に重要な部分を司っているんです！一日三食の食事が美味しく満足な物だと、気持ちのゆとりも出来てストレスも少なくなり仕事の作業効率だって上がるんです！疲れた時にお茶を飲んで一息付くでしょう？そうそう、それです！その様に食事が身体的にも感情面にも非常に影響力が強いです！それに食事は栄養素をバランス良く取る事で健康や体質改善など、身体的にもいい影響を与えてくれる物なんです！因みにわたしはそれで冷え性が治りましたからね！実践実証済みなので文句は言わせません。それに食事と言ってもただ食べるだけじゃなく、家庭、仕事、パーティ、冠婚葬祭、飲食屋、病院食、ダイエットなど必要とされる場所や時によって効果や印象を考えなくてはいけないのです！例えば飲食屋ですがその飲食屋を売れる様にするにはただ美味しいメニューを作るだけでなく、目玉となる商品を作ったり、年齢層や時間帯に合わ

せて出すメニューを変えたり、見せ先に置くサンプルを置くなどの工夫が必要なんです！サンプル一つにしても美味しそうに見える置き方やメニューなどがあるんですよ！ああ陛下には少し分かりにくいかもしれませんがね！ではもっと分かり易くお話ししましょう。この王城に勤めている人が食事をする食堂ですがそのメニューが非常に不評だというのは陛下も知っていますね？週替りでメニューが変わるそうですが、それにしたって趣向品の一つも置かないのは間違っています！甘味は心の安らぎです！仕事に疲れて食堂にやっ来てたら何と！甘いケーキが食後について嬉しい誤算！何だか疲れも取れた気がする！何て素敵この後の仕事も頑張ろう！って気にもなるんですよ！何？そんな口調の奴居ない？たーとーえーです！例え！とにかく砂糖や甘味などを人の舌が感じると脳がエンドルフィンを分泌させて快感中枢が刺激されてリラックス出来るんですよ！そうする事で気持ちも落ち着きゆったりした気分にしてくれるんですよ！ストレスが多い人間と少ない人間が多い仕事場では職場の雰囲気は勿論の事、全体的な仕事の結果にも大きな差が出てくるんですよ！たかが食事と甘く見ると痛い目見ますよ！とにかく、わたしの仕事はそういったあらゆる”食”に関する総合的な演出や相談を受けるのが仕事です！」

「……」

（あ、しまった。あまりに熱が入りすぎて物凄く失礼な口聞いてしまった）

気が付かない内に執務机を乗り越える勢いで陛下に迫ってしまっていた。

陛下は物凄い驚いていると言うか呆気に取られているというか固まっている。あ、動いた。

「…ミオが食に対する情熱が良く分かったよ」

「すみません。…ただお分かり頂けて何よりです」

「いや、ミオは大人しい子なのかと思ったけれど、それだけでは無いと言う事が」

「…余計な口を開かないだけです」

「成程上手い言い回しだね」

「……」

なんだろう、この若干の敗北感。さっきのは勢いで驚いただけなんだろうけど、今後は陛下に余計な事言ったら自滅しそうだ。控えよう、なむなむ。

陛下への用事が終わったので部屋を後にする事にした。

部屋の外にはリリアーレさんが待っていてくれた。

「お帰りなさいませ、如何でしたか？」

「はい、両方共何とかなるかもしれません」

「それは良うございました」

ここ数日、何度か陛下の執務室に足を運ぶ事になった時は、何時も彼女と一緒に付いて来てくれた。

初めて訪れた時はたまたま何も無かったそうだが、わたしは存在が秘せられてるので、何か勘違いした人間が現れるかもしれないしれないそうだ。

「王城の陰謀とかって本当にあるんだ」と、のほほんとしてたったりリアーレさんが真剣な顔で気をつける様に念を押してきたので真剣に聞いた。

まさか陛下の執務室に堂々と行く事に目を付けられて、権力闘争に巻き込まれたり？とかあるんだろうか。そんなのこれっぽっちも興味無いから勘弁して欲しい物である。

とりあえず王城を出るまでは、一人では出歩かない様に、もし出歩いても人目の少ない所には立ち入らない事になった。

そういえば、出歩くといえれば先日の「落し物」見学ツアーはどうなっただろう。

わたしから話題にしない所為なのか、陛下からは何も言っていない。あの時は中途半端に他の人と別れてそのままなので、陛下以外とはその後何の音沙汰も無い状態だ。

王妃様も楽しみにしていたのに、あれから何の挨拶もせず悪い事をしてしまった。

それにルキさんも

体の一部がぎこちなく揺れた。

あの朝の事を思い出す、それにその後の朝も

実はあの日以降　　夜寝る時はあの部屋に行き、あの椅子の上で寝て朝目覚めると言う事を続けていた。

翌朝起きた時、また包まって寝ていた事に赤面し、次の夜には椅子の上に既に外套が置かれていた。

何も言われてないけれど、拒まれてはいない、それが伝わってホッとした。

広間でのあの日以降、ルキさんとは一度も会っていないし会話もしていない。

けれどそれでも、伝わって来る　　相変わらず部屋に鍵は掛かっている。

自分の不可解な行動には何も無い、何もないと考える。この変な行動理由動機はわたしの意志とは関係無く動いてしまうのだ。

これは愛だとか恋とかそんな物ではない。

もやもやと思考が何だか怪しい雲行きになってきたので慌てた。
こんなのは昼間から悶々考える事ではない。

そうだ、王妃様！

彼女にお詫びの挨拶に行かなくては　　そう気持ちを切り替えた。
王妃様はあの時心配してくれていた様子だ、あの日のお詫びをしよ
う。

それに陛下から話は伝わっているかもしれないが、キチンと自分の
口から王城を出る話をしておこう。

彼女はどんな風な反応をするだろうか。

陛下は寂しがるとは言ってくれたけど　　笑ってくれると嬉しい。

きつと彼女の笑顔を見たら、自分のやる事に恐れや不安なんて抱か
ないに違いない。

あの自信に満ちた笑顔を見ると、こちらにも自信が伝染する様で心
強い。

こんなモヤモヤした気分も吹き飛ぶだろう。

12：その間柄を表すもの

「じええええええええああ！！！！！！」

「くっ！」

「っらああっ！」

「うあっ！」

気合の籠った掛け声が響き渡る。

その後にはドスンとかドサツとか重たい物が地に落ちる音。

今わたし達が居るのは、王城の訓練場。

騎士が体を動かしたり、体を鍛える為に日々精進している場所だ。

王妃様に会う為に後宮に足を運んだのだが、肝心の王妃様は居なかった。

部屋の侍従長に話しを聞いたなら、訓練場に出ていられると言われてやってきたのだ。

その訓練場のど真ん中には、王妃様^{探し人}。

今はドレスを脱いで簡易の騎士服を纏い、長い髪を三つ編みにして背に流している。

王妃様は体を動かすのが好きで、毎日数時間は訓練場に来ているそうだ。

そう言われて頭に浮かんだのは屋内スポーツだったのだが、実際に来てみて想像が想像でしかなかった事を知る。

彼女は周りを複数の騎士に囲ませて、組み手の様な事をしていた。

無用意に掛かってきた騎士の腕を掴むと逆に投げ飛ばし、様子見をしている者には自分から打ちかかって足払いし、バランスを崩した所に掌底を打ち込んでいる。

身を起こしては倒したり、騎士達の中を動く王妃様の動きは流れる様で無駄な動きが見えず惚れ惚れしていた。

飛ばされた騎士もまたすぐに身を起こし、王妃様に向かっていく。ちぎっては投げちぎっては投げ……ワラワラと人が動く様は宮崎映画もまつつあお。ギャグか。何ともアグレッシブな体の動かし方だ。

王宮の美しい庭園で麗らかな日差しの中優雅にお茶を楽しむ王妃様
ウフフなんて素敵。

そんなわたしの王妃様像を打ち壊す笑顔装備で猛々しいお姿だ。この国の人ってなんかおかしい。
あるいは一番ファンタジーなのはわたしの脳味噌なのか、現実なんてそんな物なのか。

長く続いた組み手も、急に鳴った鈴の音がした瞬間ピタリと止まる。どうやら時間設定をしていたらしい。

王妃様も騎士達も少し息が上がっているが、まだまだ余裕な様子でにこやかに互いの健闘を称え合っている。粗方の騎士とのやり取りを終えた王妃様が、漸く壁際に立っているわたしとリアーレさんに気付く。

「ミオ！ 久しいな、壮健か？」

「おかげさまです」

「リアーレもな！」

「立礼、ご容赦下さい」

（久しいって…まだ4日ですよ王妃様）

王妃様が足早にこちらに近づいてきた。変わらない態度や表情に苦笑してしまう。

「どうした、珍しい所で会ったな」

「はい、少しお話したくなりました。お時間ありますか？」

「良いぞ！だがこんな暑苦しい所では落ち着けんな、部屋に戻るぞ」

「はい」

王妃様の後を付いて行き、先ほど一度訪れた部屋に戻ってきた。

侍従長にお茶の用意を命じ、王妃様は着替えの為に一旦退出される。部屋の主が戻ってきた事により、勤めている侍女さん方はテキパキと指示に従い動き出す。

わたしは勧められたソファに座ったが、何故かリリアーレさんは座らずに立ったままだ。

「？リリアーレさんは座らないのですか？」

「はい、私は王妃様わたくしの客では無く、三才様のお供ですから」

一人だけ座っているのも居心地が悪く、咄嗟に立とうとしたが「失礼にあたる」と素早く言われて仕方なく一人で座った。こうした扱いを受けるのは日本人には珍しく戸惑ってしまう。

自分より年上の人が立っているのに、自分が堂々と座っているなんて居心地が悪い。

目の前にはわたしに用意されたお茶が湯気を立てているが、手が出にくい。

早く王妃様に戻って来てくれなにかと思っていると、願いが通じたのか、ドレスに着替えた王妃様がやって来た。

今日は藤色のドレスを着ていて、相変わらず”ゆっさゆさ”。

わたしの向かい側に座ると、王妃様の所にもすぐお茶がセツティン
グされた。

「寛いでいるか？」

「…少し緊張します」

「ミオは慣れてない様だな。リリアーレ座れ！それから茶を持って！」
後ろを気にして、遂スルツと口をついて出てしまった言葉に、気付いた王妃様がリリアーレさんに座る様促す。後半部分は後ろに控えている侍女さんに。

（うああ…すみません！儀礼とか色々あるのですが、その！慣れないのです！）

リリアーレさんが礼儀を大切にしている事はよく分かる。わたしの部屋で2人きりの時ならいざ知らず、王妃様の部屋で礼儀を欠く行為をしないのは分かっているのだ。

いっそバケツ持って廊下で立っていたい気分だ。命じられたら嬉々として従おう！寧ろ誰か命じて！

「では御前失礼致します」

「相変わらず堅いな」

静々と流れる様な動作でわたしの隣に腰掛けるリリアーレさん。その姿は洗練されていて本当に見惚れてしまう。

ボケツと見惚れているわたしと目が合うといつもものニッコリとした笑顔で返された。

あれ？呆れてたりしないの？

先程命じられた侍女さんが、リリアーレさんの前にお茶を用意してまた後ろに控える。

「主にお茶を許されば、許されるのですよ」

「あ、そうなのですか」

「ミオが上の空ではオチオチ話も出来んからな。」

お茶の用意。お茶にお呼ばれされたからお客と言う扱いなのだろう。

初めて見る習慣は戸惑うばかりだが、面白いなと思った。

隣に彼女が座った事で漸くわたしの落ち着かない気持ちも治まった。まずは3人とも出されたお茶を飲み、一息付いた所で王妃様が切り出した。

「して、改まって話とは何だ？」

わたしはカップを下ろしてから、王妃様の目を見てから口を開いた。

「先日は失礼な事をしてしまつて申し訳ありませんでした。」

「……………む？」

「その…折角お時間取らせてしまったのに、中途半端になつてしまつて。それにキチンとしたご挨拶もせず別れてしまつたので、大変失礼しました」

「……………」

王妃様が何も言つて来ないので、言いたい事を言い切つて低く頭を下げる。

本当は土下座したい所だが、この国では土下座しても伝わらないだろう。

(……………)

(……………?)

全く反応が無い。どういう事だろう。王妃様の性格だったら何かしらスパツと言つて来そうなものだが、無言の沈黙が続いている。とつても居心地悪い。

幾ら待つても何の反応が無く、少しだけ頭を上げて王妃様を見ようとしてそのまま固まつた。

いや、”わたし”も固まった。

王妃様はカップを手に持ったままの状態で固まっている。ついでに目をかつ開いて。

リリアーレさんはそんなわたしと王妃様にも気にせず優雅にお茶を続けている。

「あ…の？」

「…はっ！？何だ突然！」

わたしが声掛ける事で、王妃様は漸く気付いたと言う様子。

何だろっ何時もの堂々とした態度とは思えない。何故か戸惑っている様子でこちらも不安になる。

まさか、頭を下げるって謝罪にはならない？異世界流”決闘を申し込む”と同じ動作だったりするの？

武道を嗜む王妃様に対して、ふにやふにやわたしが決闘を申し込む。そんな突然の事に王妃様も戸惑ってしまっているのか。

自分勝手に変な想像をしてしまう。

「あ…先日の謝罪をですな…」

「しゃーざーいー？…何を急に！！！」

「ですから…広間で失礼をしてしまった事に対しまして」

「そんな事気にしておったのか！！！！」

「えっ…ええ？」

寧ろこっちが驚きである。

「あれ位で非礼を欠いたとは言わん！！ミオにはミオの事情があるのだからかな！！」

「ですが…折角王妃様方自ら連れて行って下さったのに…」

「そうそう、私達個人でだ。私達が勝手に連れて行き、付いて行きたいから付いていった。アレは公務ではなく個人的な用事であり、楽しみだったのだ。だから護衛も遠ざけた。それをどうこう言う者は居ない。個人的にも怒りなぞ抱いておらんから、お前も気にする必要はないぞ！」

「……」

「そんな事を気にして詫びに来たのか。ミオは自分に厳しい様な」
公式の事だったら何かがあった時に、わたしにも非を認めなくてはいけない。

だからあの日、護衛騎士が一步離れていたのだ。そんなに前から気を使ってくれていたのか。
何から何まで本当にすみません、だ。

それにこちらの気持ちや事情をあえて聞かずとも、酌んでくれる懐の深さに泣きそうになる。

王妃様は最初からずっとこんな風に接してくれた。

偏見も格差も何も無く、最初から”ハーミシユリエラ”としてわたしに接してくれていた。

彼女のこの魅力は何処から溢れ出てくるんだろう。

初めて会った時よりも、今の方がずっとこの女性ハーミシユリエラに惹かれている。普段だったら伏せている、自分の気持ちや王妃様には不思議と話せた。

この人には嫌われたく無いなあ、と素直にそう思える。

やはり此処に来て良かった。

「厳しいと言うより、次に会う時気不味くなるのが嫌で…これは保身です」

「それでも構わん、気持ちは分かったからもつ良い」

「はい、有難うございます、王妃様」

「うむ、……ところで話は変わるがな、ミオ？」

「はい？」

突然王妃様が話題を変えようとして来る。

一体なんなんだろう。

「その”王妃様”を止めぬか？」

「……え？」

「”王妃様”呼びだ。お前にそう呼ばれるのは嬉しくない」

(ガーン！嫌われたく無いと思った瞬間に呼ぶのを否定された！)
女兒呼びの時の様にクリティカルな衝撃を受ける。

「ああ、待て待て何か勘違いしているな」

「……はい？」

「つまりな、私の事は名前だな？」

「……名前です？」

「そつだ、”ハーミシユリエラ”だ」

オウム返しに聞くわたしに王妃様は 名前で呼べと。

「いいいっつつ無理です！！」

言われた事を理解した瞬間に否定の言葉が飛び出した。

部長や社長を名前で呼ぶのとは訳が違う！

王妃だ王妃！！王族なのだ！称号や身位に尊称をつけて呼ぶのがスタンダードなお方だ。

そんな方を名前呼びなんて恐れ多い。

「ミオ。さつきも言ったが私はこの先も、ミオとは”個人的”に付き合っっていくつもりだ、個人的な希望なのだがな？」

「そっそれでも…」

「私の個人的なお願いだ」

「っうっ」

「なあ？ミオ？」

ぐはっ！王妃様が少し悲痛そうな表情で身を乗り出してくる。

おおすげえ谷間だ、絶景絶景〜じゃねーよ！

「うわわ、あああのも」

「…チツ落ちんな」

舌打ちは良くないと思います。あと色気を女性に向けるのは可笑しいです、陛下に向けて下さい。

王妃様はガラリと色気を引っ込ませ、足を組むと、それまで黙ってお茶を飲んでいたりリアーレさんに視線を向けた。

(リリアーレ！何とか言え！) (私わたくしでは何とも) (一人だけ名前で呼ばれて調子に乗っておるな！) (呼ばれる楽しみは、お分かりにはなりませんでしょうね、”王妃様”)(…ぐっ！)

2人が目で会話している間、澪は開放されたと思って暢気にお茶を啜すすっている。

別に仲が悪い訳ではないが、王族貴族間のやり取りなんてこんな物だ。

「…そつだミオ！私に会うには理由が必要なのだ！だがお前は貴族ではない！」

「……そつですな？」

「そうとも、お前は貴族ではない。そしてこの後宮には今後来て貰う！だが従事としてではない。これの意味する所が分かるか？」
「いいえ？」

王妃様の言わんとしている所が全く分からない。この国の人間ではないのだから貴族にはなれない。

その事を繰り返す言うのは何故なのだろう。

隣のリリアーさんは肩を揺らしてそ知らぬ振りだ。

「友だ！」

「……とも？」

とも？ 艦？ 智？ 朋？ 鞆？ 徒も？ 戸も？ TOMO？

そんな役割あつたかな？ 何だか一つだけ、非常にピッタリ来る”とも”を知っているけれど、はっはっはっはまさかまさか。わたしはそこまで脳味噌フェアリーじゃないぞ。

うん、うんまさかね。

「私の個人的な友として、今後も会おうではないか？」

「ええつと……」

ああ…何だか前後の単語や接続語からとつても”友”が当てはまる事を仰ってる王妃様。

わたしは最後の足掻きで見当外れな事を言っている。

「友として、親しい友として！な？」

「う……」

「友ならば、名前で呼ぶのが普通よな？」

「うひっ……」

「そうだ親しい友ならば、”愛称”で呼ぶのが普通だろう」

「ひよっ」

「どれ、一つ練習に言ってみるか？」ミシユ”と呼んでごらん？」「ふわわわわ」

王妃様が猫なで声でわたしに囁いてくる。

いつの間にかテーブルを回り込んで、わたしの隣に来ている王妃様。手を持たれて真正面から覆いかぶさる様な囁きにわたしはどうする事も出来ない。

大きな柔らかき物を押し付けられて、顔に熱が集まる。

隣でリリアーレさんが「陛下には見せられませんね」と呟いている気がする。

結局

「ではなミオ。また時間が有る時には”があるずとおく”をしような！」

「……はい、ミシユ」

恐ろしいこの国の王妃！恐ろしいミシユ！流石は類まれなるお胸の持ち主！

わたしは色気と胸の前に陥落して（別に関係ない）彼女を名前で呼ぶ事になった。

しかも人目が無い所では敬称をつける事も禁止された。だから人が近くに居る時は今まで通り”王妃様”、部屋の中や知り合いしか居ない場所ではハーミシユリエラ改め”ミシユ”と言う様になる。

王城を出る話をしている間も、慣れていない為にうっかり”王妃様”と出ようものなら、鋭く否定されて着実に慣れさせられている。

もう”王妃様”では返事をしないとまで言われた。
強引な…と思うのに、彼女の事を嫌になったりはしない。
何だかんだと向けられる好意が嬉しくて、こそばゆい。
新しく出来たこの関係は、改めて言われると恥ずかしいが、決して
嫌な物ではない。

この生まれた世界も考えも人種も違うわたし達を表すこの間柄。
この世界で初めて”友達”が出来ました。

13：その意味

それから暫くは平凡な日々が何日か続いた。

”紋”の件が思いの他時間が掛かっているらしく、あれから陛下から色よい返事が来ないのだ。

何時までも無職のまま王城でご厄介になるのが心苦しいのだが、これが中々上手く進まない。

ただお任せしている身なので、只管待つしかない。

だがその間ぼけーっと過ごしている訳にも行かず、リリアーレさんからこの国の貨幣価値や流通事情や食事についての事を勉強させて貰っていた。

たまに王城の料理長にも実際意見を聞かせて貰ったり出来たのも良かった。

この国の基本的な食事情をリサーチしておけば、城下に下りた時にきつと役に立つ。

一日の大半はそういった勉強に当て、午後のお茶の時間に合わせて王妃ユミの所にご機嫌伺いをしてちょっとしたお話をする様な生活を送っていた。

そうしている内にすっかり料理長や王妃付き侍女さんと顔見知りになれた。

最初は余所余所しかった料理長も、わたしが料理について真摯に聞く様子に料理人として信用してくれたのだろう、今ではちょっとした話も出来る様になった。

ここで過ごす様になってからのわたしの交友関係（交友と言うか…親しくして頂いてる）と言ったら、ミシユ、リリアーレさん、陛下、

ルキさん（相変わらず会ってないが）と片手で足りるくらい少ないけれど四人に対しては本当に感謝している。

だから今日はわたしの仕事を見せる意味も合わせて、ある事を試してみようと計画を立てた。

お茶の時間になる前に料理長の所に、それから侍女さん達の詰め所に足を運んでちょっとしたお願いをしてきた。

それはお茶の時間の事について

ここの王城で出される主なお茶請けは軽めのパンやチーズ、フルーツなどで、いわゆるスイーツと言う甘いお菓子が無い。

それに出されたパンも軽食用サイズと言うより、ちょっとした食事の量で出される。これでは残してしまう人も多いだろうし勿体無い。その代わりに紅茶や飲み物には砂糖をこれでもか！と投入するのだ。入れてはいけない訳ではないが、これでは折角のお茶の風味を楽しめないだろう。

だから今日は、わたしなりのお茶会を演出してみようと思った。

あとはわたしが動くだけ。

陛下とミシユとリリアーレさんには予めお茶の時間にある場所に来て貰う様伝えてある。

ルキさんは結局部屋でも会えず仕舞いだったので、リリアーレさんに代筆をお願いして手紙を置いてきた。

出来る事なら来て欲しい。

そのある場所とは王城内にある園庭

今日はそこに侍女さん方をお願いして背の高いテーブルと椅子を用意して貰ってある。

四人が来るまで、まだ時間はたっぷりある。

わたしが椅子の位置や整えていると、料理長や侍女さん方が頼んでおいた物を持ってやってくる。

「あの、頼まれた物を用意しましたが。これは一体…？」

料理長はお皿に載せて持ってきた物に、戸惑いが隠せないようだ。聞くとこの国では庭でお茶を飲む習慣が無いそうだ、それに部屋でお茶を飲む時も基本はソファに座って飲むらしく、背の高いテーブルや椅子はあまり使わないらしい。料理を庭に運んで貰う様に頼んだわたしの意図は全く意味不明だろう。

「気にしないで下さい。今日は趣を変えて見たい気分なんです」

「はあ…そうですね。あのこの料理皿はどうすればいいでしょうか？」

「あ、こっちに頂きます」

料理を見て、依頼していた通りの出来栄えに知らず笑みがこぼれる。流石プロの料理人、こちらが指示した事を忠実に再現してくれている。

「ありがとうございます、流石ですね」

「いいえ、この年になって勉強させて頂きました」

「この花瓶はどうしましょう？」

「あ、それはですね…」

久しぶりの仕事の感覚に気分が高揚してくる。

強力してくれた料理長や侍女さんの為にも絶対に成功させようと思っ

た。暫くすると軽い衣擦れの音と一緒に足音が聞こえて来る。

「こんにちはミオ様」

「邪魔をするぞ」

「お呼ばれしたよ」

「リリアーレさん、ミシユ、陛下。こちらにどうぞ」

招待していた三人がやってきたので、それぞれ席へ案内する。

今日は皆が顔を合わせられる様に円形テーブルにしてみらった。

並びは陛下、ミシユ、リリアーレさん、ルキさんの順。

先に席に来た三人は慣れないテーブルや椅子などに、少し驚いた様子だが興味の方が強いのだろう、テーブルの上に並べられた物をしげしげと眺めている。

ただ^{ルキさん}一つの席を除いて、全ては整った状態だ。

周りを見渡してみるが、彼の姿は見えない。

しかしお客様は席に付いた、これ以上待たせる訳には行かないので、先に始める事にする。

「ようこそ御出で下さいました。今日はわたしなりのお持て成しをさせて頂きますので、楽しんで頂ければ幸いです」

* * * * *
* * * * *

「ミオ、この”ミルクティー”と言うお茶は、初めて飲むけど美味しいね」

「ミルクを入れてまろやかにしてあるんです。こういった午後のお茶の時間には好まれる飲み物なんですよ」

「へえ砂糖を入れずとも飲みやすいね」

「この”ジャム”も、酸味と甘味が丁度良く”スコーン”に合いますわ」

「それは料理長が頑張って下さいました。苺もラズベリーも今日の

ために朝から作って下さったんです」

「然様でございましたか。お茶に良く合いますわ」

「テーブルクロスも刺繍が細かいな。飾られた花々も見目麗しい」

「侍女さん方がミシユ好みを考慮して一生懸命編んでましたよ。このお花はこの庭に咲いている物です」

「茶の席で花を愛でると言うのもいい物だな」

今回わたしを用意したのは、一般的なアフタヌンティー。

ストレートティーの後のミルクティー、ティーフーズは一口サイズのサンドイッチの後にスコーンを、付け添えにはラズベリーと苺のジャムを用意して貰った。

本当はクロットッドクリームを作りたかったが時間が足りなかったので残念ではあるが。

テーブルセツティングはミシユが好むローズ刺繍のレースクロスを用意して貰ったり、庭師さんをお願いしてピンクローズをテーブルに置かせて貰っている。

三人は初めて飲むミルクティーやスコーンに舌鼓を打って会話も弾んでいる様だ。

好感触にやって良かったと思う。やっぱりお茶も食事も楽しんで欲しいのだ。

大体会話が落ち着いて来たところで、今回貢献してくれた人を紹介する。

「今回のお茶会ですが、如何でしたでしょうか？」

「お茶の時間がこんなに楽しかったのは初めてだよ」

「ここではこの茶会を広めるべきだな」

「素敵な時間を過ごさせて頂きましたわ」

「それは良かったです。それから、今回このお茶会に欠かせない人

達を紹介します」

そういつて、一步後ろに控えて居た侍女さん方と料理長を呼ぶ。皆ここで名前が出るとは思っていなかったのか、戸惑い一つも前に出てきてくれる。

「今回この時間を作る為に料理やお茶を用意して下さった料理長、それに花のアレンジメントやテーブルクロスなどを作ってくれた侍女さん方です。この方々が居なかつたら、この時間は作れませんでした。」

そういつて、わたしは後ろを振り向き料理長や侍女さんに頭を下げる。

突然言い出した事にも、快く強力してくれて本当に感謝している。

「いえっそんな」とか「こちらこそ」など皆慌てているが、まんざらでも無さそうだ。

本来お茶会は招待する側もされる側も、楽しんでこそなのだ。

”おいしい”や”ありがとう”が最高の報酬である。

一生懸命もてなしの準備をして、それが喜ばれるとそれまでの苦勞が嘘の様に感じられるのだ。

「これがミオがしたい仕事なんだね？」

「はい！」

「私は賛成だぞ。しっかりとやると良い」

「私もですわ」

サアッと柔らかい風が吹く

次の瞬間に空から沢山の花弁が落ちて来て空間に彩りを加える。フワフワと漂う花弁はまるで踊っている様で幻想的だ。

まるでこの場の雰囲気を温めるかの様に、優しくそよぐ風と花。あまりの光景に周りに居る侍女さん方を始め皆が頭上を見上げて花弁の舞ってる様に見惚れた。

突然の花の雨にお茶会の席は暫く時が止まったかの様に感じられる。数秒か数分　花弁は全て地に落ちてしまいが、暫くはみんなが余韻に浸っていた。

「凄く…綺麗でしたね。雪が舞ってるみたいで、わたしの国では花吹雪って言うんですよ」

「確かに雪が舞う様だったな」

「本当に最後に良い物が見れました」

本当に今の光景は幻想的で夢を見ているかの様に綺麗だった。

白の花弁が舞う様は桜吹雪の様にも、雪が舞っている様にも見えた。けれどその光景は、ここには居ない人を彷彿させた。

まるで雪の様だと思った

今日用意した席は四つ。　席は一つ空いたままだ。

わたしとミシユとリアーレさんが今の光景に感嘆していると、向かい側で陛下が可笑しそうに笑っている。一人だけ話に加わって来ないので、ミシユもリアーレさんも不思議そうだ。

「どうしました？」

「いや…素直じゃないなと」

「何の話です？」

「今の花、ルキだよ」

「「「えっ？」「」」

三人の声が重なった。
ルキさん？来ているの？見渡してみても姿は何処にも見えない。
同じ様にミシユモリリアーレさんも周りを見ていたが、わからない。
と言う表情だ。

「恐らく来辛かったんだろう、それでさっきの花って訳さ」

「…意味が分かりませんが」

「お茶に招いた御礼と思っておけばいいよ」

ルキさん
「そこ空席ですけど」

「まあだから素直じゃないって事さ、微笑ましい事するじゃないか
あいつも」

お礼？ 花？

それつきり陛下は笑ってるだけで何も教えてくれなかった。

ルキさん？

14：その不可解な

結局”花”について陛下は口を割らなかった。

わたし以外の人達は”ルキ”さんと言う名前を聞いて、何となく理解はしたらしい。

一人だけ除け者で何だか損した気分だ。

ルキさんが空から花を撒いている姿を想像する、わあまるで妖精！

「ルキで変な想像するのではないよ」とか陛下が言っている。知るか！

何だか分からないけれど、ルキさんが何かしたんだろう。

ルキさんに関しては毎度毎度良く分からないので、何かしたんだろう、ばっかりだ。

それで良いのかルキさん。

聞こえてもいないであろう相手に突っ込みを入れる。

お茶会が大成功に終わり、わたしはルキさんの部屋に向かっている。部屋が近いので一人だ。

結局お茶会に来てはくれなかったが、出されたお菓子のお裾分けをするつもりで。

ミルクティー
紅茶については何時飲むか分からないし、時間が経った物を出したくなかったので、最初から持ってこなかった。

”慣れた”ドアをノックする、が、やはり応答は無い。取手を引くとドアが開いた。

相変わらず鍵が掛かっているないので、家主が何も言わないことを良い事に、最近では堂々と部屋に入ってしまった。勿論立ち入るのは温室のみで、他の部屋には一切触れない。

部屋に家主は 居るか居ないか分からない。

一応声掛けしているは居るが、殆ど意味を満たしていない。

温室に進むと奥のテーブルに、バスケットごとお菓子を置く。

(ここに置いておけば気付いてくれるだろう)

用事が済んだ事で早々と部屋を出る事にして、何だか不思議な感覚を覚えて立ち止まる。

木々は静かにそよいでいる。

あ そういえば、明るい時間帯に此処に来たのは王城で目覚めた日以来 初めてだ。

いつもは夜遅くになっていたから、夜感じる部屋とは違う雰囲気違和感を感じたのだろう。

(そっか：確かこの世界で1度目は森、2度目は此処で目覚めたんだった)

あの日と変わらない温室がここにあった。

暫くこの空気を堪能し、わたしは部屋を出た。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

自分の部屋に帰る為に廊下を歩いていると、後ろから声を掛けられた。

「そのー！」

「え？」

周りには誰も居ない。わたし？

後ろを振り向くと見慣れた外套をまとった”知らない男性”。

わたしが歩いて来た方向から、その人は近づいてくる。

格好から魔導師　　だと分かった。
そんな人が何の用だろうか。

「今、何処から出てきた」

「…何処って…」

「今！どの部屋から出てきたと聞いている」

何なんだろう突然。どの部屋ってルキさんの部屋でいいんだろうか。
まさか不法侵入した事を責められるとか！？

「…ルキさんの部屋ですけど」

「ルキウス・ベルか！奴とどう言った関係だ！」

「は？なんですか急に…」

「隠し立てするな！」

何なんだ行き成り。訳も分からないな。

それにしたって、いきなりだ。人に物を尋ねる態度じゃない。

あまり此処に居るのは不味いかもしれない。立ち去ろうとした所で、
腕を掴まれてしまう。

痛っ　　なんつー馬鹿力で掴むんだ。

その人はわたしを上から下までジロジロと見回す。

その目は何かを見透かそうと探る様で、不快な気持ちにさせる。

「そうか！お前が先日連れ帰ったと言う者が」

「あの、離して下さい」

「一体何を企んでいるかは知らんが、何も知らないのなら早々に手を引け」

「何言って…」

「奴の力に目が眩んで事を起こすのは愚かな事だ」

「つつ離してっ！」

力いっぱい腕を振って、やっと手が外れる。ジンジン痛んで痣になつてそうだ。

わたしは目の前の魔導師から距離を取り、ジツとにらみつける。

なんだか分からないが凄く失礼な人だ。寧ろ人じゃなくて野郎呼ばわりでいい。この野郎！

どうにかこの男の視界から逃げたいと周りを見渡してみると、遠くの廊下を歩いている”白銀色”を見つける。

(……)

わたしの視線の先に気付いた男も、向こう側に居る”その人”に気付いた様だ。

その瞳にはあからさまに”彼”に対する”畏怖”と”嫌悪”の色が浮かんでいる。

男が少し後ろに下がった分、わたしとの差が開いたのでその隙にその場を離れる。

しかし追い討ちを掛ける様に男の声が聞こえて来る。

「奴の恐ろしさを知れば、後悔するぞ！」

「……………」

声を無視して一心に足を進めた。早く、早く。遠くの姿に向かって必死に走った。

「 ……!! 避ける!!! 」

「 え 」

漸く足を緩めた辺りで、後ろの方から先程の人の鋭い声が聞こえて来た。

と同時に回りにフツと濃い影が落ちる。

(え ……)

後方から聞こえる焦り声と、それからわたしに気付いた”灰色”の瞳と目が合う。

その瞳が驚きに見開かれた。上を見上げると壁の一部が崩れてわたしの上に降ってくる。次の瞬間頭に衝撃を受けて、目の前が真っ暗になった。

(!) () () (!)

頭の上の方で話し声が聞こえる。言い争いの様だ。

声？

「頭を打っている、俺が治療を」

「退け」

「お前っ！」

前髪を掻き揚げられる。

途端にこめかみに鋭い痛みを感じた。

「っ…っ…」

「動くな」

身動きすると叱責の聲が飛んだ。

(あ。この声は)

どうして 目を開けようとしたら、目に手のひらを置かれ視界が遮られた。

後頭部とこめかみ部分が痛む。何かぶつけた様な痛みだ。背中が硬いから床に倒れている？

「…ル…」

「黙れ、気が散る」

そのままジツとしていると、熱を持ってジクジクとしていた痛みが和らいで最後には無くなった。

しかし起き上がろうとする前にまた視界が真っ暗になる。

「ちよ」

頭から布 外套？を被せられ、持ち上げようとして、そのまま外套で体を包まれた。腕も巻き込まれて身動きが取れない。まるで簀巻きの様だ。

「おいっ！何をしている」

変な男も抗議の声をあげている。

しかしわたしはそのまま持ち上げられて、抱え上げられた。

「うぎゃっ」

「うるさい」

突然の浮遊感に驚きよりも恐怖が強かった。

前も見えず身動きもとれず、まるで糞虫状態のまま運ばれて抗議を上げるが。

全て無視される。手足をバタつかせてもビクともしなかった。

(うー不安定で怖いっ！)

そのまま暫くしてドアを乱暴に上げる音がして、何処か室内に入った事が分かった。

「……ルキ？」

(この声は…陛下！執務室！?)

「それが収まるまで部屋から出さな」

そういつて柔らかくて硬い ソファに投げ捨てられる。

(痛った！お尻打った！乱暴反対！)

また乱暴にドアを閉める音がして、室内が静かになった。

わたしは抜け出そうと一生懸命もがいて脱出を図る。

(くそう、もつと優しく扱え！)

イラついて鼻息も動作も荒くなる。

漸く外套地獄から抜け出すと、やはり陛下が居る。プライベート用執務室だった。

わたしはロココソファに座らされている。

「ミオかい？」

「見て分かりませんかね！！」

思わず陛下に当たってしまった。

なんだ突然、あの男！

「今のルキさんですよね？」

「そうだねえ」

治療をしてくれたまでは分かった。
けれどその後の行動が不可解だ。

「わたし何でここに連れてこられたんですか？」

「…うーん、なんと行っていいやら」

「いきなりバサツと来てグイツと来てポイツですけど」

「うーん、乱暴だねえ」

「真面目に答えてください！」

「うーん…とりあえず今外に出たら、大騒ぎになってしまうだろうから、この部屋に居なさいね」

「どういう意味ですか？」

「ちょっと今は説明し辛いね」

何なんださつきから、ルキさんも、陛下も変に”なった”。
収まるってなんだ収まるって。わたしが落ち着きが無いとでも言う
のか。

「いやー…話には聞いていたけど…これは何とも…」

「さつきから何言っているんですか？」

「こっちの話だよ」

そうこうしていると、また扉の外が騒がしくなってきた。この騒ぎ
方は

「ミオ！生きてるか！壁の下敷きになったと聞いたぞ！」

またしても乱暴に扉を蹴り開けてきたのは、想像したとおり、ミシ
ユ。

「一応ここ王の執務室なんだけどねえ」陛下が呟いている。

息を切らせて入って来たミシユだが、ソファに座っているわたしを
見ると、動きが止まった。

次の瞬間もの凄い勢いで陛下の方を向いた。陛下は肩をすくめる。
そしてまたわたしを見る。

（な、なにその反応）

部屋に飛び込んで来たがミシユがわたしを見ると何故か陛下と同じ
様な反応を見せた。

「あの、ミシユどうしたの？」

「うーむ、これは…」

二人して奥歯に物が挟まった様な言い方をする。

お茶会の時はそんな事は無かったのに、何故急にこんな態度を取る

のだろうか。

お裾分けを置いて、変な男に会って、ルキさんに何か治療？して貰って？

その間に何か合ったのだろうか？

心なしか、皆が髪の毛を物凄く見ている様に感じる。

(髪 ？)

今更黒髪が珍しいのだろうか？

毛先を持って見て見たが、特に変わった所は見当たらない。

いぶかしんでいると、目が合った陛下は微妙な笑顔を返してきた。

何が何だか全く分からない。

暫くして部屋に帰って良いと言われたが、一体何がしたかったのか謎である。

それにしても、皆の態度が意味深でこちらは気になって仕方がない。結局寝る時もうんうん唸って いつの間にか寝ていた。

この時の理由

後日わたしは身を持って知る事になる。

15：その王都

「それは災難でしたわね」

「何だか皆可笑しかつたんですよ」

「それは是非拝見して見たかったですわ」

わたしは今リリアーレさんに昨日の事を愚痴っていた。

彼女とはお茶会后会っていないので、昨日の騒動を知らなかったのだ。

話は聞いていた様で、顔を合わせたら心配されてしまった。この通り元気でず。

「ですが、何事も無く済んで良う御座いました」

「そうですね。…毎度思いますけど、魔導って凄いですね。怪我も綺麗に治してしまっし」

「恵みや癒しは生命樹セイファートの恩恵を尤も顕著に具現した力ですから」

「へえ」

そういえば、この国の農産業が豊かなのは恩恵のお陰だって言われた。

樹がそれだけ凄い力を国や個人に与えるなんて、言われただけでは想像し難いものである。

驚きなのは魔導師が使う”能力”って言うのは、生命樹から送られて来る力を使っている訳ではなく、元々魔導師自体が、生命樹からそう言った”能力”を与えられ身に備えているという事。

能力の大小はあれど、力は魔導師自身のオリジナルらしい。

だから元々身に宿した恩恵が多い人ほど”能力”も大きく濃い、小さい人ほど”能力”が少なく薄い。

わたしとしては生命樹〓発電所本体で土地を通して国に電力を供給する。

魔導師〓本人が小さい発電所、自立発電出来るが作れる電力に差がある（元々の資本の差?）。

一般人〓発電所から直接送られる電力で暮らしている。

と言う様に一旦自分の常識に当て嵌めてから考えないと、訳が分からなくなる。

実際はニュアンスとか違うかもしれないが、大体こんな感じだろう。こんな感じにしとこう混乱する。

漫画やゲームの主人公が突然見知らぬ土地に行って、その土地の常識をすぐに理解や納得してしまう描写を見るが、事實は小説よりも奇なりだ。

「ミオ様が今いらつしやる西棟は、数代前の後宮を利用した古い建物なので、壁が傷んでいる所も有るので気をつけて下さいませね。

…ミオ様？」

「あっはい、気をつけます！」

考えに集中してて反応し遅れてしまった。

元々思案するのは好きだけど、人が居る時には気をつけなくては。

「それから、昨日のお茶会がかなり評判になっっている様で、早速”

ミルクティー”や”ジャム”など真似して居る方が居るようですよ。流石にレース編みのクロスや薔薇を飾ったりなどは、陛下のお茶会位にならないと難しい様ですが」

「良い傾向ですね。真似からでも自分で”良い”って思える物を追求していくのが大切なのですよ。その結果、自分も楽しんで人にも喜んで貰えた。って言うのが理想ですね」

「はい、私も早速友人に伝えて、とても興味を持っておりました」

「昨日お出しした食事のレシピは料理長に渡してあるので、知りました」

「の方が居たら教えて上げてください」

「そうでしたの。では私も後で伺って見ますね」

「ちゃっかりしてるなあ、リリアーレさん。」

「本当はお世話になってるので直接教えてあげたいけれど、王城での調理許可が下りていないのと、まだこちらの世界の食材名や調理器具を覚えていないのでそれも難しい。」

「まあ王族貴族が口にする食料を扱う場所にほいほい部外者が立ち入らない様にするのは普通だ。料理長と話をした時も別の部屋に移動して貰ったしね。」

「でもお茶の時は好きにして良いって言われたので、これから茶葉とか色々研究してみよう。」

「お茶と言えば、この国に来て初めて口にしたルキさんのお茶も、あれは一体何のお茶だったのか非常に気になる所だ。」

「香りはまんまベルガモットだったけれど、一体何を使ったんだろうか。」

「まさか魔法使いみたいに何か色々な材料を混ぜ込んでかき混ぜて考えるのを止めよう。」

「ところでミオさま、私本日は街に下りる予定なのですが、一緒にいかがです？気分転換にもなりますし」

「えっ!!」

「(今なんと　!!)」

「いかがなさいました？」

「わたし、王城の外に出ても良いのですか？」

「……？いけないのですか？」

「……あれ？そう言えば良いとも駄目とも言われて無いです」

「陛下は私わたくしにミオ様のお役に立つ様言われましたから、この事も想定されてると思いますが」

そういえば、陛下はわたしの行動について、これと言って制限は付けていない。

強いて言えば、一人で出歩かない様に言われた位で、基本自由な物だ。

自分の生活保障や街に行つてからの事に精一杯で、回りから見た王城こでの立場を全然気にしてなかった。

まさか昨日の魔導師変な男もわたしを不審者だと思つてたんじゃ……いやいや、それにしつたつて言動とかなんか最初からおかしかったし。やたらとルキさんの事で噛み付いてたし。

……まあ良いか。もう会わない様にすればいいだけだし、わたしその内に王城でるし。

一応陛下に許可貰つて問題無ければ、外出しちやおう。

寧ろ思いついたら、どんどん行きたくなつて来た。

どんな感じだろう城下町つて凄く気になる

！！

「外出？うん、良いよ」

陛下からいとも簡単に外出許可が出た。

「本当ですか？わたし勝手に出たらいけないと思つてました」

「出かける時に声掛けてくれたら良いよ。ミオは慣れてないから何かあつては困るだろう？」

「はい…でも良いんですか？」

「君は”落し物”としてこの国に来たけれど、だからと言って監禁や実験対象にするつもりは無いよ。こちらとしてはミオの手助けはしてあげるつもりだ」

「わたし何の役にも立ちませんが…」

「利害は求めていないよ。君がこの国で生活する以上、その生活の保障をするのが王の仕事だからね。それに引け目を感じる必要は無いよ」

「…あの、ありがとございます！」

陛下がそこまで考えていてくれたとは思わなかった。ここまでされたら、感謝の言葉しか出て来ない。ここで遠慮したら逆に陛下に対して失礼だと思った。本当にこの国の人には貰ってばかりだ。

「わたしリリアーレさんと行ってきます」

「うん気をつけてね」

王城の外に出れる！

ずっと気になっていた外の様子が見れるのだ。これが期待せずにとっする。

わたしは陛下の許可を貰ったら、急いでリリアーレさんの所に戻った。

* * * * *
* * * * *

王都は大きく分けて6つのブロックに分かれている。

最初が聖域と言われる、セイファート生命樹の森がある山（わたしが最初に居た場所）。

その山の麓に抱かれる様にあるのが王城（騎士団や魔導師棟とか居住棟とかあって凄く広い）。

次が王城に一番近い貴族の屋敷が立ち並ぶエリア（リリアーレさん家はここにある）。

次に商店が軒を連ねている商業エリア。

次が一般人が暮らしている民家が並んでいるエリア。

最後が国営の農場・牧場・水産業などがある産業エリア。

因みに魔導師が常駐している派遣所は各エリアに数箇所あるらしい。

今わたし達が来ているのは商業エリア　らしい。

リリアーレさんに簡単な地図を貰って眺めているが、さっぱりだ。

何しろ王城から出てすぐに馬車に乗り、ここまで40分近く掛かった距離だ。

どれだけ王都広いんだと！

地図で見る分には分かり難いが、貴族の道は無駄な位広くて窓から外を見ても同じ貴族の屋敷郡が何処までも続いている、一つ一つの屋敷の大きさが信じられない位大きい。

貴族の屋敷地帯で一つの街が出来上がっている。

商業エリアは露天やテント売りの商店が並んでいるのを想像していたが、2階建てのアーケードになっており、天井は前面窓張りです。上から照明器具が所々に設置されて、凄く近代的な商店街のようになっていた。

商業エリアは人通りがあるので、入り口近くで馬車から降りて歩いている。

リリアーレさんは今日鍛冶屋に用事があると言っていた。

わたしは逸れない様に後ろを付いて歩いている。

何でも息子さんにお子さんおが生まれたそうで、リリアーレさんにし

たら初孫、そのお祝いに守り刀となる様に短剣を一振り贈るそう
だ。短剣を渡すのは女性の役目らしい。

その短剣のデザインなどを決める為に直接鍛冶師に話をするのだと
言っていた。

目的のお店は商業エリアも中ほどに近い場所にあった。

扉を見ると散房に広がった生花の”紋”（フジバカマに似てる）で、
『鍛冶屋「オルト・ヴェルノーズ」鉄製品承り』と言う様な意味の
情報が頭に入ってきた。

（こー言う風に使っているのか）

入り口のベルを鳴らして中に入ると、年配の男性が応対に出てきた。
リリアールさんを見るとすぐに奥に通される。

わたしは邪魔になるだろうから、他のお店を見てみようと思ひ彼女
に話しかけた。

「あまり遠くには行かないよう」「はい、ちょっと見て回るだけで
すから」彼女に一言断わりを入れて外に出た。

通りを歩いてみると、リリアールさんに聞いていた通り、文字看板
は殆ど見られず、大体の店舗が”紋”を看板やお店の至る所に掲げ
ていた。

それで気付いたのは、”紋”が木や花や実などの植物を模った物ば
かりという所だ。

国名が生命樹セイファートつて位だから、それに準じたり関係のある物が象徴と
なるのだろう。

因みに陛下（陛下の場合は”王”の紋で一律決まっているらしい）
は生命樹セイファートを模しているそうだ。

この国の”紋”はみんなどれも可愛い系や綺麗系で、”紋”だけ見
比べるのも楽しかった。

お店は食品や繊維・装飾品、宿泊所や雑貨や書店、食事所など、あ

りとあらゆるお店が立ち並んでいて、沢山の人が行き来しており活気があった。

お金を持っていないので買う事は出来ないが、始めてみる物や見慣れた”似た物”などを見るのも、ウインドウショッピングをしている様で楽しい。

”黒髪”が珍しいのか、たまに目を向けられるのが気になるが、外国を歩いている時はこんな物だろう。

その証拠に髪を見て「おっ」と言う顔はしても、すぐに興味が削がれるのか、暫くしたら自分のしている事に戻っていく。

街で外国人が居たらつい目が行ってしまふのと同じレベルの様だ。

一通りメインの大通りを見て回ると、今度は横道に並んでいるお店が気になってきた。

横道のお店は大通りほど大きな店構えではないが、アンティークっぽい家具や照明を置いているお店などが見えて、興味がそられる。ちらりとリリアーレさんが居る”鍛冶屋”の位置を確認した。

(ちょっと見て帰るだけだし…もし迷ってもこの大通りに戻れば…) 少しだけ過ぎた不安も目の前の興味には勝てず、わたしは横道に飛び込んだ。

数分後

わたしは人も疎らな通りに一人立ち尽くしている。

「ここ何処!？」

16：その遭遇

「こんな筈ではなかったのに……」

周りは白壁に囲まれた通りで、無特徴さが方角の感覚を狂わせる。塀はわたしの身長よりも高い為、遠くの屋根の特徴を見る事も出来ない。

数分前の楽観的な自分を叱咤したくなる。

横道に入った所に並んでいた店々は、個人宅を改装した様なアットホームな雰囲気を携えていて、概観的にも溍を楽しませた。

人も居るが、大通り程ではなく閑静な雰囲気だ。

その中で室内照明を扱っている店をみつけ、足をそちらに向けた。ぱっと見た所、店内に他の客は居らず、店主も会計には出ていない様だ。

屋根から下げられた外灯看板には”イチジク紋”『開店中』とあるので、用がある時には声を掛ければ良いのだろう。

シャンデリアなどの大きな物ではなく、机の上や足元灯に使う様な小さな物を中心に取り扱ってる様だ。

この国の照明は驚く事に太陽光式なのだ。

ただ日本のソーラーシステムの様な物ではなく、”^{プレート}光板”と呼ばれる物質（板と付いているが、丸かったり四角だったり平たかったり様々）に太陽光を浴びさせ蓄積させて使うのだ。

日中に太陽光を吸収させて、照明器具につけて利用する為夜でもかなり明るい。

この^{プレート}光板は600年程前に居た魔導師が作り出した技術で、今では国中の人が誰でも使える程に浸透している。

照明は繊細なガラス細工で加工されており、光を受けて様々な輝きを放っている。

(こーいうの玄関に置いたら可愛いだろうな)

(あれはリビングに置いたら雰囲気良くなりそう)

今は一人暮らしでお金も少ないので、小さい家だが、夢は一軒家だ。自分好みの家具や照明などを置いて自分の理想の”城”を作りたいと夢見ていた。

月一でリフォームの本を買っては、いつかは自分も。と想像して楽しむのが密かな喜びなのだ。

ひとしきり見て回って満足したので、そろそろ戻ろうかと思った。

が、その時、思わぬ音を耳が拾ってしまう。

まさに偶然の産物！寧ろ必然だったかもしれない！悪魔とも天使の所業とも思える！

まさか、いやしかし、常人だったなら気付かず、過ぎ去ってしまうであろう音も、溼の耳は正確に捕捉した。

「わんわん」

とんでもなく俊敏に首がそちらの方向に向けられた。

(ああ…やっぱり！)

そこには思っていた通りの”お姿”。

「わんわん」

ピンと立ったお耳に、クルンと上に撒いたお尻尾、ヘッヘッと舌を出している様子は笑顔にも見え、どーんと四肢で地に立つ姿は雄雄しくも、愛らしさを前面に押し出してきている。

ちよつと太めのガツシリしたおみ足も、アーモンド・アイの円らな瞳も堪らない魅力を醸し出している。是非その雄姿を後姿からも堪能したい。

その”お姿”は見紛うこと無い お犬様。戻らなくてはとか、飼い主はとかは全て頭からぶつ飛んだ。

そこにお犬様が居るから。

何を隠そう溇は大の犬好きだ。鈴木・イヌスキー・溇に改名してもいい位犬が好きだ。

真っ白な体毛は犬種は違うが愛犬チャーハンを思い出させた。

可愛い！是非お近づきに！触りたい！触ろう！触るべき！触らなければ！

あらゆる思考が全て目の前の対象に注がれた。

相手も溇に注視されている事に気付き、ジッと見返してくる。

興味を持ったのか、前倒姿勢でお尻上げて左右にステップを踏んでいる。

その姿を見ただけで、溇は頭の中に”わんこ超可愛い”の嵐が吹き荒れる。

驚かせない様に、ゆっくりと近づく。わんこは逃げない。

もう一步進む。わんこは同じ位置に居る。

手が届きそうな位置に来て、溇もしゃがみ込み、視線をわんこに合わせる。

へっへっと言う息が身近に聞こえる。

（仲良くなったら頭を、もっと仲良くなったらお腹と尻尾の付け根を撫でさせて頂こう。）

そのままゆっくりと手を前に出し、まずは慣れる為に下から首に触れようとす。

もう少し、と言う所で、わんこは軽快なステップで溇の前から飛び退ってしまう。

だが逃げるのではなく、少し離れた所でまだこっちを見ていた。

もう一度、澪はゆっくりと近づいていった。

しかし今度はわんこはトコトコと道を歩いて行ってしまっ、「あつ待って！」と澪も後を追いかけた。

わんこは散歩する様な速度でトコトコ歩いている為、澪も簡単に付いて行けた。後ろから見ると尻尾がクルンクルン、お尻がプリプリしてて絶景だった。

そのままわんこに付いて暫く歩き、わんこが道の角を曲がる。

しかしすぐ後をついて来ていた澪が角を曲がった時には、わんこの姿は消えていた。

「あれ？」

周りは生垣になっていて、個人宅の庭らしき物が見えている。

この辺りの家の子だったのだろうか、耳を澄ませてみたが、わんこの泣き声一つしない。

振られてしまったか…とガツクリした所で、はたと気が付く。

いつの間にか景色が商店街から、住宅街になっていて、道に人の姿は全く見えない。

「…しまった」

ここに来て漸く自分の失態に気付く。

犬に気を取られて、勝手にお店から離れてしまった。

彼女の用事はそろそろ終わっているかもしれない。そうだとしたら近くに居ないわたしに気付いて今頃顔を蒼くしているかもしれない。

(急いで戻らなければ！)

こうしては居られない、急いで元来た道を引き返した。

わんこについて歩いていたのはそれほど長く無かった筈だ。恐らく10分程度。ならばそれほど商業地区から離れていないだろう。

周りの景色の様子から、今居るのは隣の一般住宅街に入り込んだのだと当たりを付ける。

太陽の位置や遠くにうつすらと望む聖域の山から、大体の王都の方向を計算して歩き出す。

しかし似た様な道で特徴が少ないため、その内方向感覚が狂ってしまった。

まわりを良く見ていなかったため、正確な道も分からない。

こちらだ、と言う方を選んで歩いてきたが、一向に商業地区の人のざわめきは感じられない。

考えまいとしたが、これは間違い無く、

「わたし迷子？」

知らない土地で冗談ではない。

必死に見覚えのある景色を探して歩く。

いくつかの曲がり角を曲がった所で、足が痛くて足を止めた。

ずっと歩き詰めなので、サンダルストラップ部分が皮膚に擦れて剥けていた。

何処か座りたい所だが、ここで座ったら立ちたくなくなりそうなので我慢する。

少し足首を回して痛みを散らせた。

そしてまた歩き出そうとした所で

「むぐっ!!」

後ろから来た手に口を塞がれた。

痛みと疲れでぼうつとしていた為、反応が遅れる。

（ 何！変質者！？変態？痴漢！？ ）

暴れようとしたら羽交い絞めにされて動きを封じられる。

「騒ぐな。…お前何で此処に居るんだ？」

(この声は!!)

後ろからわたしを羽交い絞めに行っている男が静かに問いかけてきた。嫌な予感がして振り向くと、そこに居たのは昨日の”変な男”だった。

(もう会わない様にと思っていたのにこんな所で…!)
こんな時は颯爽とヒーローが駆けつけて助けてくれたりするんじゃないのか。

脳内では颯爽と駆けつけるミシユ。何故か壁を蹴り壊して。それなのに、選りに選ってこの男か。自分の運の無さに人生の無情さを感じた。

「むーっ!!」

「こらっ! 暴れるな」

(そう言われて静かにする奴が居るか!)

力いっぱい暴れて、男の足を踏んづけてやったりしたが、しぶとい男はわたしの拘束を解こうとはしない。

こうした時体格差が悔やまれる。男も身長が高くわたしの頭の遥か上に顔が見える。

わたしが暴れた位では、ビクともせず。逆にわたしが当たり負けしてしまう。

暴れ疲れてぐったりしてしまった。

「…いいか、手を放すが騒ぐなよ?」

漸く大人しくなったわたしに、男が声を落として聞いてきた。口はまだしっかりと抑えられている。

男が何を考えているのか分からないので、一応わたしは大人しく頷く。

今の所危害は与えて来ないが、昨日の今日だ、用心に越したことは無い。

男がゆつくりと手の拘束を解いたので、わたしは体を後ろに向けて男と向かい合う。

やはり”変な男”だ。昨日と同じ様に魔導師の外套を纏っている。

「お前何故ここに居る」

「……………」

正直に言っただけの物が一瞬判断に迷った。

昨日の態度からあんまりわたしに対して好意的な行動を取とは思えない、ただし魔導師は国に仕えていると言うから、陛下の部下でもあるのだらうし。

素早く頭の中で計算し、後者に掛ける事にする。背に腹は変えられない。

「迷子です」

「迷子？」

わたしの言った事に、男からの威圧感が若干弱まった。

男はまたわたしを上から下までジロジロと見た。

その見方は癖なのか？本気で止めて欲しいのだけれども。

男は少し考え込む表情になる。

「…連れは居るのか？」

「商業街の鍛冶屋に居ます」

「…わかった、送る」
「えっ！」

何急に親切になったんだろう。道を教えてくれないかと微かな期待はしたけれども…逆に何だか怪しい気がする。

”変な男”だし。実に怪しい。

「変な男ではない。ロヴェルト・ヴァン・セイグラント。魔導師だ」

口に出てしまっていたらしい。何て正直な口なんだ、わたしの口。しかし場所を考えるべきだった、魔導師この男とたった二人きりの状態では、言葉一つで何をされるか分からない。

「…連れに会いたいなら付いて来い」

男の反応を見ていたが、特に名乗る以外には何もされず、男は歩き出してしまふ。

なんだと言っのか。昨日は有無を言わせずだったのに、今日になってこの対応。

信用した訳ではない、少し距離を置いて男の後を付いていった。

暫く無言で付いていったが、男が突然口を開いた。

「昨日は悪かった。ルキウス・ベルより…事情は聞いた」

「え…？」

「陛下の食客と聞いている」

（えーっと…それは何処まで事情を知っているんでしょうか？）

「事情があり貴賓待遇で国には入れなかった為に、ルキウス・ベルが関与したと聞いた」

男がわたしの心の声に返答するかのように言った。
「どうやら”落し物”の事までは、伏せられたままの様だ。
(そうか、わたしは陛下の食客扱いなのか。実際は食客どころか居候ですけども)」

「…悪かった。そうとは知らず馬鹿な事をした」

男は今までの態度が、嘘の様に謙虚だ。凄くばつの悪そうな表情。心なしか気落ちしている様にも見える。
意外な反応だ。

「俺はどうも…ルキウス・ベルが関わると我を忘れてしまう」
「ルキさん？」

知った名前が出てきたので、反応してしまった。

そういえば、この人は(とりあえず男からは昇格した)昨日も、ルキさんの事でやたらと食いついてきていた。

何かあるんだろうか、ルキさんとの間に。
王城で他の人が向ける視線とは、また少し違った意味の視線を、この人は彼に向けている。

昨日感じたのは”畏怖”と”嫌悪”、ただそれだけでは無かった様に感じた。

「…あの、ルキさんの事嫌いなのですか？」

「…そう言った感情で表現するには難しい思いを奴には抱いている」

「……？」

妙な言い回しだ。嫌いだと否定している様にも肯定にも聞こえる。

という事は、嫌いでもあるが、それでも無い部分もあると言

う事だろうか。

なんだって、わたしが知り合った魔導師は揃いも揃って”こつ”なのか。

ルキさんも陛下もこの人も、癖があつて扱いづらい。

「……………」

「……………」

結局話題は途切れて、中途半端に無言の時間が流れた。

先ほどまでは、大丈夫だった無言が、今は少し居心地が悪い。

変に会話してしまつたからだろう。

わたしはそれでも問題ないが、前を歩く”人”は、後ろをかなり気にしてしまつている。

根は素直だけど不器用な人なのだろう、自分の非を認めてからは、わたしに対する態度が改まつている。

それで背後から襲うのはどうかと思うが。

(…はあ　お人よしだよな…)

「何故ルキさんの事を話す時に、名前フルネームと家名？も全て言つんですか？」

仕方なく、こちらから話題提供をした。

その気遣いは相手にとって、渡りに船だった様で、あからさまにほつとしている。

(ああ…わんこだ、デツカイわんこが見える)

頭とお尻に見えない耳と尻尾が見えた気がした。

「それは魔導師を呼ぶ時の決まりだからだ」

「決まり？」

「ああ、魔導師は”個”であり”団”ではない。家から継いだ名も

魔導師たる”個”の括りの下位に定められる。俺が魔導師で無ければ、セイグラント家の”ロヴェルト”で良いが、俺は貴族ではなく魔導師だから、”ロヴェルト・ヴァン・セイグラント”で”個”となる」

つまり継いだ家名も含めて、魔導師個人を表しているって事か。でも陛下やミシュヤリアーレさんとかは個人名だけで呼んでいたから、魔導師だけの決まりなのかもしれない。もし一般人もフルネーム呼びを強制されたら、とても会話が面倒でまどろっこしい。

(ん？と言う事は、この人貴族出身って事？)

「あの貴方って」

頭に浮かんだ疑問を聞いてみようと思った瞬間、

キーンツと頭に耳鳴りがした。

一瞬周りの音が全て消えて無音の世界になり元の音が戻ってくる。

「貴族出身のですか？」

「？」

「…は？」

「……………！？」

「え…？何を言って…もう一度言ってください」

「…！！」

目の前の人が驚愕の目でわたしに”何か”話しかけてくる、それな

のにわたしには何を言っているか分からない。

今までは普通に話せて居たのに、何故急によく分からない言葉を使い始めたのか。

そう思つて、　　違う。と気付いた。

初めてルキさんと森で会つた時、あの時と同じ”音”が目の前の人から聞こえて来る。

この感覚は覚えている。

違う言葉話し始めたのではなく、”わたし”が言葉を理解出来なくなつたのだ。

17:その結末 * (前書き)

若干きわどい表現があります。

17：その結末 *

「、、！！！」

「はい、すみません言ってる意味が分かりません」

「……！！！」

「そう言われなくても、何を言ってるか解らないのですよ」

わたしは先程から不毛な会話を繰り返している。

ロヴェエ：何とかさんは、必死の形相でわたしに”何か”訴えているが、残念ながらわたしには解らないのだから、仕方が無い。

「……。」

何を言ってもお互いの言葉が伝わらない為、目の前の人は途方に暮れてしまう。

それはそうか、いきなり会話していた人物の言葉が解らなくなってしまうたら、誰だって混乱する。

ルキさんがあそこまで落ち着いていたのは、恐らくわたしが最初から”異世界人”と解っていたからかもしれない。

かといって慌てたあの人は想像も付かない。

「あの……ここで立ち尽くしていても何ですから……」

ロヴェエ何とかさんの外套の裾を引っ張って道の先を促す、言外に「鍛冶屋に連れて行って欲しい」と伝える。

わたしの下手糞なジェスチャーでも意味が伝わったのか、コクリと頷いてくれる。

先程の無言とは別の意味で微妙な雰囲気の中、只管無言で鍛冶屋への道を進んだ。

暫くしてやっとなのざわめきなどが聞こえ始め、漸くわたしの気持ち
ちは落ち着いて来た。

(良かった。ちゃんと連れてきてくれたのか)

見知った照明店の横を通り、やっとな通りに戻ってこれた。
とにかくリリアーレさんだ。随分時間が経ってしまっている、きつ
とわたしが居ない事に気付いているだろう。

少し先にある鍛冶屋「オルト・ヴェルノーズ」の方に視線を向けた。
すると鍛冶屋の店先に目当ての人が佇んでいるのが見えた。

「リリアーレさん!!」

「……!!ミオ!!」

(あ、名前は解る!)

わたしの声にリリアーレさんがすぐ反応し、わたしに気付いてくれ
た。

そしてすぐにわたしの所に走ってきて、わたしはそのまま抱きしめ
られてしまう。

「ミオ!!」

彼女は半狂乱と言うのが尤もなほど、取り乱しており、周りの人に
ジロジロ見られてしまう。

顔は蒼褪めており、目元が赤くなっている。

(心配掛けてしまった…)

「すみません、リリアーレさん」

「ミオ？」

「!!?」

「。。。」

「…?…」

わたしの言葉を聞いて、やはり彼女にも言葉が伝わらなかったのだらう、目を大きく見開いている。

辛うじてわたしを呼ぶ”ミオ”と言う単語だけが理解出来る。

それさえも注意して聞かないと、ただの”音”にしか聞こえないのだ。

そこにロヴェさん(で良いや)がやってきて、会話に割り込んだ。

突然割り込んできた魔導師に、リリアーレさんは驚いた様で、しきりにわたしとロヴェさんの顔を交互に見比べている。

そして事情を説明されたらしく、さらに驚愕してしまった。

しかし突然会話が出来なくなったわたしを見て酷く心配している様だ。

わたしは安心させる様に彼女の手を握った。

「すみません、心配掛けてしまって…」

「…。」

わたしの表情で分かってくれたのか、リリアーレさんは顔を横に振って、手を握り返してくれた。

「、？」

「。。」

そこにロヴェさんが加わってきて、またリリアーレさんに何かを話しかけている。

リリアーレさんは真剣な顔で何かを返している。

顔を振ったり、頷いたり、目や顔の動きで何とか何をしているのか、理解しようとするが、全然わからないのでお手上げだ。

言葉が解らないとこんなに大変だったとは。

何かを言い合っていた二人が、今度はわたしの方をジッと見て会話している。

リリアーレさんが頻りに頷いている、なんだろう？

一頻り会話が交わされると、リリアーレさんは繋いでいた手を離し、そのままわたしの手をロヴェエさんに渡す。その為自然と手を繋いでいる様な状態になった。

リリアーレさんは、また何かロヴェエさんに一言一言伝え、相手は頷いている。

わたしが訝しんでいると、ロヴェエさんに腕を引かれて肩を抱かれた。
(??? 一体なんだ?)

そう思った瞬間に、景色が歪み一瞬の内に辺りの景色が変わった。

「うわっ!!」

石畳の陸橋の上にわたしは立っている。隣には魔導師が立ったままだ。

目線の先には昼前に出たばかりの王城の門が見える。後ろを見ると貴族街の通りがずっと遠くに見えた。

(今何した? いきなり王城前に…瞬間移動ってやつ?)

「?。」

腕を引かれるままに、わたし達は門を通って王城に入った。

王城に入った途端、ロヴェエさんの歩調が速くなったので、わたしは走るしかなかった。

(ひいー足がもつれそう)

回廊に居る人たちは、異様な様子のわたし達に、サッと道を譲ってくれる。

知り合いなのであろう魔導師とすれ違っても、彼は短く返事を返す

だけで足を止める事は無い。

わたしは歩き出して早々に息切れしており、半分引き摺られていた。

(身長差を考えて欲しい…)

心臓の音と自分の出す息の音しか聞こえず、早くこの苦しみから開放される事だけ考える。

見知った”後宮”の回廊が見えた所で、やっと強制マラソンは終わった。

ロヴェエさんが後宮の入り口で、警備している騎士に一言声を掛けると、先に促される。

そして暫くしてやって来た所は生命樹紋セイフアトの彫られた大きな扉の前。

(やっぱり陛下の所に来たのか)

「ロヴェルト・ヴァン・セイグラント、」。

「…ロヴェルト？」。

ロヴェエさんが声を掛けると、中から少しの逡巡の後入室許可らしい声が聞こえて来る。

「」。

彼が入室したので、わたしも慌てて中に入った。

ロヴェエさんは執務機の所に居る、陛下と既に何か話をしていた。

後から入って来たわたしと目が合うと、「…ミオ？」陛下は何事か言ってきたが、やはり名前以外は何を言っているか解らない。

陛下は素早く執務机を回り込んで、こちらの方にやって来てくれた。心配そうにわたしの顔を覗き込んでくる。

「？ミオ」。

「すみません、さっぱりです」

わたしは首を振って、解らないと言うジェスチャーを伝える。
陛下はロヴェエさんの方を見てまた何か話し掛けている。
暫く二人の間で言い合いが続いたが、二人共難しい顔をしたままだ。
その時、また外から入室許可を求める声が聞こえて来た。

「ルキウス・ベル、」

陛下が返事をする前に、その人はドアを開けて入ってくる。
そして部屋の中に居る、陛下、ロヴェエさん、わたしと順番に視線を
動かし、動きを止めた。

この面子が居ると思っていなかったのか、意外そうな顔をしている。

「。」「

短く何か言っと、そのまま足を外に向けて出て行くこととする。

「ルキ！」

「？ ルキウス・ベル？」

「……」

すると素早く陛下に羽交い絞めにされ、ルキさんはその場に足止め
をされてしまった。

ルキさんは裏拳やら肘鉄で応戦している。

ロヴェエさんは何か仕切りにルキさんに噛み付いている。

ルキさんはそれでも外に出ようとして、陛下を引き摺って行くこと
足をさらに前に出す。

抵抗し合っているのか、二人して体がプルプル震えている。

(野郎三人で何してるんだろう…)

「ルキ、？」

「……」

「！？ ルキウス・ベル！」

「……………」

「！ ルキ ミオ？」

「。？」

「？？」

なんだろう、わたしの名前が出て来た辺りから、陛下の声の調子が変わった。

途中からロヴェさんは、会話の内容についていけなくなったのか、わたしと同じ様に観戦側に回った。

今は陛下とルキさんだけの会話が続けている。けれど、段々声が小さくなっていき、今では殆ど内緒話をしている様だ。

陛下はルキさんの首の後ろに腕を回してガツチリ拘束している。そんな中わたし達は(アレ、何話してるか解ります?) (俺にも解らん)と言う会話をジェスチャーでしていた。と言っても、ただアしを指さし、肩を顰めただけではあるが。

暫く二人のやり取りを眺めていると、陛下が顔を上げてわたしの方を見た。

そして手を招いて「こっちにおいで」と言う様なジェスチャーをする。

わたしが自分を指差し首を傾げると、そうそう、と頷かれた。ボディーランゲージ様々だ。

陛下の所まで行くと、何故か陛下がいつもの笑顔で微笑んでいる。肩に手を置かれて、体をルキさんの方に押された。

ルキさんは、もの凄く嫌そうな顔をしてわたしと後ろの陛下を見ている。

そして気付いた

言葉伝わらない＋ルキさん＝例のアレ

まさか、まさかアレか！あれなのか！？またアレを！！？

後ろの陛下を見ると、凄くキラキラした笑顔で後押ししてくる。おい、親指立ててんじゃねーぞ。

またルキさんに視線を戻す、灰色の瞳と目が合うが、やっぱり何を考えているのかわからない。

久々に見たルキさんは、けぶるような美貌はそのまま、歩く彫刻の様だ。

ちゃんと髪に櫛を入れて、髭も剃っている。よしよしその調子で怠っちゃういけないぞ。

ってー違うよ！

まずい、これは不味い。気持ち的にも、実際に感じるであろう味的にも不味い。

(……………逃げよう。)

「あつ
「！」

わたしは大声をあげて窓の外を指差す。

突然の大声と指差しにつられて、男三人が窓の外に顔を向ける。

アツサリと引っ掛かった事にしたり顔で、わたしは急いで扉を開けて逃亡を図った。

「ミオ？」

「ミシユー！ごめんね、今は駄目！」

「　　！　　ミオ？」

廊下で侍女さんと歩いてたミシユとすれ違っが、今は拙いと挨拶もそこそこに、わたしは只管走った。

* * * * *
* * * * *

「今ここでミオと、すれ違ったがどうしたのだ？」

ハーミシユリエラが開け放たれた執務室を覗き込むと、呆然と立ち尽くしている男が三人。

「……ミオが逃げたよ。ルキ、森で意思疎通が出来る様にしたとは聞いたけど、何をしたんだい？」

「……………」
「……意思疎通？　どう言う事です陛下？」

「……ロヴェルト、すまないね。その事はまた後で説明するよ。」

「何だ？　ミオがどうかしたのか？」

「ハーミシユリエラにも後で説明するよ、とりあえず今はミオを探そう」

ロゼウインがルキの肩を叩き促すと、ルキは静かに部屋を出て行った。

* * * * *
* * * * *

* * * * *

走って走って走りまくってやってきたのは、王城の西棟だった。やはり普段生活している建物の方が、逃げるにも身を隠すにも都合が良い。

アレだけは何とか辞退させて頂き、別の方法を考えて貰うか、頑張っ
って言葉を覚える努力をしよう。

今なら言葉だつて文字だつて進んで勉強させて頂きたい所存だ。

それまでは何とか逃げ切つて、アレは嫌だ！と言つ事を理解して貰
おう。

回廊の角に差し掛かるたびに、少し顔を出して、廊下の先に追手が
居ない事を確認して進む。

気分は隠密 やみにかゝってくれていきゝる ってこれは違うか。
自分の部屋はすぐに足が付くので、別の場所で無ければいけない。
並んでいる部屋のドアノブを捻るが、鍵が掛かっており、中に入る
事は出来ない。

(やっぱり普通は鍵掛かつてるよねゝ掛けないルキさんが可笑しい
んだつて)

こうしている間にも追手が迫ってきてそうで焦る。

周りを見回して、何処か身を隠せる場所は無いかと考え、

あれだ！

* * * * *
* * * * *
* * * * *

空には二つの満月レイシユスが上がり、夜の帳が落ちた。

セイファート

生命樹は月光を糧にその命を育み、国に恩恵を分け与える。
王城にもその光は降り注ぎ、暗さの中にも温かみを与えていた。

その王城の中を、靴底の掬れる音が鳴り響く。

昼間は少しは居る騎士や侍女侍従も、今は役目を終えて自室に帰っている。

その中をルキは一人で歩いていた。

昼間に滲が執務室から逃亡して、かれこれ数時間、目的の人物はいまだに見つかっていない。

ルキは王城の中をそれこそ、騎士団、魔導師棟、侍従棟、後宮、西棟、東棟の全てを探して回った。

（外か　？）とも思ったが、何故か外には出ていないと勘が訴えてきていた。

だとしたら何処に居るのか？

時間が時間だけに自室に戻ったか、もしくは”温室”かと思い、足を西棟に向けた。

静かな回廊を歩いていると、自分の内へと考えが向かっていく。

森での事、自室での事、そして昨日の西棟での事。

丁度いま自分が立っている辺りで”彼女”は倒れていた。

そして彼女と会う時は彼女が怪我をしている事がとても多い。

何故自分はそのような場所に遭遇してしまうのか　。

崩れた壁は今補修されている。

この崩れた壁の様に、彼女の傷も治っていく。

その事実にあ堵とも恐怖とも言える感情が湧く。

そしてテーブルに置かれた手紙やバスケット、いまだに夜に温室に訪れている事。

もう構うなとも思い、その言葉を否定する感情も湧く。

この感情は、抱いてはいけないモノだ。

脳裏に浮かぶのは、あの”光景”。

このまま行けば、いずれ悪い方へと事が進みそうで、そうなる前に止めるとも思う。

気付かなければ良い、と思う。そして自分も気付かなければ良い。

「つくしゅー！」

聞こえて来た音に思考が中断される。

(今は…)

足を止めて回りを見ると、回廊の横にある木々が月光を浴びて、影を回廊まで伸ばしていた。

辺りは静かなまま、自分以外に人影は見えない。

しかし”勘”は此処だと告げてきている。

足音を響めて”木々”に近づく。木の裏側に回って人影が無い事を確認する。

しかし足元には片方だけ脱げたサンダルが落ちている。

視線をそのまま上に持つて行くと、上の方に人影を見つけた。

(落ちて怪我をしたのに、自分から木に登るのか)

勇気があるのか、単純なのか、”彼女”の考える事がわからなくなる。

しかしそう思案している訳にも行かず、枝に手をかけると自身の体を上に持ち上げた。

かなり上の方に居た為、上るのに少し時間が掛かった。

そして彼女の顔を見て呆れてしまう。

(寝るか：普通)

落ちたら怪我か、下手したら死ぬ。よくもこの様な所で無防備に寝れる物だ。

幹と枝との丁度いい所に身を横たえて、バランス良く寝ていた。

ただ足が片方枝から投げ出されており、服の裾が捲れてしまってい

る。

その顔には”憂い”も”苦しみ”何も無く、ずっとそのままで生れば良いと思う。

何も知らず、何ににも侵されるされるなく、ただそのままであれば良いと思う。

けれど反対に、思いきり傷付けと言う感情も湧く。

自分は一体何をしたいのだろうか。

今までは何も考えず生きて来た、これからもそうだった。

それなのに、あの”光景”を見てから、ざらついた感情が生まれた。これは本来無い筈のものだった、それなのに、”彼女”はそれをもたらしした。

「……」

森で倒れていた時の既視感を感じた。

あの時は悲痛に歪んだ顔も、今その影は無い。

顔に掛かった髪をどけてやる。瞳は閉じられ、黒耀の輝きがこちらを見返す事は無い。

体は小さくとも、彼女は”少女”ではなく”女性”である事がわかる。

髪を結んでいた紐を解くと、髪は重力に従いさらさらと下に流れた。指先で髪を梳くと、絹の様な手触りは触り心地が良く、指に馴染み手放すのが惜しい。

「……」

頬を滑って首に手をかけた所で、”彼女”の瞼が震えた。

まだその瞳を見たくはない。

* * * * *

「…んん？」

何だか目の前がおかしい。

目を開けたのに真っ暗だ。

パチパチと瞬きをして、目を覆っている物に気付いた。

（ん？布？）

目元を覆われている物を外そうとして、手が上手く動かない事に気付く。

（あれ？動か…あれ？縛られている）

「嘘っ！」

起き上がるうとして、冷たい風が吹いた事で、木の上に乗った事を思い出した。

下手に動いたら、落ちる。持ち上がった頭を静かに幹に寄りかからせた。

（寝ている内に一体何が…！）

「。。。」

頭の上から”声”が聞こえてきて、ビクリとする。

（人が居る！）

その事に安堵するが、しかしどうして”その人”は今の状態のわたしを見て、何もしないのだろう。

普通こういった場合は目隠しとかとってくれるんじゃないのか。

その”声”は何処かで聞いた気がするが、やはり酷く歪んで聞こえ、”音”としての認識が強い。

でも最近聞いた事がある様な気がする。

「。。。」

あれ誰だっけ？と思った時、頬に手を添えられる感触と、顎を引かれて顔を上に向かされる。

んん？なんだっけこの既視感。

そして感じた口の中への”異物感”と”味”に（思い出した、

これはアレだ！）つまり、声の主は魔導師ルキさんと言う事にも気付いた。

（目隠しも腕の拘束も逃がさない為か！しまった、敵は用意周到でした軍曹！）

暢気に寝こけている間に、まんまと敵の術中にハマってしまったのである。

しかしそこで気付いた、異物感の感触が何だか柔らかい事に。そして何だか動いている。

（これってまさか！これってまさか！！！）

「…っ…ん」

唇を塞ぐモノが離れた時、自分の口から空気を吸う音が聞こえた。

しかしまたすぐに口が塞がれ、舌を絡められた。閉じれない口の端から唾液が流れ落ちる。

意識した事で”舌”の動きに頭が真っ白になり、血の味とかも何も解らなくなつて、ただただ翻弄されてしまった。

漸く唇が開放された時には、息が上がってしまった。

離れる時に下唇を軽く噛まれた時は、お腹のしたの方が変に疼いて戸惑う。

「呼吸を止めるな」

聞こえて来た”声”に、覆われた布越しから睨み付けた。唇が震えて、上手く閉じれているか解らないが、精一杯唇をかみ締めて。

「…誰の所為だと」

「おれだ」

（おのれ淡々と…）

次の瞬間目を覆っていた布が外され、視界が明るくなる。急に光を感じて一瞬目の前がチカチカしたが、次第にクリアになってきた。

「…って…近いっ！」

木の幹と枝の上に体を横たえているわたしの顔の横に手を置いて、覆い被さる様にルキさんがすぐ目の前に居た。

後ろから射す月明かりが、ルキさんの白銀髪を透けさせて、キラリと光っている。

月明かりの下で見ると、ますます月そのものの様な人だと思う。そんな人が目の前に。

「…いつ今…！」

「話せる様になった」

「そっそっですが…」

やり方に問題があるのだ。前は指を突っ込んだだけだろう。何故今回は舌を突っ込む必要があったのか。

けれど言いたい言葉は一つとして、口から発せられない。

唇がフニャフニャして、上手く口が回らない。

こちらがこんななんってるのに、ルキさんはいつもと全く変わらない表情で。

布を外される前にされた事は、本当に目の前の人がした事なのだろうか、と戸惑ってしまふ。

「あの…これ外してくれませんか？」

”アレ”は終わったのだ。もう抵抗する必要も無いし、……結局逃げるだけ無駄だった訳だが。

「いや、まだだ」

「え？」

あれ？心なしカルキさんの顔がまた近づいてきた気がする。既に真っ赤になっているであろう顔が、これ以上なく赤くなっている気がする。

「今後もこれ続けるのは不毛だ」

「…確かにもう二度と嫌ですね」

「なら我慢しろ」

「ふえ？」

ルキさんがわたしの服の胸元を掴むと、勢いそのままに服を下に下ろした。

下着が露わになって、臍の下辺りまでが外気に晒される。

「……………」

あまりの驚きに悲鳴をあげる暇も無かった。

ルキさんの指はお腹の上から臍を通り、その下で止まった。

「此処に”紋”を刻む」

「……刻む!？」

”紋”とはあの紋の事か!？

「臍と子宮は母体との繋がりが、馴染ませるには一番良い」

そう言った直後、ルキさんを取り巻く空気が変わった。

ピンツと空気が張り詰めた様で、周りから聞こえていた風のざわめきや草のそよ音の一切が消えた。

「其の深名なみを探る、応えよ」

頭の中にルキさんの名前が響いて聞こえて来た。

「わたしの……深名なみ……ミオ・スズキ……？」

ルキさんもわたしも口が動いていない。これは何処での会話？

「違う」

素早くルキさんの声が否定する。

「わたしの……名は……」

「魔導師ルキウス・ベルが代理で加護を与える。其の名は鈴すず」

木 澪。

「……」

現実のルキさんの声がわたしの”名前”を呼ぶ。

鈴木 澪　　しっかりとした”音と意味”でわたしが認識した瞬間、臍の下が熱くなった。

「うあっ！」

焼き鏝を押し付けられた様な熱さを感じ、お腹を抱き込み必死に耐える。

(いっつたい！)

ジクジクとした痛みで気絶出来た方がマシと思えた。額から脂汗が滲み、きつく握った手が真っ白になった。

漸く収まってきた時、痛みの元を見て驚いた。

臍の下辺りに、白い雪中花の”紋”が浮かび上がっていた。

やがて熱が冷める様に、”紋”は肌から消えた。

「…消えた」

「実際に肌に刻む訳ではない」

「そうですか…」

「”紋”が有れば、媒体が無くても問題ない」

「さつき一瞬浮かんだのがわたしの……うぎゃっ!!」

際どい所をずっと晒して居た事に、置いてけぼりだった羞恥心が甦った。

腕を拘束されたままのため、下げられた服を上げる事が出来ず。腕で胸元とかを隠した。

それにしただって、これは色々と拙い気がする。

事前に教えてくれれば、抵抗はしなかったのに…多分。

漸くルキさんは、わたしの腕を拘束していた布を外してくれる。わたしは急いで衣服を整えた。

(これは怒っても良い事だ。顔面に一発食らわしても訴えられない。寧ろ正当防衛だ)

それなのに、わたしの口も手も動いてくれず、役立たずだ。

「ばかやるう」も「ありがとう」「もこの場には似つかわしくない。

そんな事よりも、わたしはルキさんがどうして、こうした行動を取ったのかと言う事の方が気になってしまった。

無言の気まずさが嫌で、木を降りようとしたが、足が震えて上手く立てない。

恥ずかしさや悔しさで自分が情けなくなる。

衣擦れの音がしたと思ったら、また目の前が見えなくなる。

気付いたルキさんがわたしを”外套”で包むと有無を言わず抱き上げる。

やはり「嫌だ」とも「すみません」とも言葉が出てこない。

そのままわたしを抱えたまま木を飛び降りる、一人抱えて居るのに、地面に付く時には一瞬体が浮いて緩やかに着地した。

ルキさんの肩に頭を乗せて、体に伝わる振動に身を任せていた。

「……………」

わたしが与えられている部屋の前にやってきて、ドアの前で漸く下ろされる。

それまで顔を見る事が出来ず、ずっと顔を下ろしていた。どんな顔をして顔を合わせれば良いのかが解らない。

わたしが無言のため、ルキさんはそのまま場を離れようとしたが、咄嗟に手が出て彼の服の裾を掴んでしまった。すぐに手を離れたが、彼が立ち去る気配は無い。

「……………」

「……………」

見下ろされている気配を感じる。

どうしよう。とつくに自分のキャパシティを超えてしまっている。そしたら顎に手を添えられて、顔を上げられた。

灰色の視線と瞳が交差する。

ゆっくりと下りてくる顔に、わたしは目を閉じる事で”応じた”。

そっと触れてすぐ離れていく感触。

『もう…おれに関わるな』

そんな言葉を聞いた気がした。

目を開ける前に頬を風が撫でる様な感覚がして、目を開けると”彼の姿は目の前から消えていた。”

部屋に入り静かにドアを閉める。

そのままドアに背中を預けたまま、座りこむ。

立った今起きた事が信じられない。わたしは彼に応じてしまっていた？

顔がまた赤くなる。

心臓がうるさくて、訳も分からず叫びだしたくなる衝動に耐える。

最後のあの言葉はなんだったのだろう。

それを問いただしたくもあり、聞くのが怖くもあった。

ただ今夜は”温室”には行けない、と思った。

こんな混乱した状態では寝れないので、お風呂に入って落ち着こうと思った。

脱衣所で外套と服を脱いで、ふと違和感を感じた。

目に映るモノが何処かオカシイ？それが何なのか、考えて瞳の上にいつも掛かっている”黒い影”が今は”白い影”になっている事に気付く。

はっと思い肩に掛かった髪を持ち上げてみる。
顔を触ってみて、何でも無い自分の輪郭だとわかる。
急いで風呂場に入って、壁掛けされている鏡に自分の姿を映す。

「 ……な…これ」

鏡の中には白銀髪に灰色の瞳をした、「わたし」が、わたしと同じ
驚きに満ちた顔で見返してきた。

そのまま鏡を見続けて数分、色が抜け落ちる様に段々毛先から髪
の色が”黒”に戻っていった。
暫くすると、見慣れた黒目いつもの黒目に黒髪が見返してくる。

先日の陛下とミシユのおかしな態度を思い出し、漸く合点が
いった。
つまりわたしは先日もこの状態になっていたのだろう、そして恐ら
くそれよりも以前にも。

そして、「知っていた」であろうルキさんの態度を思い出す、一体
どうして。

答えの無い問いかけに、一晩中頭を悩ました。

… ああ、

「夢か、何つー夢見てるんだわたし」

自分の叫び声で飛び起きた。

目の前には勿論、ルキさんなんて居ない。

体を起こし、ドアノブを押して”クローゼット”から這い出る。

昨夜は”色々”有った所為で、殆ど寝付けなかった。

ベットの中でまどろもうとすると、カツと羞恥で飛び起きてしまうので、自分の血の上った頭を冷やす為に、毛布をクローゼットの中に引っ張り込んでその固い床の上で寝た。

自分の湧いた頭には程よい、狭さと暗さと固さに、やさぐれた気持ちで床に転がった。

多少腰が痛い、今の腑抜けた自分にはピッタリだ。

明け方漸くうとうととしてきたが、あんな”夢”を見てる時点で、あまり効果は得られなかった。

陽光がカーテンの隙間から部屋の中に入ってきている。

カーテンを開けて、太陽の光を浴びながら、伸びをした。

いつまでも、のんびりしている訳には行かない。

昨日の”アレ”はアレでソレでコレとして置いて置いて……

……

……

(うああ ……!!!無理!!!)

頭を抱えてベットにダイブし転げまわった。

(しっ死にそう…!!こっこんな…、平気で居られる訳がない…!!)
顔を枕に埋めて、ベットを叩きまくった。

「あの　　ミオ様？」

「ひよー！」

枕から顔を上げると、ドアを開けて硬直している、リリアーレさん。

（何故そこに！）

寧ろおかしい行動を取っている所をバツチリ見られた。

二人の間に微妙な空気が流れた。

最初に硬直が解けたのは、リリアーレさん。

「申し訳け有りません、声を掛けたのですが、お返事が無かったものですから…」

「い、え…すみません、こちらこそ気付きませんで…」

「…！！ミオ様、言葉が元に戻られたのですね」

（あ、そうか、リリアーレさんとは街で別れてそれきりだった…！）

わたしがぎこちなく返事をする、リリアーレさんが感極まった様な表情で部屋に入って来た。

そしてギュッと抱き締められる。

「私が付いていながら、ミオ様を見失った時は生きた心地がしませんでした。その上戻ってこられた貴女とは会話が出来なくなってしまう始末…：…本当に良う御座いました」

リリアーレさんの心底安心したと言う気持ちだが、こちらにも伝わってきた。

昨日の蒼褪めた顔が思い起こされ、本当に申し訳ないと思う。

この様子じゃ昨日はろくに寝てないのではないだろうか。

「…すみません、ご迷惑とご心配をお掛けしました」
「いいえ…ミオ様が、…ご無事で本当に良かったですわ」
「…わたしもこうしてまたお話出来て嬉しいです」

実際リリアーレさんと会話して、やさぐれていた気持ちも弛緩する。本当は言葉が戻った時点ですぐに、自分の無事を伝えたかったが、昨日はそれ所では無かった。

（ ああ癒される。リリアーレさんセラピーは物凄い効果だ）
ずっとこうしていたいと言う雰囲気させる。
しかし、そうも言っていられない。

結局あの後の事など、全く解決していないし、わたしも疑問に思う事が山ほど出てきた。
それをちゃんと解決させなくてはいけない。

「あの…リリアーレさんは、街から戻った後陛下に会いましたか？」
「ええ、そしてミオ様が居なくなられたと言う事も、魔導師ベルが見つけたとも伺いました」

彼女の口から出てきた”名前”にギクリとした。
見つけた？それはつまり、何処まで話を

？

「あの…あの後ってどうなっていたのですか？その…全然その辺りを知らないの…」

「ミオ様が居なくなられた後、私共でも王城を探しました。しかし見付からず、深夜近くになって魔導師ベルより、貴女を見つけたと言う連絡を陛下が受けて、私共はそのまま帰されました。それ以上の事は私も何も存じません」

「そ、そうですね…（良かった余計な事はバシてない）」
「突然部屋を飛び出されたと同いました、一体どうなされたので

す？」

「うっ…あの…その…」

「陛下もその辺りをとても疑問に思われていた様です」

「…え？」

(…まさか、陛下は森での”アレ”の事を知らない？)

どういう事だ。昨日の様子では、言葉が解らなくなったわたしを、ルキさんに委ね様としていたから、てっきり陛下も知っているのかと思っていた。

それでも、昨日わたしが執務室で陛下に声を掛けた時、わたしの言葉がおかしくなっている事に驚いている様子だった。

もしや陛下はわたしが、最初からこの世界の言葉を話せると、思っていたのか？

「えーっと…それは」

「わたくし私が今部屋に伺ったのも、それが理由ですわ」

「すっすみません…」

「陛下も王妃も、それは心配しております。どうぞお顔を見せに行つて下さいませ」

確かに。もし陛下達が何も知らなかったのだとしたら、突然のわたしの逃亡に驚くに決まっている。

ルキさんが上手い事説明していると思っていたが、そうだ、彼は最初から説明不足の男だった事を思い出した。もっと早い段階で話をして置けばよかった。

だが今更どうこう言っても遅い。

とんでもない勘違いがあったのだとしたら、早々に誤解を解かなければ。

「すみません、すぐ伺います!」
「はい、では準備を手伝いますね」

寝癖で飛び跳ねた髪を整えて、急いで顔を洗った。
新しい服に着替えて、鏡の前でおかしい所が無いか確認をする。
よし、大丈夫だ。

「お待たせ致しました!」

「では参りましょうか……あら?」

「はい?」

「……………?」

「……………リリアーレさん?」

さて陛下達の所へ、と言う所でリリアーレさんはわたしをジッと見て首を傾げる。

彼女にしては少し珍しい態度だ。

「…いいえ、陛下の元へ参りましょう」

「…はい……………」

何だろう今の間は。

凄く気になるぞ、特に昨日の陛下とミシユの様子を見た後だと、尚更だ。

まさかまた髪が白銀キンギラに染まっていたとかだろうか。

鏡を振り返ってみたが、そんな事は無かった。

頭を傾げるリリアーレさんに続き、わたしも頭を傾げる事になった。

* * * * *
* * * * *

「「ミオ！」」

執務室に入った途端、国王夫妻のハモリ声に出迎えられた。朝っぱらなら豪華な面子が揃っており、寝不足も吹き飛びそうだ。

「お待たせしてすみませんでした」

「言葉が戻ったのだね」「無事な様だな！」

「はい、おかげ様で……」

奥のソファアの所に連れて行かれて、座って話しをする事になった。目の前には国王夫妻、横にはリリアーレさんと、聞く体制話す体制、舞台はバツチリ整えられた。

あれれ、しかし”心配していた”と聞いていた目の前のお二人は”心配”よりも”興味”と言うのが正しい表情で さあ洗いざらい吐いて貰おうか とこちらを見てきている。

無意識に腰が引けてしまったのは、仕方が無い事だから許して欲しい。

「あの、すみません。何だか昨日は誤解があつた様で……」

「突然驚いたよ、まさかいきなり部屋を飛び出して行くとは思わなかった。その様子じゃあ、事は解決した様だけどね」

「はい……その色々ありまして」「色々？」

どう見ても、逃げられ無さそうだ。

このままだと吐かされる。

「あ、そうだ。昨日わたしがロヴェさんと執務室に来た後、どんな

話しをしてたのですか？」

「ロヴェルト…ああ、ロヴェルト。そうか、ミオはその時の事解らなかつたのだね…いいよ折角だから教えてあげよう」

陛下の顔が急に真剣になる。

(え まさか昨日凄く深刻な話しがされていたの?)

思わず居住まいを整えて、陛下の言葉に耳を傾ける。

陛下は昨日のやり取りを話してくれた。

「あの時はね

」

執務中に、ドアの前が騒がしくなった。

そして思いがけない人物の、入室許可の声が上がる。

「ロヴェルト・ヴァン・セイグラント、入る」

「…ロヴェルト？入りなさい。」

何故彼が、この時間帯に執務室に訪れたのだろう。

「失礼する」

入室してきた魔導師^{ロヴェルト}は、心なしか焦った様子で足早に入って来た。珍しい、稀^{ルキ}な事以外では、表情を崩す事も無い彼がどうして。

「陛下、貴方が預かっている客人に異変が！」

「客人？」

するとすぐ後ろから、ミオが部屋に入って来た。

何故ロヴェルト魔導師と一緒に現れたのか。

彼女は乳母リリアーレと一緒に街に下りている筈。

それが何故？

「一緒に行ったりリアーレは…ミオどうしたんだい？」

そしてすぐに異変に気付いた。

こちらが話しかけたのに、ミオが全く反応を返してこない。

目はこちらを向いているのに、急に”難聴者”にでもなったかの様に、こちらの音が聞えなくなった様な反応を見せる。

ミオに近づいて、顔を見るが、体調がおかしくなった訳では無いようだ。

「わたしの声が聞えるかい？聞えるならミオ、返事をするんだ」

「。。」

ミオはこちらの声に”反応”を返したが、首を振って理解出来ていないと云う。

しかもミオ自身の言葉も、こちらは何を言っているか解らない。

一体街に下りてから、何があつたのか。

この状態のミオを連れて来た、ロヴェルト魔導師に視線を向ける。

「ロヴェルト。君は何故彼女と一緒に？」

「はい、街に下りた所に偶然遭遇しました。彼女とは先日面識があつたので話しかけると、迷つてると言うので、連れの所に連れて行く事になりました」

「つまり、君と会った時は”こう”では無かつたと？」

「はい、彼女とは少し会話をしていたのですが、途中いきなり”こ

う” なりました」

「…何か変わった事は？」

「いいえ。鍛冶屋の連れにも会わせましたが、解決する事が難しく、ここに連れてまいりました」

「そうか、リリアーレが…しかし」

何故急に？

数時間前、ここに訪れた時には変わった所など無かった。

そもそもミオがこの様な状態になるのも、初めて見たくらいだ。

恐らく 今彼女が話している”言葉”こそが、彼女の国の言葉異世界語なのだろう。

しかし何故いきなり言葉が理解出来なくなったのか。そうしていると、新たな声加わった。

「ルキウス・ベル、入る」

声が聞こえると共に、既にルキはドアから入室していた。

恐らく先日のミオについての追加報告だろう。

しかし、室内の様子を見ると足を止めた。

「出直す」

ルキならば何か知っているだろうか。

問い詰めようとしたが、早々と引き返そうとするので、後ろから羽交い絞めにして動きを封じる。

「待ちなさいルキ！ミオの言葉がおかしいのだが、何か知っているかい」

「陛下？ 待てルキウス・ベル！何を逃げようとしている」

「……」

こらこらルキ、王に無言で攻撃するのではないよ。裏拳や肘鉄

何か思う所があるのか、やたらとこの場を離れたがっている。

(何をそんなに ミオ?)

先ほど室内を見回した後、ミオを見てから引き返そうとした様に感じた。

「何か知っているねルキ、教えてくれないか？」

「……聖域で初めてあった時”こつ”だった」

「聖域！？どういう事だ、ルキウス・ベル！」

「……うるさい」

「抑えろ！……どういう事だいルキ。最初からミオは話せていた訳ではないのかい？」

ルキの発言にロヴェルトが噛み付きそうになったので、鋭く止める。発言したルキの方に向き合つと、戸惑いの表情をしている。

今の会話でロヴェルトは、ミオがただの”客”では無い事に気付くだろう。

ただし今はゆっくり説明している暇は無い。

ロヴェルトには、一旦引かせ、十分に距離を離してから、会話を再開させた。

「森では”こつ”とは、何があつたんだい？」

「おれが意思疎通が出来る様にした」

「ルキが？一体何を？」

「おれの一部を媒体に使つた」

媒体 自分。体の一部を与える事でミオとの間に仲立ちを作つたのか。

それによってミオとの間に意思疎通が成り立つ様になった。

だが、何をこんな風に戸惑いの表情を見せるのか。

そこでピンと来た

まさか、媒体を使うついでにミオと”何か”あったのでは？

二人して帰って来た時の態度や、その後の行動などを見てみると、ルキは明らかにミオを意識した態度を取っている。

ミオにしても、ルキの事を憎からず思っている様だ。

(……もしや照れ隠しか？)

日頃から自分の世界に閉じ籠もりがちの弟弟子が、珍しい反応を見せている相手。

それが変わってくればといつも思っていた。

そう思つてミオを手振りで呼んだが、事態はおかしな方向に進む。

肝心のミオは、ルキを見た途端に蒼褪めているし、ルキはルキで害虫を潰した様な顔をしている。

特にルキの態度は顕著だった。

その二人の様子に、自分と二人との間で何か相違がある事に気付いた。

そして自分の考え違いにも。

何故避ける様な態度を取るのか、先日の”報告内容”と、実

際目で見た”光景”に思い至る。

(そうか……やはり気にしているのか)

ルキにとつては絶望とも羨望とも言えるだろう、”その事”にこの先に起こりうる可能性に胸が締め付けられた。

「 わたしとロヴェルトでは、言語を戻す事が出来ず困

つていたんだけど、ルキが治せると言うからミオを任せただよ
「…まあそんな風でしたが…本当はもつと別のやり取りがあったの
では？」

「何も無いよ」

「それ勿体ぶつて言う必要ありました？」

「無いね！…だからわたしはミオの話に興味があるね！一体どう
やって戻ったんだい？」

ギクリ。

自分で墓穴を掘ってしまった。

ここまで来たら、腹を決めるか。気が重いが、誤解されたままなの
も嫌だ。

「つまりですね、わたしが逃げたのは…」

「…逃げたのは？」

「つまり…」

「…つまり？」

「…血を飲まされるのが嫌だったんです」

「…血？」

三人の声が見事な三重奏を奏でる。

「つまり、わたしがこの世界に落ちて来た時も、同じ様に言葉が理
解出来なかったのです。その時ルキさんは自分の指を切つて血をわ
たしに飲ませたんです。そうしたら…言葉が理解出来る様になりま
した。ルキさんは”血を媒体にした”とか言っていました、血は血
なので…結局捕まりましたけど」

最後の方は自分でも段々声が小さくなって、きちんと聞えたかどうか解らない。
勢いで逃げてしまったが、凄く子供っぽい駄々をこねていると思われたら心外だ。

「……………」

「野蛮だな」

「お気持ち察しますわ」

「ルキはおばかさんだねえ」

わたしの言った真実に、三者三様の返事が返ってきた。
よかった　　もし”アレ”が異世界の常識とかだったら、付いていける気がしない。

「ルキは自分の血を媒体に…ね、話せなくなった理由は血の効果が悪くなったのだろう」

「効果が切れた？」

「考えてもごらん、飲んだ血、ずっとミオの中に留まっている訳では無いだろう？」

「……………あつ！」

陛下が言わんとしている事に気付いて、赤くなる。

そうか、輸血や血の入れ替えをした訳ではない、薬と一緒に暫くしたら効果が消える。

そう言う陛下はしかし、何処か釈然としない様な顔をしている。
自分で振った話なのに、何故その様な顔をするのか？

「しかし血を媒体にして、今回も戻ったのなら、今後も同じ事が起きるのではないか？」

ミシユが尤もな事を言ってきた。

確かに昨日も”血”を飲まされてから、言葉が戻った。けれど今回は

無意識に下腹を手で押さえつけた。

「あの…その事は…もう大丈夫だと思います」

「それはミオの雰囲気が変わった事が関係しているかい？」

「え!？」

(なにそれ!まさ陛下…視えている?)

それともそんなにわたしは分かり易い雰囲気を出しまくっているのか?

「あら、陛下もそう御思いでしたか？」

「そうだな、何か変わったな？」

リリアーレさんやミシユまで同じ様な事を言い出した。

三対の目に同時に見られて、わたしは及び腰になる。

核心に触れそうに触れない所を、じわじわと攻められている気分だ。

「お部屋でも思ったのですが…何と言いますか、ミオ様を”身近”に感じられますわ」

「確かに。…こう言っただけは何だが…今日は同じ”人”だと感じられる」

「…え!?!…ミシユ?」

「すまんな、気分を害したのなら悪かった。ただ…その様な感じがあるのだ」

思ってもいなかった反応に、戸惑いが隠せない。

雰囲気が違うと言うのは、わたしの根本からの話しだったのか？
わたしってそんな得体の知れない気配を醸し出していた？
もしかして”落し物”だから、見た目は人間でも、気配は人外だと
か？

「二人が感じている事は、確かに間違いないよ」

「わたし…そんな変な気配でしたか？」

自分だけが気付いていなかったのなら、とても気まずい。

「変な…というか、ミオの世界にも国の異なる人間はいるかい？」

「…？はい、居ますけど」

「それはすぐにわかる位に？」

「…そうですね、外見的特徴もそうですが、国独自の雰囲気とい
いますか…」

「そうそう、わたし達にとって、昨日までのミオは”違う国の人間
”と言う雰囲気が強かったのだよ。ただ今は”同じ国の人間”と言
う雰囲気を感じられる。身近に感じると言うのはそういう事さ」

「あ…そうなのですが、安心しました」

確かに地球でも人種が違っていると、雰囲気が全く違う。

白人種・黒人種・黄色人種と外見的特徴でもかなり違う。

同じ黄色人種でも、見た目が殆ど同じの韓国や中国の人間でさえ、
近づくとも雰囲気が違う事に気付く。

恐らく国独自の文化や生き方で、その人から感じる雰囲気が違っ
たらだ。

「わたしは魔導師だから、二人よりもより明確に君の変化を感じ
れる」

「変化…ですか？」

「今の君は”この国”の気配を纏っているのだよ。それもかなり濃い気配だ」

「あの…それは」

正直に言わないといけないだろうか。あまり昨日の事は話題にしたくない。

けれど”紋”については以前陛下に頼んでしまっている。ここで話しておかないと、陛下にも悪い事をしてしまう。

「実は…昨夜ルキさんは、わたしに”紋”を刻んだんです…それが原因でしょうか？」

「ほう！」

「まあ、そうでしたの」

ミシユとリリアーレさんが、納得と言う表情をした。しかし

ガタンツ　　！！

陛下が思わずと言った表情でソファから立ち上がった。

そしてハツと気付いてまた、腰を下ろす。

わたしもミシユもリリアーレさんも、突然の陛下の行動に目を見開いている。

「ああ、すまないね。あまりの事に驚いてね…続けて？」

「…はい。ルキさんも何度も血を飲ませるのは不毛だと言って、それで私の”深名”ですか？その…名前を呼んで、そしたら……”紋”が浮かび上がったんです」

「確かに…手順は合っている」

「手順？」

「前にミオにこの国で”紋”を持つていない者の話しはしたね？」
「はい、孤児や…事情がある人間は、後から与えられると」

あの日、執務室で陛下に依頼した時の事を思い出す。
そしてわたしに”紋”を与えるのに、時間が掛かっているとも。

「”紋”が無い者には魔導師が代理で与えているのだよ。魔導師は対象者の本質を”視る”事が出来る。そして”深名”を知る。それは”血統”を読むとも言うね。

そしてその者が本来持っている”紋”を呼び起こす。
セイファート生命樹と根本を同じとした力を身に宿しているから出来る事だね。」

「そうなのですか…」

「けれどミオの事を頼める魔導師が、なかなか…居なくてね。どうしようかと思っていたが…杞憂に済んだようだ」

「あの…」

陛下は納得した様な事を言っているが、何故かそう言っている時の”目”が気になった。

釈然としない様な、信じられないと言う様な

「それで？ミオの”紋”はどんな形なのだ？」

わたしの思考を中断させる様に、ミシユの声が聞こえた。

「私も^{わたし}拝見してみたいですわ」

リリアーレさんも後に続く。

その視線を受け止めるのは、わたし。

しかしそんな事を言われても、腹を出す訳にも行かないし、第一もう消えてしまっている。

”^{白い水仙}雪中花”と言って、伝わるかどうか分からない。
自然と助けを求める様に陛下に視線を向けるしかない。
女三人からの視線を一同に受けた陛下は、少し困った様な笑いを見せた。

「…仕方ないね」

そういつて陛下はわたしに手をかざして、指で文字を描く様な動きをする。

すると空中にキラキラ光る砂の様な物が現れた。

砂は下に流れているのに、床には零れず、空中で消えている。

それが空中に浮いたホログラムの様に、わたしの”紋”を描いた。

「美しいな…」春告げ花”か」

「春告げ花”…？」

「ええ、この国は基本温暖ですが四季が無い訳ではありません。一部の地域では雪が降る所も御座います。その土地にだけ咲く花で、雪の中でも咲いて季節が変わる事を教えてくれるのです」

わたしの疑問にリリアーレさんが答えてくれる。

日本に咲く水仙と似た様な生態の様だ。

しかしわたしの”紋”が水仙とは…確かに冬生まれだけれど。

わたしのイメージって水仙って感じなのだろうか？

陛下の”生命樹紋”やリリアーレさんの”一枝三葉紋”は凄くイメージピタリな感じだけれど、自分だと何だかしっくり来ない。自分だと客観的に見れないからだろうか。

いつの間にかわたしの”紋”は消えてしまっていた。

「ミオ様の穏やかな雰囲気には良く合っていると思いますわ」
「そうよな。ミオは言葉で表すと”ほあほあ”してるからな」

「え…ほあほあ?…そうですか?」

女性二人には好評な様だ。…ほあほあ?

その後も”紋”の事でだいぶ盛り上がった。

昨夜のルキさんとのは、誤魔化して話したが、どうやら三人とも不審には思われていない様だ。

あらかた話し終えると、ちゃんと納得してくれた様だ。

良かった、あんな事バレたら軽く死ぬる。

ここに来た目的の一つが解消したので、わたしはやっと”自分の”疑問に取り掛かることにした。

「一つ疑問に思う事があるのですが、聞いても良いですか?」

「ん?なんだい?」

わたしの疑問に答えられる可能性のある、陛下に向けてわたしは言った。

恐らく陛下は少なからず”知っている”と思われる。

「先日わたしがルキさんに、この部屋に連れて来られた時の事です」

あの時の陛下は慌てる様子が見えなかった。

つまり事前に見ていたか、知っていたかのどちらかだ。

”先日”と”執務室”と言う事から、ミシュにも何かピンと来た様だ。

リアールレさんだけは、何だか分からないと言う顔をしている。

けれど彼女にもいずれ気付かれる事だ、この際一緒に聞いて貰おう。この先絶対に”ああならない”とは限らない。

「昨夜わたしがルキさんと会った後、部屋に帰って鏡を見たら、髪と瞳の色が変わっていました。そして、恐らく先日も”そう”だったのでは無いですか？」

ミシユはあの時と同じ表情で、また陛下を見た。

リリアーレさんは分からないけれど、事の深刻さに気付いた様だ。何の口出しもせず、陛下の反応を待っている。

「わたしに何が起きていますか？」

19：その落し者

「気付いたのかい？」

「はい、昨夜：ですけど」

当然の事ながら、わたしに”突然髪が染まる”と言う体質は無い。ならばこの世界に来てからという事になる。

恐らくわたしが分かっているだけで、先日ルキさんに簀巻きにされて執務室連れてこられた時、そして昨夜の2回だ。

その証拠にわたしが先日の事を聞いた時、陛下もミシユも否定しなかった。

やはりあの時の戸惑った二人の態度は、わたしの髪と瞳の色にあったのだろう。

そして二つの共通項というが、”ルキさん”。

両方ともわたしは事前にルキさんに会っている、それはルキさんにされた事が原因なのではないか。

しかし時間も場所も、”された事”も何一つ一致していない。一体何が”わたし”を変える原因となっているのか。

陛下はその事について、”知っている”とわたしは考えている。

「確かに先日ここに来た時既に、ミオは髪と瞳が変わっていた。恐らく：昨夜変わったと言うのも”白銀の髪に灰眼”になってたので無いかな？」

「はい…」

「カナン！私もその事は疑問に思っていたぞ。：それに何故あの色が出たのだ？」

それまで聞き役に回っていたミシユが初めて声をあげた。彼女にしてもわたしの色彩が変わった事は疑問の種だった様だ。しかし彼女の言い分だと、色が変わった事もそうだが、その”色”も重要らしい。

白銀の髪に灰色の瞳

この色を思い浮かべて出てくるのはルキさんだ。前に彼の持つ色はとても珍しいと言われていた、それが関係しているのか。

「一つ言っておきたいのは、ミオ自身がどうこう…と言う訳ではないよ」

その一言にとりあえず、ホツと息を吐いた。「人体に害は無い筈だよ…十中八九ね」と陛下は続けている。どうやらわたし自身の体が突然変異を起こしたわけではない様だ。それは、やはり外部的要素が関係しているという事で。

「…まだ調べてる最中でね、不用意に話して混乱させるのはどうかと思ったんだよ」

陛下が前かがみになり肘を膝に乗せて、組んだ手に顎を乗せる。確かに支配者階級の人間が、考えなしに発言して困るのは、力の無い下の人間だ。

けれどわたしは自分の事だから、隠さず教えて貰いたい。わたしの言いたい事が分かったのか、陛下が物言いたげな瞳でわたしを見返してきた。

そしてため息を付き立ち上がると無言で窓辺の方に歩いていく。わたし達はそれを目で追った。

「それでも聞きたいかい？」

振り返った陛下はいつもの”統治者”としての顔とは違っていた。その表情は見た事がある、目の前の人は魔導師別の顔としてわたしに問いかけてきた。

わたしはすぐに頷いて答えた。

「分かった。ミオ立って壁際に立ってくれるかい？　そう、こちらを向いてね」

言われるままに私は立ち上がり、陛下とは向かい合う様に壁側に立った。

指定された場所はミシユ達が居る場所とはかなり離され、陛下とも数メートルの距離が開いている。

突然の事に疑問を抱きながら、これから何が起きるのかを注視していた。

陛下は先程わたしの”紋”を浮き上がられた時の様に腕をわたしに向けた

「……………！止せ！！」

突然成り行きを見守っていたミシユが叫んだ。

視線を向けると驚愕の表情で立ち上がったミシユが、こちらの方に手を伸ばしている光景。

声を向けられたであろう陛下を見ようとした時、陛下の翳した手の前の空気が歪んでいるのが見えた。

塵気楼の様にゆらゆらと空気が歪む。

歪みと一緒に熱量が部屋の中に生まれ部屋全体を重たくする。

それを核として雷鳴の様な光が走り、部屋の中を紫色に染めた。

(…プラズマ?)

その歪みが渦を巻くように集まり、

弾けた

全てがスローモーションになったかの様に感じ、歪んだ空間がわたしに向かってくる。

歪みを通った床は瞬間蒸発し、押された空気が圧力となってわたしの髪を左右に弄ぶ。

リリアーレさんの悲鳴とミシユの罵声が聞えた気がする。

次の瞬間、何かがぶつかる様な衝撃音が聞え、部屋の中を光と煙が覆った。

「ゲホツゴホツ…煙い…！」

「ミオ!?!お前無事か!?!」

埃の中をミシユがわたしの方に駆け寄って来て、わたしの体をべたべた触った。

一頻り全身を確認されて「大丈夫だな」とミシユはホツとしていた。
(え…何?)

陛下がわたしに向かって手を翳した後 後、何が起こった?

周りを見ると酸化して蒸発した様な床に、後ろの壁は真っ黒に焼け焦げていた。

ミシユに初めて会った時ほどではないが、酷い有様だ。誰かが部屋の中でダイナマイトでも暴発させたか?

わたしが周りの光景に唾然としてみると、ミシユがわたしを後ろに庇う様にして、陛下に鋭い視線を浴びせていた。

「カナン！貴様どういつつもりだ！！ミオを殺すつもりか！？」

殺す！？一体全体どういう事だ。

ミシユは本気で陛下に怒りを向けている様で、殺気？だろうか、近くに居るわたしにもピリピリした空気が伝わってきた。

その気配は自分に向けられた物ではないとしても、十分怖くて、わたしはミシユの腕に無意識にしがみ付いてしまった。

騒音に部屋の外にいた騎士さん方が、扉を開けて入って来ていたが、陛下の「下がれ」と言う声に、すぐ扉を閉めて出て行ってしまった。

「…加減はしたよ」

「…っ貴様っ！！」

本気で怖い。

それを真正面から受けているだろう陛下は、及び腰にもならず平然とミシユを見返している。

何だか分からないが、国王夫妻の異様な雰囲気、わたしはどうすればいいのか分からなくなってしまう。

ちらりと見たリリアーレさんは、突然の事に涙目で口を手で覆って言葉も出ない様だ。

ミシユは今にも自分の夫に殴り掛かりそうな勢い。

「それにミオは怪我一つ負っていない」

「論点を変えるな！！」

話しの流れから、わたしは陛下に何やら殺されそうな何かをされかけた様だ。

陛下が手をかざした後の事が、あまりにも早すぎて、いまいち状況が理解出来ない。

それに殺され掛けたのを怒ろうにも、先にミシユが怒ってしまい、

すっかりタイミングを逃してしまった。
実際はこうして無事な訳だから、寸前で陛下が辞めたのか。

「…ミオ様！」

そこに夫婦の口論を打ち消すように、リリアーレさんの悲鳴の様な呼び声が上がった。

彼女を見ると、口を押さえた手はそのままに、わたしを見て狼狽している。

いきなり王が殺人未遂を起こした事が、やはりショックなのだろう。うんうん、よく分かるよ。と思って居たら、何だか様子がおかしい。

その視線は真っ直ぐにわたしの顔部分に注がれている。

(まさか　！)

先日も受けた反応に、ミシユと陛下の方を見てみると、ミシユは驚愕、陛下はなんとも言えない表情で見返してきた。

(もしかしてまた　！)

「…かつ鏡っ…！！！」

顔を確認しようと、おろおろと周りを見渡す。

いつの間にか陛下が近づいてきて「はい」と部屋の隅にあった姿見をわたしの前に置く。

置かれた鏡に自分を映して、さらに驚いた。

髪は煌く金髪、瞳は碧眼　　わたしの後ろに立つ陛下と、鏡の中で目が合った。

その色は正に後ろの陛下と全く同じで、こうして並んで見ると兄妹の様　　な訳がない！

どうみても似合わない！自分の顔にこの色彩がこんなにも合わないとは思わなかった。

鏡の中の自分は引き攣った顔をしている。

こんなのは陛下の様なキラキラした人こそが似合うのだと、心底思った。

「何だかおかしな事考えてるね」

「ひきよ」

心を読まれて口から変な音が出た。

やはり陛下は落ち着いた態度で、わたしがこんな姿になっても動じていない。

白になったり黄色になったり、最近のわたしは彩り豊かだな。

ミシユは先程の怒りを抑えて、今はまた大人しく成り行きを見守っている。

（ただ陛下を見る目が…まだマジだ）

「手荒な真似して悪かったね、効率を考えたらこれが手っ取り早いと思ってる」

「…あの…結局さっき何したのですか？」

「周りの空気に熱を加えて圧縮したものを、ミオに向けて放ったんだよ」

そういえば高校の物理の授業で聞いた事ある様な気がするぞ。

空気中の分子をイオンと電子に分けるとプラズマが発生します。

この現象を電離といいます。

ただしそうするには瞬間的に空気を高温度に上げて、それを保たなければならず、自然現象以外だと、機械を使わないとプラズマを発生させるのは難しいです。

有名なのは蛍光灯やガスの炎、テレビや空気清浄機が有名ですね。自然界だと太陽その物や雷、それにプラズマの電磁波で歪められた空気となって現れたオーロラなどがあるよ。

これ次のテストに出るから、しっかり覚えてね。

簡単かつぶつちやけて言うよ、なんか物凄い高エネルギー。

先程の肉眼で確認できる程の”高エネルギー”は、どうみても荷電粒子砲レベルで受けたら死ぬ。

とりあえず死ぬ。

寧ろ生身の人間がそんなの手から出来るわけが無い。

何て非常識！ファンタジーマジ怖い！かめは 波は本当にあったんだ！

「…へっ陛下！何してくれましたか！！？殺す気ですか！！！」

その時やっと、事の重大さに気付いたわたしは図太いのか鈍いのか。一歩間違えれば、骨も残さず蒸発していた。

しかもさっき”加減はした”と聞いた、これの一体何処が加減したのか。

わたしは某起動戦士ではないので、間違いなく死ぬぞ。

「まあ普通の人なら死ぬけど、ミオなら死なないよ」

「その根拠も無い自信何処から来るんですか！」

「うん、今まさに目の前で、生きてるミオが居るからね」

「へ…？」

（生きてるわたしって

？）

「…え？さっきのは陛下が寸前で止めて……」
「止めてないよ」

陛下の服を付かんで、問い詰めていたが、思わぬ一言にフリーズする。

（今なんと？）

答えを探す為に、恐る恐るミシユとリリアーレさんの方を見る。

（真正面からでした）（死んだと思った）

二人が口パクで訴えてきている。

物凄い勢いで肯定の頷きをしている。

あまりの事に言葉が出ない。わたし”アレ”を真正面から受けたのに死んでない？

「随分混乱している様だから、一つ一つ説明しようか」

「…え、は…い」

訳も分からず頷いていた。

「まだ確定ではない、その事を前提として聞いて欲しいのだけど、我々の今までの認識で異世界の物である”落とし物”には”魔導”が効かないとされていたんだ。それは覚えているかい？」

確か聖域セイファートの森には特殊な結界が張られてて、魔導師しか立ち入れられないと聞いている。だから魔導師でも無いわたしが居た事で、わたしは”落とし物”認定されたのだ。

「はい、”落し物”が魔導を使った結界を通り抜けるからですよね？」

「そう。しかしその事実は違う可能性が出てきたのだよ」

「違う可能性？」

「考えてもごらん、魔導が効かないなら、ミオに治療は出来ない」

「あっ！」

そういえばそうだ。わたしは何度かルキさんから”魔導”の治療を受けている。

破れた服や血の痕を残さず復元させたのも、”魔導”だと聞いている。

「ミオ”だから”なのか、それとも違う理由があるのか、それさえも調べる事は難しい。比べる対象が”君”しか居ないのだからね。けれどルキから聞いた事実や、今日の前で起こっている事から、わたしは一つの”可能性”を、恐らく真実に近い可能性を考えている」

陛下の目は真剣そのもので、冗談を言っている様には見えない。話しが核心に近づくにつれて、耳や脳が冴えていく様に感じる。それはまさしく”真実”に近い事なのだろう。

「君は魔導の力を”弾く”でも”消す”で無く”吸収”している。それが魔導を使った相手の”色”として、髪と瞳に現れているのだよ」

20：その魔導師 前

君は魔導の力を”弾く”でも”消す”で無く”吸収”している。

それが魔導を使った相手の”色”として、髪と瞳に

「現れているのだよ…か」

治療を受けた時も、紋を刻まれた時も、わたしに現れていたのはルキさんの色。

陛下から攻撃された時、わたしの髪と瞳を変えたのが陛下の色。

そう言われて、理屈では分かる様な状況ではある。

まるでカメレオンの様で、自分が面白人間になつた様な気分だ。

「ただ色として現れて、それでどうなる…と言われたら現状何も分からないね。どうやら時間が経過するとミオの中に吸収された”魔導の力”も消えてしまう様だから」

自分の髪を弄び、陛下が言つてた事を思い出す。

異世界に来て身についた、特殊能力かと思いきや、ただ吸い込んでお終いとほ。

どうせ身に付けられるなら、言語や識字能力が欲しかった。

そう言つても無駄ではあるけれど。

ため息を付いて、頭上から降り注ぐ月光を仰ぎ見る。

この世界の月は、プラトンとフォントネルと言つ二つ並んだ兄弟月レイシエスを指す。

隣り合い公転感覚も同じのため、空に浮かぶ様は二つの眼球の様だ。

柔らかい光を降り注ぎながら、じっと見ていると、月の光が降り注いでいるのか、自分が月の引力に引つ張られているのか錯覚を感じる。

月を見ているとなんとも言えない気分させられる。

月には魔力があるだとか、ルナティック月を狂気と表した昔の人の感性がよく分かる。

こんな夜には心が騒ぐ。

昨日の今日で危機感が足りないのかもしれないが、全ては”月”の所為にしてしまいたい。

傍らのテーブルには、先日彼の人にと置いておいたバスケットが”同じ場所”に置かれてある。

空っぽの中身に、上に被せてあつた布は綺麗に畳まれてあつた。

(…… 食べてくれたのなら嬉しい、中身だけ捨てる様な人では無い気がするし)

自分でも何故また”此処”に来てしまったのか分からない。

わからないのに、夜になったら、こうして足が此処に向かつていた。

この想いは恋ではない、愛でもない。では何がわたしを動かすのか。思えば初めて会った時から”灰色の瞳”には安心感を覚えた。

まるで最初から知っていたかのように、わたしはあの色に　　を感じるのだ。

「ミオ？」

反対側から聞える声に、意識を呼び戻された。

こちらからは暗がりなので人影でしかないが、声からドアの所に陛下が立っていると分かる。

「陛下？」

（なぜここに？）

思えばこの部屋で”彼以外”の人と会うのは初めてだ。

そもそもこの部屋で人と会うなんて、この世界で目覚めた最初の一回だけだが。それだけこの部屋には人の気配を感じない。

長年放置された別荘の様なのに、何故か木々などは定期的に手入れをされている様な感じがする。

陛下はゆっくりとわたしの方に歩いて来た。

こちらの方に近づくとつれて、暗がりで見えなかった陛下の姿が明確に浮かび上がる。

「…部屋に居ないからまさかと思ったけれど、此処には頻繁に来て
いるのかな？」

月明かりの下で見る陛下は、いつも以上に何を考えているのかわからない。

なんとさえいえばいいのか、別に部屋の主に断わって入っている訳でもない。

かといって、陛下に許可を貰うのもおかしい気がする。

「…別に責めているのではないよ、本人が拒否^{ルキ}をしていないのだからっ。」

「……拒否…してない、のでしょうか」

昨夜の”最後の言葉”が思い出される。

初めて向けられた彼自身の感情的な言葉

彼は今まで”良い”とも”悪い”とも、わたしに対して”何か”を

伝えて来た事は無い。

陛下やミシユヤリアーレさんの様な、親しい会話なんて全くしていない。顔だつて合わせたのは片手で足りるくらいだ。

彼はただ”其処に”存在している、そういつた人だ。

森から連れ帰つたと言つた後も、あくまでも”魔導師”として接しており、一体彼自身が何を考えて行動していたのかは分からない。

彼は何も言わない。

ただ其処に在る、たつたそれだけなのに、わたしに強烈な印象を残していく。

”あの日”から外套はずつと椅子いすに置かれ続けている。

いつも朝目覚めると、不自然ふぜんぜんなくらい綺麗に外套に包まって寝ている。

(何故寝ている時でしか、”彼”に会う事が出来ないのだろうか)

「ミオはこの部屋に入ってから、鏡を見た事あるかい？」

「…え、いいえ？」

「そうか通りで…この部屋には鍵が付いているけど、使われていない事が不思議ではない？」

陛下は何が言いたいのだろう。

鏡と言つたと思えば、ここの鍵？

「あの、それはルキさんが面倒だから、気にしていないのだと…」

「…此処には他人が立ち入れない様にルキ自身が張つた純密度結界がある、下手に触ると身を傷付ける程のね。だから此処に近づく者はまず居ない。わたしは解除方法を知っているから入つて来れた、ミオは…もう気付いたかな」

陛下が話している途中から、わたしの手は自分の髪に触れていた。

この部屋に来るのは、いつも夜だから、今まで全く気付かなかった。先日昼間に来た時に感じた不思議な感覚も、昼間に来た事が珍しかった事を原因だと思ったが、自分の髪の色が変わっていたから無意識に感じたのだろう。

つまり此処に夜来るたびに、わたしは自分でも気付かない内に”変わって”いたのだ。

「ルキはあれでかなり神経質だよ。他人の気配がする所では、決して身を横たえる事は無い。そして自分の領域に他人が近づく事を善しとしない」

「…わたしが、此処に居る事をルキさんは…」

「…どうかな？そうかもしれないし、違つかもしれない。最近のあの子はわたしにも予測不能だね。ただ…その外套があの子の本音だとは思っよ」

外套が急に重みを増した様に感じた。

また顔に熱が集中している気がする。

「…どうして、人を遠ざけるのですか？」

「遠ざける…そうかもしれない。遠ざけられたから、遠ざけたのか、今ではどちらが先なのかは分からないけれど」

陛下は遠くを見ている様に、まるで独り言の様に言った。

遠ざけると言うのは、いつか見た城の人たちの態度の事だろうか。

ルキさんは、構うなと言った、あの時。

陛下の性格だったら、止めさせる事も出来るだろう、あの人達の態度。

それなのに、陛下が何も言わないのは何故。

陛下の近くに居る人達でさえ、一步身を引いた様に接している。わたしが知る中で、ルキさんと対等な会話をしているのは、国王夫妻だけだ。

この国での魔導師の地位がどういった扱いなのかは分からないが、それは酷く不自然にわたしの目には映った。

「……………」

自分の体の事を昼間に聞かされてから、ルキさんと歩いている時などに感じた違和感が漸く分かった。

魔導師を吸って色が変わるのなら、初めて陛下に会いに行く時にフードを被らされたのも、回廊で怪我をした時に外套で包まれたのも、昨夜の事も共通して、ルキさんは外套で”わたし”を外から隠している様に感じた。

”わたし”に気付かせない為なのか、”別の人”に気付かせない為なのか。

それは一体”何”を隠したかったのか。

「……………」

ルキさんと関わる事に異常な反応を示した、ロウエさん魔導師。

陛下が、わたしに紋を刻んだルキさんの話しをした時に、見せた異常な反応。

わたしに現れた”色”に反応を示したミシユ。

感じた違和感は、全て一つの事に終結している気がする。

その時陛下が此処に来たのは、偶然ではなく、わたしに何かを話す

為だと気付いた。

陛下の弟弟子ではない、魔導師ルキウス・ベルとは一体何なのだろうか。

「…ルキの話しを聞きたいかい？」

わたしは迷わず頷いていた

土は新たな命を、その地に芽吹かせ、”一本の樹”が現れた。
白い幹に銀の輝きを放つ葉は、とてもこの世の物とは思えない様相。
しかしその一本の樹が暖かな光を齎し、凍った土地に恵みを与え、
人々の凍った心も溶かしてゆく。
人々は”生命の樹”の周りに身を寄せて生きた。

そんなある時、樹が”人”を産み落とす。

白銀の髪に銀の瞳 を持った彼の人は、樹の声を聞く事が出来た。
”最初の人”はそうしてこの地に現れた。

その人には不思議な力があつた。
その人が手を触れるだけで、死んだ土地が甦り、成長を止めていた
生物に成長を促した。

そうする事で、土地は少しずつ昔の様相を取り戻す。
しかし、それでも多くの人を助けるには至らない。

ある時その人は、”生命の樹”から枝木を折ると、別の地に植えた。
その人が手を翳すと枝は、瞬く間に成長し根を張り、ほんの一瞬で
若木に変わっていた。

樹が二本になつた事で、また土地は甦える。

しかし、それでも足りない。

”最初の人”は枝から樹を増やし、樹に力を注ぎ続ける。

それがいずれ林となり、森となつていった。

木は命を、水を、光を、風を生み、その地を癒していく。

しかし何故か森は、”最初の人”以外を拒み、触れる事も立ち入る
事もさせなかつた。

人々は”森”の傍に身を寄せる事で共存の道を歩んだ。

それから少しの時が流れ、最初の方は”子”を生んだ。

”最初の人”は女性だったのだ。

彼女はその地の男との間に、子を儲けた。

そして生まれた子を慈しみ育てる。

その子は白銀の髪に、混血ゆえに”灰色の瞳”をしていた。

しかし母親と同じ力を持ち、手は癒しと成長を司り、森に立ち入れる者だった。

”母”と”子”は、二人で力を加え森を増やしていく。

昔は険しい山々に覆われた土地は、いつしか奇跡の木で覆いつくされ、土地はどんどん豊かになり、そこは極寒の国ではなく、常春の国となった。

たった数年で土地を生まれ変らせた、木と最初の人に、人々は感謝した。

しかしある時、森の恩恵が止まった年があった。

そして示し合わせたかのように、雪が降った。

その頃老い始めた”母”は、森に入らなくなっていた。

人々はまた、氷に閉ざされる事を恐れ、力を注げと、老いた”母”を森へと促す。

それでもその年、国は雪に覆われてしまう。

母と子は毎日欠かさず、森に”行っている”のに、森の恩恵は止まっていたまま。

ある時一人の人が言った、>母子は自分達だけが森に入れる事を逆手に取り、自分達だけが楽をしようとして、力を注いでいない<と。その考えはすぐに国を駆け巡り、人々は母子は責め追った。

母の”夫”も、子の”父”も、二人から目を逸らし助けようとはしなかった。

ある時、母は子に隠れて一人で森に入っていく。

そして驚く事に、母が森に入ったその夜に、また森は恩恵を与え始める。

雪に覆われた土地が、一瞬で解けて温かみを取り戻す。

人々は戻った恩恵に心を躍らせた。ただ一人、子を除いて。戻らぬ母を不審に思い、子は森に入った。

そこには、変わり果てた母の姿。枝が全身に絡みつき、半身を覆い尽くし、根が血管を通って母を吸い上げている。

母はその身を木に食わせていた。

子の叫びが森を揺らした。

子は母を樹から剥ぎ取り、腕に抱くが、既に母ではなく骸となっていた。

冷たくなった体、内側から食われ小さくなってしまった母、もうその”銀の瞳”を開く事は無い。

その声の子を呼ぶ事は無い。腕から零れ落ちる、かつて”母”だったものは、大地に吸われ消えた。

もう”母”さえ無い。

再び子は叫び、母を吸った樹を殴りつける。

「こんなモノのために、母を失ったのか」
樹を憎み、恨み、人を呪った。

子の恨みは狂気となって、樹を滅した。

今までは”母子”が樹に力を注いでいたが、子が触ると樹は全てを”奪われ”灰となって崩れた。

樹より生まれた母には”命を注ぐ力”しか無かったが、血が混ざった子には”樹から奪う力”があった。

元凶となる樹を灰にし、森の大半をその身に引き込み滅ぼした。

森を灰燼にただけでは終わらず、樹の力を吸った力は、大地を割り空を裂いた。

まるでその地その物が、”子”の怒りを表すかの様に、全てを蹂躞

する。

人々は恐怖に慄き、国を逃げ出したが、その先々に”死神”が現れ人を屠った。

既に子は人ではなく死の神の化身となっていた。

子が手を払うと人々は弾け飛び、地を蹴ると土地が焦土と化した。嘗て癒しを与えた手は、命を吸い血を吸い、魂さえも奪う様に破壊した。

国の九割の人間をその手に掛けた時、最後に子は森で自害し果てた。その血肉を吸って、森はまた生き返る。

残ったのは僅かばかりの”樹”と人々だけ。

それから月日が流れた時、生き残った緑髪の娘が子を生む。

その子は”白銀の髪”を持って生れ落ちた。

それは”最初の人”と同じ色を身に宿し、この地に還った彼の人。また戻ってきたかの様だった。

やがて成長した”子”は、やはり”最初の人”と同じ育む力を持っていた。

子はまるで自分の役目であるかの様に、樹に力を注ぎ森を育んだ。

人々は娘の子を恐れつつも、奇跡の再来に驚喜する。

その後も同じ様な髪を持つ者が生まれ、その物たちは皆同じ力を持ち、皆が力を注ぐ事で樹は再び林となり森となった。

しかしその誰もが”母子”程の力は持っていなかった為、国が再生するのにかかりの月日が掛かる事になる。

長い時が流れ、国は昔の豊かさを取り戻す。

しかし幾ら力を注いでも、森はある一定以上の成長を止めた。

それでも人々はもう何も言わなかった。

力を持ったものは、その森の守護者となった。

最初の人”の様な力は殆ど無い。

今の魔導師が使う力は、生命樹が別の形の”恩恵”を発現させ授けた特殊能力であり、魔導師が本来使っていた始祖の力とは違っている。

その力は癒しから元素を操るに至るまで様々だ。

わたしは力を見るたびに、生命樹の持つ”オリジナル”の力が如何なる類の物か考えさせられる。

アレは人が持つには過ぎた、本来は持ちえ無い力だ。扱いを見誤れば、即座に身を滅ぼす。

そうしていく内に、魔導師の力は”色が薄い”ほど、よりオリジナルに近く、”色が濃い”ほど遠い力を持つという認識が確立したのだよ」

今では殆どの魔導師が”色”を持つ様になり、始祖に近い色は滅多に生まれなくなった。

力自体も始祖が持っていた”命を注ぐ力”より、生命樹が新たに与えた力に塗り替えられていった。

「つまり、白銀の髪を持つルキさんは、より”始祖”に近い強い魔導師と言う事ですよね？」

「そうだね。…ただ、ルキが恐れられる原因は違う」

「え…？」

「ルキは”始祖”よりも”原初”に近いのだよ」

”原初の子”と呼ばれた存在、命を育む力と、奪う両極端の力を持った人。

「…それってまさか」

「”原初の子”は”生命樹”自体から力を奪う事が出来、尚且つ”生命樹”を滅する力をもつて居た。しかし神祖も原初の血も継がれ

る事無く絶えた。それでも彼等の血はこの地に息づいている…魔導師は間違はなく血を受け継いでいる。ルキの容姿は”原初”の色そのもので、実際に”力”を視た事がある…ルキは歴史上初めての先祖返りなのだよ」

隔意、忌避、畏怖。

人々が恐れる全てを終わらす力。

「つまり…ルキさんも生命樹を滅ぼす力を…？」

「本人にそのつもりが無くても、人々の恐怖を抑える事は出来ない」

「…でも、ルキさんは滅びなんて…」

「…ルキはそんな事しないだろうね」

人を避けているのは、自分がどういった存在でどんな影響を与えるか知っているから？

人に忌避される色だから、距離を開けるの？

わたしの髪を頑なに隠そうとしたのは、それが原因？

実際に会って、話せば、そんな事無いって”わたし”でさえ感じる事が出来るのに。

過去の恐怖が人を動かすのだとしても、それは

「ルキさんの所為ではないでしょう…？」

「…ただ力があるだけなら良かったんだ。ただしルキには足りないものがある」

「足りないもの？」

「ルキには生まれつき”紋”が無い、そしてこれからも…恐らく難しいだろうね」

ドクン

心臓が嫌な音を立てた気がする。

”紋”が無い、それはつまり……ルキさんは

「…孤児だったのですか？」

「そう。ルキが十四の時にわたしの師が王城に連れて来た。物心ついた時から山奥で一人で生きていたと聞いている。」

14歳なんて、まだ子供だ。

そんな保護されて当たり前前の少年が、たった一人で生きて来た？普通だったら死んでいたっておかしくない。

身体的にも、精神的にも、生きてこれたのは奇跡の様な物だ。

途方も無い時間、どれくらいの夜を一人で過ごしたのだろう。

どんな思いで生きて来たのだろう。

夜空を見上げて、小さく体を縮める少年の姿が頭に過ぎる。

足りないのは紋？

紋は個人を表す大事な物だとリリアンさんから説明されている。

個人証明でもあり、”加護”を受けられるものだ。

けれど紋が無い者にも、後から与える事が出来ると聞いている。

それに魔導師は生まれた時から”恩恵”を身に宿している筈、それならば魔導師に”紋”はそれほど必要無いのではないか？

「一般的に紋は生命樹から加護を受ける為のものだ。ただし魔導師にとっては堰としての役割もあってね、魔導師は恩恵が直接身に宿っている分、ただでさえ自身の力の制御が必要だね。力を見誤ると暴走を引き起こす危険な物だ。その為に”紋”で恩恵セイフアーツの源との繋がりを持つ事で安定を図る。元々”紋”は身に恩恵を授けられた魔導師が自身の身を守る為に考え出した仕組みで、魔導師には欠

かせないんだよ」

わたしの顔が納得していない為に、陛下が続けて言った。
それならば尚更おかしい話だ。

そんなに大事な物なら、何故ルキさんは”今”も紋を持っていないのか。

王城に来たのなら、魔導師だって沢山いるだろうに。

「ルキさんは…避けられているから、紋も与えられないのですか？」

「いいや、ルキは王城に来てからすぐに、紋を与える儀式を受けた…そして失敗した」

「…ど、うして、ですか？」

また心臓が嫌な音を立てた。

唇が震えて、上手く言葉が出ていたか分からない。
ここから先は、容易に聞いてはいけない気がする。
聞いたら元には戻れなくなってしまう様な不安。

それでもわたしは聞かなくては

「ルキは”生命樹の恩恵”を身に宿した”原初”の魔導師だ。だからルキの”深名”を視る事は出来なかった。…恐らくルキと同等もしくは同質の魔導師が生まれないと無理だろう」

「…ルキさん自身が視る事は？」

陛下は首を横に振る。

(そんな)

知らず握り締めていた手が、横に落ちる。
絶望の音が聞えた気がする。
その時ルキさんも同じ音を聞いたのだろうか。

ルキさんはその時、すべてを諦めたのだろうか

「今までルキは自身を見失う事なく制御している。今後もそれを証明し続けるだろうね。けれどそれだけで人々が恐怖を忘れる事が出来ないのも事実」

「……」

「ミオの紋の事も、ルキに視させるのは苦だと思って話して無かった。だから君に紋を贈ったと聞いて驚いた」

「贈る…ですか？」

「^紋加護は祝福だ。魔導師が人に授与する最上級の贈り物だね」

腹を押さえる。

（あの時どんな気持ちで、この紋を刻んだんですか？）
わたしは便利だから”紋”が欲していただけだ。

なりゆきで手に入れたけれど、本来享受するべき、する権利があるのはわたしではないのに。

”落し物”に気を使う必要なんて、何処にも無いのに。
唇を噛んでいないと、自分を罵る言葉が出てきそうだ。

けれどそうやって自分を罵って、感情を発散させる事でこの気持ち
を薄れさせたくない。

勝手にしたのだから自分は関係ないと無視する事も出来ない。
受けた事に何も感じず生きる事も出来ない。

この胸の痛みも感情も、忘れずに、全てわたしが受け入れなくては。

「この話をミオにしたのは、避けないでやって欲しいとか…そういうつもりは無いんだよ。

ただこの世界で唯一ルキと同じ色を共有する事が出来る君には、知っておいて欲しかった。

何よりルキ自身が紋を贈った君だから、知っておいて欲しかった」

それだけ言っただけで陛下は部屋を出て行く。

わたしは残された温室で胸の痛みに耐える事しか出来ない。

月だけが何も変わらず部屋を照らしていた。

落ちる黎明の黒

陛下の言葉が頭の中を占めている。

話しを聞いてしまった時から、囚われてしまうのが決まっていた。

それが同情なのか他の別の感情なのかも分からない。

それでも、今までに無い位に、ルキさんの事が知りたかった。

誰かに呼ばれたわけでも、何かの役目があつて来た訳でも無い。

落ちてきただけのわたしに何が出来るといつのか。

この国にとつても、世界にとつても、何も与える事は出来無いのだ。わたしは”わたし”しか持っていない。

それなのに、この国の人達は何も言わない。

それなのに、わたしに好意を向けてくれる。

だから仕事をしようと思った。

居場所を作ろうと思った、居場所を作つて、必要とされて、そうすればわたしにも此処に落ちてきた”意味”が出来るのではないかと思つた。

そうすれば、与えられる無償の好意に、罪悪感を感じずに済むと思つた。

自分を見失わずに済むと思つた。

けれどルキさんの行動はわたしを混乱させる。

彼の行動は、陛下達と同じ理由からの物では無い様な気がする。

だつてそれほど一緒の時間を過ごした訳ではない。

陛下達とだつて長い年月を過ごした訳ではないが、それでもお互いに気を使い、好意を持つ関係にはなれたと思う。

でもルキさんは違う。

彼の行動原理は、彼自身が持つ理由から来ている気がする。

言葉は無いのに、行動にはルキさん自身の感情が備わっていた気がする。

単なる好意としてではなく、彼自身が何かを思って、わたしに接して来た気がする。

そこに”意味”がある様な気がした。

それが否定でも肯定でも、意味があるのなら。

今無性に彼に会いたかった。

今までは受身だったけれど、始めて自分から動くころと思った。

腕時計を見ると、陛下が部屋を出て行ってから、十数分ほど経っている事に気付く。

その間思考の底に沈んでいたが、部屋の主が此処に現れた気配はしなかった。

思えばルキさんが居ない事が当たり前すぎて、彼自身の居場所について考えた事は無かった。

漠然と寝室や別の場所に居るのではないかと思っていた。

(けれど今は)

温室のドアを出ると、右と左に廊下が続いている。

いつもわたしは右側の廊下の先にあるドアから入って、そして出て行っている。

左側の廊下の先には、”もう一つドア”がある。

そのドアは初日に”内側”から出た時以来、一度も近づかなかつたけれど、今日は意味を持ってそこに近づく。

相変わらず足元の間接照明のみで、壁に手について進まない足元が不確かだ。

ドアの前で止まった。

居るのか、居ないのか。

何となく、居るのではないかと思った。

深呼吸をして、ドアをノックした。

「……」

暫く待ったが反応は無い。

ならばと、ドアノブを捻ると、呆気なく開いた。

約束した訳ではないが、温室以外の部屋には決して立ち入らない、それがこの部屋に来る度に自分の中で決めていたルールだった。

息を飲みドアを内側に押すと、暗闇の部屋の中に廊下側の照明光が入り込む。

部屋の中は真つ暗だ。

「……」

部屋の中はあの時から変わらず、本の影に覆われている。

古書の匂いが部屋の中をつつんでいる。

ゆっくりと”隙間”を通って奥に足を進める。

記憶が正しければ、この先にベットがあった筈だ。

もう一度心の中で、思案する。

居るか、居ないか。

「……」

知らず殺していた息を吐き出した。

緊張していた筋肉が緩み、膝が震えた。

「…居ない」

安堵とも失望とも言える溜息をこぼす。

ベットはもぬけの殻だった。

布団はたたまれ、使われた形跡は見えない。

それどころか、部屋全体が冷え切っており、人の気配を感じない。

元々生活感の気薄な部屋ではあったが、人の居た気配が見当たらない。

（もしかしてこの部屋自体が殆ど使われていない？）

他の部屋かとも一瞬思ったが、他の部屋だと温室を通らないと行けない為、それも考えにくい。

ならいつもルキさんは何処にいた？

何処で寝ていた？

良く考えると、わたしは普段ルキさんが、何をしているのかさえ知らない。

温室には何度か戻っては来ていた、 答だ。

やはりわたしが居るから、部屋に帰ってこないのだろうか。

結局朝方まで起きて待ったが、ルキさんが部屋に戻ってくる事は無かった。

* * * * *
* * * * *

「考えを集中させる、意識がばらけると情報を上手く”紋”に刻めない」

「すみません」

わたしは”ロヴェェさん”ことロヴェェルトさんと、呪いを”紋”に織り込む作業を行っていた。

王城を出る為に陛下にお願いした、条件などが揃った為だ。

わたしが住む事になる家や、わたしのこの世界での身分なども決まった。

家については、先日リリアーレさんと一緒に下見をして来た。

陛下は貴族街に近い、商業地区に小規模の一軒家を用意してくれた。一軒家なんて、一人暮らしには勿体無いと言ったが、何かあった時の為に都合が良いからと言われた。

陛下がそうそう言うのならと、その家を受け入れた。

わたしが王城を出る日が近づいている。

だからお世話になったお礼にと、わたしが知っている料理などのレシピを残しておこうと思った。

文字はやはり全く書けないので、前にリリアーレさんのハンカチで見た時の様に、紙に呪いを織り込む方法にした。

ロヴェェルトさんは、成り行きでわたしが”落し物”だと知ってから、陛下を通じて何かとお世話になっている。

落ち着いて話してみると、品行方正で真面目、学級委員みたいなタイプの人間だった。

前に言っていた通り、”ルキさん”の事が無ければ、落ち着いた人なのだ。

そう考えると一体ルキさんとの間に何があったのか、気になるものではあるが、聞いてはいけけない様な気がしたので、あえて触れずに接している。

ロヴェェルトさんは城下の家に置く”紋”の事をはじめ、魔導で使う照明の事など、本当に色々丁寧な教えてくれた。

今後街で暮らし始めてからも、城との中継になる為に、定期的に様子を来てくれる事になっているので、彼とは今後も頻繁に会う

予定だ。

本当に何から何までお世話になりますだ。

ロヴェルトさんは優秀な魔導師で陛下達と同じ上位魔導師ホイヘンスという位を持つているそうだ。

魔導師の位は上位魔導師・中位魔導師フランドリー・下位魔導師ハトリーとあって体を持つ色で位が決まるそう。

上位と言うだけあって、金髪に若草色の瞳を持っている。

この国に来てそろそろ一ヶ月近くが経つ、わたしも髪や瞳の色を見てその人がどの位の魔導師なのか、何となく分かる様になってきた。（けれど王城に勤めている魔導師は、上位の人が多いので、見た事がある魔導師は殆ど金髪だ）

それからこの世界では日にちの計算を月の満ち欠けを基準とした太陰暦を使っており、1ヶ月は30日で計算されている。

1日は日の出日の入りで計算されて、大体24時間が1日とされる。そして年の計算には太陽暦を使用しているのだが、この世界の1年は驚く事に27ヶ月もある。

つまりこの惑星が太陽の周りを回るのに27ヶ月掛かっていると云う事になる。

食べ物や物など殆どが、地球と同じだったのは驚いたが、理解しやすく助かった。

そもそも”太陽”や”月”が存在していて、同じ様な役割を持っていると言うのも、よくよく考えてみると凄い偶然だろう。

ただロヴェルトさんに言わせると、”太陽”などの単語はこの世界の言葉をわたしが理解出来る様に無意識の内に変換させて聞いたり話してるだけで、実際は違う単語なのだろうと言っていた。

だからお互いの世界で認識されているものは変換されて、お互いが話しても意味が通じるが、片方の世界にしか存在しない単語（例えばカイチュウドケイとか）は、わたしが話しても相手には”音”と

しか認識出来ないらしい。
実際対面して話していても、口の形と出てくる音は合致しているのに、おかしい事だ。

1日が24時間、1ヶ月が30日、1年が27ヶ月のこの世界。
ロヴェルトさんの年齢は27歳だと聞いているが、単純計算でわたしの倍以上の時間を生きている事になる。けれど見た目はちゃんと27歳に見える外見なので、この世界の人は地球人よりも緩やかに成長と老いをしている様だ。

異世界の人間のわたしは一体どうなるのか。気付いたら回りは皆若くて、わたしだけがお婆ちゃんなんて事になりそう。

そんなこんなでわたしの周りが慌しくなってきた為、ここ数日はミシユともリリアーレさんとも会う事が出来ていない。

元々一般庶民のわたしが、王妃や陛下の乳母などに関わっていた事の方が驚きではあるが…。

陛下には報告もかねて、会いに言っているが、先日の話が気まずくて、普通の会話はしていない。

そう、そろそろ時間が迫ってきているのだ。

近いうちに、わたしは王城を出る。

それなのに、わたしの中にはまだ一つだけ遣り残している事がある

あれから何度かルキさんの部屋に訪れたが、部屋の持ち主には会えていない。

それとなく聞いたが、どうやら陛下も会っていないらしい。けれど居場所については見当が付いている様な様子だった。

いっそ陛下に居場所を聞いてみようか、そう思いもしたが、何と聞けば良いか分からず躊躇してしまっ。

「また意識が四散しているぞ！」
「すっすみません！」

今は考えている場合ではなかった。

わたしは意識集中させたが、その後も何度かロヴェルトさんに叱られてしまうのだった。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

夜、何度目かも分からない無人の部屋のドアをノックする

「……………」

やはり反応は無い。

これにももう慣れてしまった。

もう部屋に入る事はしない、温室で朝を迎える事も止めた。

わたしが居るから、部屋に居れないと言うのなら、わたしは邪魔なだけだ。

姿が見えないだけならば良い、何か戻れぬ理由があるのなら。

（陛下はそうかもしれないし、違うかもしれないと言っていた。）

王城の中を探したが、ルキさんは何処にも居ない。

まるで王城自体から姿を消してしまったかの様に、誰の前にも姿を見かけなくなった。

「……………」

邪魔なら邪魔と言えはいいのに、わたしははずれ居なくなる存在だ。王城は生活し辛いかもしれないけれど、ここには陛下が居る。ルキさんを純粹に想う人がいる。

今までも色々な面で、ルキさんを守ってきたに違いないのだ。

今夜も徒勞に終わったと、部屋に帰る事にした。

昼間には温かみの感じる石壁も、夜は硬質な冷たさを醸し出している。

騎士も侍従も侍女達も、騎士団や従事棟に戻ってしまっており、今わたしが居る西棟には人影が全く無い。

響く自分の足音に、まるで世界中で自分ひとりになった様な気分だ。回廊になる硬質な音に、不安な気持ちを押し寄せ、歩くペースを速めた。

もうすぐで自室に戻れる、そう思った時に、遠くの回廊に白い影が見えた気がして、足を止めた。

白い影は回廊に立ち並ぶ柱で、一瞬姿が見えなくなり、また現れた。

「……！」

（あれは　　！）

小さくて顔までは確認出来ないが、迷い無く歩く姿は間違いないかった。

（ルキさん…）

向こうはこちらに気付かず歩いており、やがて建物の中に入って姿が見えなる。

ルキさんが進んでいった方向を見ると、後宮の建物が見えた。

（こんな時間に後宮に…陛下に何か用事なのか？）

とにかく今ならまだ追いつけると、わたしは慌ててルキさんが進んでいった方向に走った。

ルキさんを見つけた回廊は、わたしが居た回廊と平行になっており、この字型の回廊をぐるりと回ってやっとたどり着く。勿論その場にルキさんの姿は見えないので、そのまま後宮方向への道を進む。

少し進むと、同じ廊下の直線上を歩く後ろ姿が見えた。

しかしすぐに道を曲がって、姿が見えなくなった。

ルキさんは後宮に入る為の廊下には向かわず、直前で別の角を曲がってしまった。

（あれ…？後宮ではない…？）

ともかく見失ってはいけないと、わたしも慌てて道を急いだ。

「っわ！」

しかし角を曲がった所で、壁にぶつかってしまった。

物凄い勢いでぶつかった為に、当たり負けして後ろにひっくり返りそうになったが、伸びてきた腕に手を引かれて事なきを得た。

ほっとしたのもつかの間、自分の今の状態に硬直した。

「…あつ」

「……」

ぶつかった壁だと思ったものは、ルキさん自身だった。

ルキさんはぶつかった相手がわたしだと分かって、目を見開いた様に見えたが一瞬の事だった。

わたしは今ルキさんに支えられてる状態で、彼と向かい合っている。折角会えたと思ったが、その瞳を見て考えていた事が真っ白になってしまった。

ルキさんは無感情の瞳でわたしを見下ろしている。

いつだって表情が乏しかったが、それでも今日の表情は何かが抜け落ちてしまっている様だ。

「…ルキさん？」

声をかけると、掴まれていた手が放された。

しかしルキさんは何も言わず、わたしに背を向けるとそのまま歩きだしてしまふ。

(なっ無視　！)

ここでまた居なくなればなら、もう会う機会は無くなってしまふかもしれない。

そう思つて先を進む彼の前に回りこんで、足を止めさせる。

すぐに脇から抜け出そうとするので、横に動いて前を遮る。

反対側に行こうとするので、それも防ぐ。

お互い無言のまま攻防を続ける。

「……」
「……」

その後暫くして漸く諦めたかと思つたが、今度は来た道を戻ろうとしようとする。

(そこまでして関わりたくないのか)

それならそうと、一言だけでも何か言ってくればいいのにと思ふ。

ここまでであからさまに避けられると、こちらとしても気持ちが悪くなる。込む。

最初は無愛想ながらも、ここまで避ける様な態度を取らなかつた。

急に避けられる様なことを、こちらがしたのだとしたら謝りたい。

もし今までの態度が”わたしを拾つた”義理からの事だつたのなら、勝手に部屋に入ってしまった事も謝罪する。

けれど”紋”の事については、わたしでもどうすればいいのかわからない。

通常ならお礼をすれば済むけれど、ルキさんは　。

ルキさんがわたしに抱く感情が分からないので、こちらもどう返せば良いのかが分からない。
今までの事が緋い交ぜになって、自分でもどうすれば良いのかわからない。

気付いたら、ルキさんの腕を取って引き止めていた。
腕を振り払われる事は無かったが、それでも沈黙の状態が続く。

「ルキさん、聞き…いえ話しがあります」
「……おれには無い」

漸く出てきたのは短い一言。
折角振り絞った勇気がしぼみそうになる。負けるか。

「では、聞いてくれるだけでいいです」
「……」

無言。

しかし否定なら場を離れようとするだろう、こうして引き止められているのなら、肯定と見る。
そして今日までずっと会ったら話したかった事を伝えた。

「わたし、近い内に王城を出る事になりました。それで」

今更だが崩れた壁で怪我をした日の事、治療の事、ここに来た時にお世話になった事、わたしに”紋”を与えてくれた事にお礼を言っ
た。

そして部屋に勝手に入って迷惑を掛けてしまっていた事を謝る。

…陛下に聞いた話については、触れなかった。

ルキさんが持つていないのに、わたしが貰ってしまった。なん
てそんな事言える訳が無い。

結局当たり障りの無い事ばかりで、本当に言いたかった事を口に出す事は出来なかった。

ルキさんは、わたしが王城を出るの件で少しだけ反応を見せたが、それ以外は終始無言で話しを聞いてくれた。

「ですから、もし何か用があったら、陛下がわたしの住む場所を知ってるので聞いて下さい」

とは言っても、ルキさんがわたしに会いに来る事は無いだろうと、心の中で愚痴る。

言い終えて、掴んでいた腕を離す。

これでルキさんは行ってしまうだろう、そう思った。

言うべき事は言った、けれど言いたかった事は言えなかった。

それでもこの状態で話をするのは、これ以上は無理だと思った。

けれど何故かルキさんがその場から動く気配を感じない。

話しをしている内に俯いてしまった顔を上げる。

すると、体はそのままに顔だけ振り向いたルキさんと視線が合った。それは先程の何かが抜け落ちてしまった様な物ではなく、何かの感情を訴える瞳。

小さく口が開き、何か言葉を発しようとしてまた噤む。

最終的にルキさんはそっけなく言った。

「わざわざ礼を言う必要は無い。礼も菓子も受け取った…刻んだのはおれが勝手にした事だ」

「…そうだとしても、感謝の気持ちが消える訳ではないのです」「無駄な事だ」

真っ向からの否定。

お菓子を渡したのは感謝の気持ちから…、彼はそれを義務的に受け

取ったのだと、今の言葉で感じた。
作為的な物など何も無い、ただ単純な誠意や感謝の気持ちをもそう
取られてしまった事に、わたしは少なからず愕然とした。
確かに、わたしと彼は親しいと言う間柄ではない。
それでも受けた事に感謝する事は当然の事だ。

「すみません。けれど、出て行く前にお世話になったルキさんに
は伝えておきたかったです」

対峙している彼は迷惑そうに眉を顰めている。
感謝の気持ちはあるが、それを伝えて彼からの見返りを求めるつも
りは無かった。

しかしここまであからさまな態度だと、ここで会った事自体が間違
いだった様に感じられる。

避けられていると言うより、寧ろ嫌われている様に感じられる。

頭の中で先程思った言葉が甦る　　わたしと彼は親しい間柄では
ない　　わたしは今日ここで会って、何をしたかったのだろう。

言いたい事も結局口に出せず、ただ惨めな思いだけが蓄積されてい
く。

価値観や生きて来た世界が違う、けれど話をすれば、きっと何かが
変わる様な気がしていた。

彼とのこの平行線の関係にも、何かが変わると　　。

(え　　?)

自分の中に出てきた考えに、一瞬理解が追いつけなかった。

それではまるで、自分がルキさんとの関係に、何かしらの変化を求
めている様では無いか。

「何故ここを出て行く必要がある」

ルキさんの落ち着いた声によって、その思考は中断させられた。

掛けられた言葉は、酷く無感情で、相手の意思は全くつかめない。

「……此処にいる理由が、わたしにはありませんから」

落し物として、この国にやってきた。

色々あって成り行きで、王城に厄介になっていたが、ずっとと言う訳には行かない。

誰かに呼ばれて、必要とされて、此処に来た訳でも無いのに、のうのと庇護されている訳には行かないのだ。

王城で仕事に就く事も薦められたが、王族に近い人間には、彼等の主と親しくしている所を見られてしまっている、今更その中で働くのは難しいだろう。

それに王城での仕事はどれも給料が良いらしく、募集をしていなくても常に欠員時の申し込みが殺到している状態。

そこにパツと出のわたしが割り込む事は出来ない事だ。

何よりも、此処に居たら親しい人達に頼ってしまう。

わたしのここでの親しい人達と言ったら、ここで働く全ての人が”仕える人”なのだ。

そんな事は要らない争いを生むに決まっている。

「寄る辺も無しに無理だ、やめておけ」

しかし返すルキさんの言葉は、わたしの考えを否定する。

否定、否定、否定。

先程から彼の言う事は否定ばかりだ。

確かに定期的にロヴェルトさんと連絡は取るが、普段は一人で暮らす事になっている。

それでも王城を出る事は、わたしも悩んで考え出した事だ。

陛下達も納得して後押ししてくれている。

その為に今まで準備や勉強などを頑張ってきたのだ、既に準備はほ

ば整っている。

それを今更ルキさんに否定される言われは無い。

「苦労はするかも知れませんが、ただ此処で暮らすよりずっと自然な事です。それに元の世界でも一人暮らしだったので、問題はありません」

きっぱりと自分の意思を伝える。

成人して社会に出て一人暮らしも数年経験しているのだ、今更その事を苦には思わない。

仕事の面でも苦労する事は分かっている、それでもこの道以外に何を選べると言うのか。

わたしに選択する手札は少ない、その中から一番良いと思われる物を選んだつもりだ。

それなのに対するルキさんはわたしの返した言葉が気に食わないのか、目に宿る光は冷たく冷めていった。

「やめておけ」

もう一度ルキさんは冷え切った声で、繰り返した。

けれどわたしが返す答えは決まっている。

「もう決まった事です。それに…ルキさんに言われる筋合いは無いです」

少し感情的になっていたのだと思う、言ってしまった後にわたしは後悔した。

それはルキさんを拒絶する言葉。

何があっても、誰かに対してこんな言い方をするのは良くなかった。自分を否定した相手に対して後悔する　おかしな事だが、わた

しは直前に言った言葉をすぐに撤回したくなった。
しかしルキさんの次の行動で、それも出来なくなった。

素早く振り返ったルキさんは、わたしの肩口を掴むと強引に壁に押し付けた。

声を出す前に首を掴まれ、自然と息が詰まる。

強くは無かったので体に痛みは無いが、見下ろす彼の冷たい視線に、体は硬直し息をするのも戸惑われた。

「お前は無力だ。大人しく王ロゼに守られてろ」

「…そんなの…出来ません」

何とか言葉を返す。

実際問題として、その庇護されたままなのが嫌で、王城を出ると決めたのだ。

淡々と話すルキさんだが、彼の力は強く振り解く事は出来ない。

指を外そうとするが、定められた力はわたしが肯定するまで、緩められそうも無い。

「この腕を振り払えないお前が…い…時…ど…んだ」
「…え？」

後半は声が小さくて、よく聞えなかった。

しかし首に詰められた力が少しだけ緩む。

弱々しく、頼りない物で、思わず疑問符が出た。

ルキさんの目に浮かぶのは哀傷。

どうしてそんな感情をわたしに向けるのだろうか。

「此処ならば、王が庇護してやれる。だが街に出たらそれも容易には行かない」

また首を掴んだ指に力が込められた。

力が入るにつれて、呼吸をするのも難しくなってくる。

それと共に、ルキさんの顔にも苦悩の色が浮かぶ。

どうして、そんな顔でわたしの見るんだらう。

わたしを拒絶する言葉を言いながら、わたしを案じる様な態度を見せる。

そして同時に気付いた。

どうして灰色の瞳に安心するのか

今まで彼のわたしを見る瞳は、優しい色を宿していた。

それを見ると、生まれたばかりの赤子が親に守られている様に、真綿に包まれ自分が慈しまれている様な感覚を覚えるのだ。

だから今まで何をされても、抵抗らしい抵抗も出来なかったのだ。

(…どうして、そんな目でわたしを見るんですか?)

自分の手を下ろして完全に抵抗をやめる。

「…助けて貰う必要は…もう無いんです。彼等が庇護するべきは自国の民であって、わたしは…もう十分に力を貸して貰いました。…これ以上は分不相応です」

静かに一つ一つの単語をかみ締める様に伝えた。

これ以上此処に居たら、最後まで依存してしまいそうで怖いのだ。

わたしには何も無いこの世界で、募るものが出来てしまう事が、何よりも恐ろしい。

それを持った時、失う時、わたしはどうなってしまおうのか分からない。

わたしは”わたし”しか持って無い。

けれどわたしは、この世界には必要とされた訳では無い、偶然からの落し物だ。

彼等にとって”わたし”は絶対に必要な存在と言う訳ではない。

此処で受けた事は、彼等の誠意からであって、わたしが特別だからと言う訳ではない。

自身を気に入られて向けられる親愛だとしても、片方からだけ享受されるだけの関係と言うのは長続きしない。

その誠意を当然と受け取る事は、わたしには出来ない。

「街は安全な所だけではない…」

「勿論知っています、けれどそれは住んでいる人全員に言える事でしょう?」

「…何かあつてからでは遅い」

「それで王城の中で閉じ籠もって居ると?それこそ非現実的です」

「何かあつて王や王妃を煩わせるのは迷惑だ」

さつきから、ルキさんは「王に頼れ」「王や王妃」など、全て他人の事ばかりだ。

けれど件の二人は既に納得しているのだ、それを蒸し返すのはおかしい。

つまり、王城を出る事に反対なのは”ルキさん自身”と言う事なのだ。

避ける人物が王城に居たら煩わしいのは、ルキさん本人ではないのか。

既にわたしの中で、自分はルキさんから避けられている、と言う事実が確立している。

その彼から受ける表情の意味や、態度には疑問を抱くが、避ける本人からしてみれば、今回わたしが王城を出て行く事は願っても無い事のはず。

「陛下やミシユは…王妃様は、わたしが街で暮らす事を許してくれています」

「お前は这个世界では変則的な存在だ…何か起きるか分からない…」

「っ…ならいつそ殺せば良いです！死んで悲しむ家族も居ない、落し物一つ”壊して隠す”。それで全て元に戻るんですからっ！」

”変則的な存在” その言葉がわたしの中で抑えていた感情をぶちまけてしまった。

今まで考えない様にしつつも、いつも何処かで燻ぶっていた想い。わたしが居る事・やる事で、誰かに煩わしさを与える可能性があるなら、全ての禍根を断ってしまえば良い。

自分でも酷く自虐的で投げやりな言葉だと思っ。

ここに家族が居ない事は事実、わたしが死んだ所でその事実も知り様が無い。

行方不明になって今頃心配を掛けているだろうが、こちらの事情を伝える事も出来ないのだ、生きていても死んでいても、どちらにしろ悲しませている。

心配してくれる人は居るけれど、例え悲しんでくれたとしても、一過のものに過ぎない。

いずれ風化して消え行くものだ、それならいつその事”今”終わらせてくれた方が楽だ。

本来だったら、”森”で全てが終わっていたかもしれないのだ。

「……治療せずに放っておけば良かったんです」

あの時の全身から力が抜けていく感覚を思い出す。

意識が闇に吸われる様に、あの時わたしの命もそのまま消えていく筈だった。

それを引き伸ばしたのは、目の前の人だ。

頭上で舌打ちが聞え、肩と首を押さえていた手が放される。

今度こそ、呆れて立ち去るだろうと思った。

しかし次の瞬間腰を引き寄せられ、感じたのは体を包んだ”古書の匂い”。

ルキさんは隙間も無くわたしを抱きしめている。耳のすぐ傍で彼の呼吸が聞えて、体が硬直する。

「ルキさ…」

「黙れ」

先程よりも強く抱きしめられた。

痛い位に腕に力が入っているのに、抵抗する気が一気に消え失せた。その腕の力は必死で、まるで縊られている様でもあった。

どれ位の時間が経ったのか分からない、わたしを腕に抱いたままでルキさんが話し始めた。

「…此処でなら王が居る、何かあっても王や王妃がロゼお前を守る」
ハーミッシュエラ

先程までの冷たい言い方とは違い、穏やかで人を落ち着ける様な言い回し。

優しく髪を撫でられる様な感触に唇が震えた。

まただ、此処に居れば安全だと彼は言う。

街は確かに絶対に安全と言う事は無いかもしれないが、治安は良いと聞いている。

慣れない環境にだって、少しすれば慣れる。

日本でだって、仕事で上京して一人暮らしを始めた時は、不安で一杯だったがそれも時間の経過と共に薄れていった。

それなのに、ルキさんは些細な危険や憂いからさえ、わたしを遠ざけ様としている様に感じられる。

けれどわたしが王城に居たら

「…貴方はわたしを避けてます」
「ああ」

すぐに返された言葉に心臓を締め付けられる。
こうして本人の口から言われると、自分で想像していたよりもずつと辛い物だと気付いた。

本当に今更なのに、言われた事に傷ついた自分が居る。

「…だが傷付いていれば…放っては置けない」

主語は抜けているが、誰の事を言っているのかは分かった。

「…放っておけばいいじゃないですか」
「無理だ」

益々分からない。

わたしの事を避けていたのは彼自身だと言うのに。

自分には立ち入らせなくせに、人一倍わたしに気を使うおかしな魔導師。

何も教えてくれないのに、容易にわたしの”居場所”を作ってしまった。

ずるい人だ、ルキさんの纏った外套を掴む。

「お前が傷付くのを許容は出来ない、王の庇護^{ロセ}下に居る」
「…言ってる事がメチャクチャです」

陛下には陛下のすべき事がある。

ここには王城に居る人にとっても大切な役目がある。
わたしに感けている訳にはいかない。

結局こんな事を言い合っても、どうにもならないと思った。

わたしとルキさんとは、見ている所が違う所か、ルキさん自身が同じ舞台に立とうとしていない。そんな状態でお互いの意見を言い合っている、どうにもならない。やはり、平行線のままだ。

「…わたし、部屋に戻ります」

そっと胸を押すと、簡単に開放された。

けれど彼の顔を見る勇氣は無い。

俯いたまま、少しだけお辞儀をしてわたしはルキさんから離れた。言葉も何も、引き止められる事も無かった。

わたしは振り向く事も出来ずに、そのまま自室へと走り帰った。

* * * * *
* * * * *

薄暗い回廊に一人立ち竦んでいると、後ろから声を掛けられた。

「心配だから」位言ってあげれば良かったんじゃないかい？」
「……」

振り向くと、案の定この城の主がロープを纏った姿でこちらに歩いてきていた。

口ぶりから途中から話しを聞かれていたのは間違いない。

「…関係ない」

「そうかい？わたしやハーミシユリエラを買ってくれているのは嬉しいけど」本当は自分が」とわたしには聞えたよ」

「……………そんなの可哀想だ」

「そう、否定はしないのだね」

「……………」

揚げ足を取る様な言い方は顕在だ。

このまま話しをしても不快になるんだけど、場を離れる事にする。擦れ違う際にロゼは聞えるか聞えないか程の小さな声で発した。

「お前はそうやって、ライツェル・ベル・ウエルシア以外の人間を拒否し続けるつもりか？」

思わず足を止めてロゼを振り返ってしまっていた。ロゼの顔には哀愁が漂っている。

「ルキ、彼はもう死んでいる。お前の養父はもう」

その先の言葉は聞き取らなくなった、気付いたら手が出ていた。

殴られたロゼは体勢を崩して、床に座り込んでいる。

押さえた口元からは、唇を切ったのか血が滲んでいた。

けれど向けられる憐憫は、先程と変わらずこちらを注視している。

その顔で見られるのは何度目だったか。

最近では見せる事の無かったそれに戸惑った。

* * * * *

「…逃げたか」

こちらを殴った後、居た堪れなくなったのか、ルキは魔導で姿を消した。

全く何時までも成長しない弟子だと思った。

師が亡くなつてから十年が経つ。

王城にルキを連れて帰つて来た時には驚いたが、ルキは師には懐いていた…様に見える。

師が見聞の為に王都を出て数年、その旅の途中でルキと出会い、数年一緒に旅をして過ごしていると聞いている。

その間に師とルキとの間で培われた物は、兄弟子とはいえ、容易に立ち入る事は出来ない。

ましてや肝心の師が既に亡くなっている為、ルキの中で師の存在が絶対的な存在となつてしまっているのだろう。

死んだ人間には勝てない。

そう思つても年々塞ぎ込む期間が長くなるルキの事を心配しているのも事実。

それに。

「…今際の師ライツからお前の事を頼まれているのだよ」

殴られた頬に治癒を与えて、立ち上がる。

誰も聞いていないのに、つい口に出して零してしまう。

出来る事なら、師がルキに与えた様に、平穏を与えてやりたかった。それだけの力は持っていたが、それを実現しようとしてもルキ自身が拒絶するのだ。

王として兄弟子として、他の人間よりも感情を寄せてくれてはいるが、それでも本心を明かす事は滅多に無い事でいつも義務的な態度だった。

師が生きていた頃は、もっとルキを近くに感じられた自分の無力さに握った拳から血が滲んだ。

ミオに対する態度が何なのかは分からないが、それがルキを開放する事に繋がればと思う。

彼女には何も望まないと言っておきながら、何処かで期待してしま

っている自分が居た。

溜息が零れる。

あまり遅いとハーミシユリエラが心配するだろう、今度こそ後宮に戻る事にした。

その日一人の魔導師が姿を消した。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

出立の日は、とても晴やかな天気だった。

わたしは最後に王城を振り返る。

決して長い間居た訳ではないが、この世界で一番馴染み深い場所。未練になるので、お別れは部屋で済まし、一人で城を出る。

何かあつたら頼れと言われたが、出来るだけそうならない事を願う。

この門を潜れば、そこがこれから馴染み深い場所になっていくだろう。

あの白い部屋で朝を迎える事も、もう無い。

ルキさんはあの後、完全に城から姿を消して、行方が掴めないと言

う。
一瞬頭の中に浮かんだ灰色の瞳を打ち消し、わたしは外の世界に一歩足を踏み出した。

第一章 落ちる黎明の黒

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2329s/>

魔導師の落し者

2011年6月18日12時34分発行